

マリオネット・クロニクル

# 傀儡師紫苑アナザー

秋月あきら

暗い暗い闇の中。

傀儡師である彼の悪夢は覚めることを知らなかった。

彼は自由に操ることができるところこそ“その”心を知りたかった。

放課後、夕焼けに染まる学校の屋上に、中嶋なかしま奈那子まなこは篠原しのはら香穂かほを呼び出した。

「奈那子ちゃん、こんなところにわたしを呼び出して何の話い？」

「遅かったじゃないの！」

「何でそんなに怒ってるの？ わたしが遅刻するのはいつものことじゃん」

「自覚あるなら直しなさいよ！」

今日の奈那子はいつてもよりもカリカリしていて、香穂に対しなぜか冷たく、避けられていたように香穂は感じていた。

奈那子が誰もいない放課後の屋上に香穂を呼び出した理由その理由が香穂を避けていた理由でもある。

「今日の奈那子ちゃん変だよ……わたしのこと避けてたし、それに気づくと睨んでた」

「自分の心に聞いて見なさいよ。自覚あるんでしょ？ 心の中であたしのことあざけ笑ってるんでしょ？ ふざけんじやない

わよ！」

奈那子は同じクラスの秋葉愁斗あきはしゆうとに想いを寄せていて、そのことを親友の香穂にことあることに話して相談していた。今日はそのことについて香穂を呼び出した。

「今にも泣きそうな顔をしている香穂は首を大きく横に振った。『わかんないよ、わたし……奈那子ちゃんに何かしたかなあ？』したんだったら謝るから許してよお」

「そうやって泣いたフリして謝れば許してもらえなくても思ってるの？」

「ウ、ウソ泣きじゃ……ないよ」

消えそうな声と潤んだ瞳で香穂は奈那子に訴えかけたが、奈那子は全く信じようとしなかった。

今日、学校で奈那子はある噂を耳にした。

「ねえ、知ってる？ こないだの日曜日、香穂が秋葉さんと楽しそうにデートしてたんだって。」

「ウソ、マジで!?! あの香穂が？」

「きつと、あの潤んだ瞳で秋葉くんには付き合ってくださいい」なんて言ってみつめちゃったりしたのよ。」

「秋葉くんもあの瞳には勝てなかったわけか、あはは。」

「香穂きつとこれからイジメとかに遇うんじゃないの？」

「あるある、絶対上級生とかに目つけられてイジメられるね。」

奈那子は噂話をしている横に座っていたのだが、全てを聞いていたそして、腹の底から湧き上って来る何とも言えない感情

で胸が爆発しそうになった。

悲しみが憎しみに変わり、親友が一瞬にして敵に変わった。香穂を呪い殺してやりたいとも思った。

休み時間に何食わぬ顔で香穂が奈那子のところに来た時は、思わず奈那子は香穂に飛び掛かりそうになってしまったが、感情を身体の奥底に抑え込み、机の下で強く握り締める拳はわなわなと震えていた。

誰もいない屋上で、奈那子は自分の前に立っている香穂に飛び掛かって首を強く握り絞めてやりたかった

自分の親友に裏切られた。奈那子はそう思うだけで憎悪が心の奥底から沸々と煮えたぎって来た。

奈那子は凄まじい形相で香穂に詰め寄る。

「心当たりないの？ あたしにあんなヒドイことしてとぼける気？」

「わかんないよ、わかんないよ……」

ついに香穂は本格的に泣き出してしまい、目頭に両手を当てて肩をひくひくと震わせていた。

相手が完全にウソ泣きをしていると思っっている奈那子は、香穂の腕を掴んで無理やり下にやって、香穂の目を見て怒鳴った。

「うざいから泣くの止めなさいよ」

「……………うう……………ううん……………」

香穂は一生懸命涙を止めようとするが、身体が振るえ、嗚咽は止まらず、目からは止め処なく涙が流れては地面を濡らしていく。

涙目で香穂は奈那子の瞳をしっかりと見据えていた。

「わからない……って言うてる……でしょ」

「何それ、もしかして罪悪感とかぜんぜん感じてないわけ？

あんたってそういうやつだったんだ。今まであたしは騙されて

わけ？ 親友ごっこか何かのつもりだったの、そうやってあた

しのこと裏切って遊んでるわけ？ 答えなさいよ！」

怒鳴りつけられた香穂の鳴咽が激しくなり、身体が異常なまでに震えている。

「ご、ごっこなん……うう……かじやない……」

「何言ってるかわかんないでしょ、泣くの止めなさいよ」

奈那子が怒ることを止めれば香穂は泣き止むだろうが、血が頭に上ってしまったている奈那子には相手を問い詰めることしか頭がない。

いつまでも泣き止むことのない香穂に腹を立てた奈那子は、理不尽に香穂の頬を強く引つ叩いた。

叩かれた香穂は反動でコンクリートの地面に倒れ込み、すぐに赤くなつた頬を押さえて怯える表情で奈那子を見つめた。

「わ、わ……たし、奈那子ちゃんに叩かれる……ようなことしてないよ」

「まだ、とぼける気なの？ わかったわよ、言ってあげるわよ！」

地面にへたり込む香穂を見下ろして奈那子は怒鳴った。

「あんたが秋葉さんとデートしてたの見たって人がいるんだけど、どういうこと？」

「えっ……なに……それ？」

驚いた顔をしたまま香穂は口を半開きにして奈那子を見つめた。こんな顔をする香穂を見て、奈那子はどこまでとぼければ気が済むのだろうかと余計に腹を立てた。

「こないだの日曜日に秋葉さんとデートしたんでしょ!？」

奈那子はなおも香穂を問い詰めるが、香穂は大きく首を横に振って否定を続けた。

「違うよデートなんかしてないよ、たまたま買い物に行ったら秋葉さんと会って、そ、しれで、そのまま一緒に買い物しただけ……」

「もういい、もういいわよ！」

香穂の言葉など全く耳に入らない様子の奈々子は、香穂の腕を強く掴んで強引に立ち上げさせた。

他の人が秋葉とデートしていたらならば、まだ許せたのかもしれない。奈那子は親友だと思っていた人に抜け駆けされて裏切られたことが一番ショックだった。

一番信頼していて、一番相談していた人。奈那子が秋葉のことについて香穂に相談すると、いつも香穂は親身になって聴いてくれた。

泣きながら、激怒しながら、いろいろな感情が入り混じった奈那子は香穂に詰め寄った。

自分がなぜ泣いているのかわからないまま、奈那子は香穂の肩を何度もゆさぶった。

「どうして、どうして、どうして！」

「奈那子ちゃん、信じて……」

「この裏切り者！」

「きゃっ！」

奈那子に押し飛ばされた香穂はフェンスに激しく背中からぶつかった。その拍子に錆び付いて古くなっていたフェンスがガタンと外れ、恐怖に歪む顔をした香穂はバランスを崩して後ろに倒れそうになった。

奈那子はすぐに手を伸ばした。

「あっ!？」

だが、奈那子が手を伸ばした時にはすでに香穂の姿はなかった。

耳を塞ぎたくなるような悲鳴が聴こえ、それが途絶えて静かになってすぐに何か地面に激しくぶつかった音が聴こえて来た。

奈那子は息を呑み込み瞬時に何が起きたのかを理解した。見なくてもわかってている。いや、見るのが恐かった。

しばらくその場で愕然としてしまっていた奈那子であったが、その顔が見る見る蒼ざめていき、意識が一瞬遠退きそうになっ  
てしまった。

自分は人を殺した　それも友人を殺してしまった。けれど  
現実味が沸かない。奈那子は夢の中にいるような気分になった。  
壊れたフェンスの下を覗こうとしたが、足が竦み叶わなかつ  
た。もし、本当に死んでいたら　香穂が死んだことを認める  
のが怖かった。

結局、奈那子は香穂がどうなったのか自らの目で確認できないまま、逃げ出すことしかできなかった。

校内に入り、廊下を全速力で走った。

誰にも見られてはいけない、こんなところを見られてはいけない。そう思いながら奈那子は下駄箱に急いだ。

「中嶋、まだ残っていたのか？」

後ろから声をかけられた。国語科の教師の声だ。だが、振り向けなかった。

奈那子は声を無視して逃げた。

下駄箱に着いてから、奈那子は声をかけられたのになぜ逃げたしまったのだろうと、酷く後悔をした。あんな不自然な行動をしたら疑われるではないか。言い訳か何かしておくべきだったのではないか。

靴を履き替えた奈那子は再び走った。今は一刻も早く学校から離れたかった。

香穂が落ちた場所は学校の裏庭だ。あまり人の行く場所ではないが、明日には絶対発見されるに違いない。

無我夢中で正門を飛び出した奈那子は誰かとぶつかってしまった。

「きゃっ、ご、ごめんなさい」

相手のことを少しだけ見て奈那子は逃げた。

動揺して奈那子は無我夢中で走って逃げたが、ぶつかった人物があまりにも特殊な格好をしていたので強く印象に残ってしまった。



大きな鍔のある黒い帽子から白銀の髪が胸元まで流れていて、身に纏っているものは黒いインバネスと呼ばれるコートだった。あの人物の全身は全て闇色に包まれていた。

女性のようだった気がしたが、もしかしたら男性だったかもしれない。服装が強く印象に焼け付きそこまではわからなかった。

ぶつかってしまった人物のことを考えている間は香穂のことを忘れられた。だが、すぐに再び香穂のことを思い出してしまふ。

学校からだいぶ離れたところで、奈那子は走るのを止めてゆつくりと歩いて自宅に帰ることにした。

走ったせいで余計に心臓が激しい鼓動を打っている。苦しくてどうしようもない。

息を整えながら奈那子は今後のことについて考えた。だが、冷静になれない。感情的になって頭が混乱している。

気がつくと奈那子は自宅の前に立っていた。

玄関に立った奈那子は大きく深呼吸をしてからドアノブに手をかけた。

いつもどおりにしようとしたができず、奈那子は階段を駆け上がり自分の部屋に飛び込んだ

部屋に入った奈那子は電気もつけずに、カーテンも全て閉め切つて、ベッドに飛び込んだ。

暗い部屋の中で奈那子はベッドの上で膝を抱えてうずくまつて考えを巡らせた。

震えが急に身体を襲った。

自分の部屋に塞ぎ込んだ奈那子は、夕食も取らず、お風呂も入らず、母が心配して部屋に尋ねて来ても気のない返事を返すだけで、部屋から決して出なかった。

ベッドの中に潜り、奈那子は何かから隠れるように怯え震えていた。

自分は友人を殺した。人を殺したほど憎んだことはこれまでもあったが、それは言葉の綾だ。奈那子は殺したという真実に胸を潰されそうになった。

明日から自分の生活は？ 警察に捕まったらどうしよう？  
自分はこれからどうなるのだろうか？

いろいろなことが奈那子の脳裏を駆け廻り解決されることがない。問題が浮かんでは頭の中に蓄積されていく。

まるで、世界の終わりが来てしまったようだ。  
夜の闇が深さを増していく。

よく眠れないまま夜が明けてしまった。

奈那子は目覚まし時計を見た。七時半を少し過ぎたくらいだ。学校に行くべきかどうか奈那子迷った。できれば休みたい。

しかし、昨日の今日で学校を休んでは自分が疑われるかもしれないし、香穂がどうなったのかも気になるし、周りの人々の反応も気になった。

気になることが多過ぎていても立ってもいらなくなかった奈那子は、意を決してベッドから飛び起きた。

食卓についた奈那子は箸を持ったまま手を止めてしまった。いつもはちゃんと食べている朝食だが、今日ばかりは喉を通らない。

「やっぱり、いらぬ」

箸を置いて立ち上がった奈那子は自分の部屋に戻ってしまった。そんな奈那子を心配そうな顔をしている母親が止めようとしたが、母の声は奈那子には届かなかった。

自分の部屋に戻った奈那子は制服に着替えようとしたが、身体が妙に重くて着替えが億劫に思えた。

香穂はもう発見されたのだからかと奈那子は考える。もし、発見されているのなら、学校は臨時休校になって自宅に緊急連絡網が回って来るに違いない。ということは、まだ香穂は発見されていないのかもしれない。

学校に行けば全てわかるだろう。そう思いながら奈那子通学用のバッグを探した。

「……あつ」

奈那子の顔が蒼ざめていく。バッグを屋上に置いて来てしまったのだ。

致命的としか言いようがない。壊された屋上のフェンス、その現場に残されていたバッグ、国語科教員の目撃証言。有りとあらゆるものが犯人は奈那子だと言っているようなものだ。

学校に行くべきか再び迷う奈那子。このままどこか遠くへ逃げてしまうのがいいのではないかと考えるが、未成年の自分が警察から逃げ回るなど無理な話だと思い首を横に振った。

奈那子はあることを思い出そうとした。犯罪を犯しても罪に問われない年齢があったような気がする。自分はどのようなのだらうか？

時計は八時を少し過ぎている。もう学校に行かなくては遅刻してしまう。

吹っ切れた感じで奈那子は家を飛び出した。全てがどうでもよくなってしまう、自分自身の判断では何もわからなくなってしまった。

学校に向かう途中、横道に入ろうと何度も考えたが、それが何の意味になるのかがわからず、流されるままに歩いてしまった。

誰かが奈那子声をかけた。しかし、奈那子は気づかずに歩き続ける。

「中嶋さん、おはよう」

やはり奈那子は気づかずに歩いている。

前方に信号を見せて来た。

ぐぐつと奈那子は後ろに引つ張られ、その前を車が通り過ぎて行った。

「信号赤だよ、大丈夫？ 今日の中嶋さん少し変だよ」

ここでやっとはっとした奈那子は自分の腕を掴んでいる人物を見た。

同じクラスの秋葉愁斗。奈那子の腕を掴んでいたのは彼だった。

「僕があいさつしてたの気づいてた？」

「あ、ごめん……ぜんぜん気づかなかった」

家からここまでの記憶が奈那子には曖昧で、気がついた時には学校近くの信号にいた始末だ。

「何かあったの？」

「ううん、別に何も……」

何も無いわけがない。奈那子の脳裏に焼きついた香穂が恐怖に顔を歪ませた時のあの表情。

好きな人に偶然出逢えたというのに、奈那子はちっとも嬉しくなかった。むしろ、会いたくなかった。

奈那子は秋葉と話すのが怖かった。自分が香穂を殺したのに彼は彼も絡んでいる。彼のせいで香穂を殺してしまったと言っても過言ではない。

目の前で自分のことを心配するひとにだけには、何があるかと奈那子は自分が香穂を殺したことを知られたくなかった。

「中嶋さん、本当に大丈夫？」

「うん、平気だよ、そんな顔しないでよ」

無理やり奈那子は笑顔を作ったが、その顔を見る秋葉の表情は曇っている。

吸い込まれてしまいそうな黒瞳を持つ秋葉愁斗。その妖しい魅力を持つ瞳の奥に、自分の姿を見た奈那子はすぐに顔を伏せてしまった。

「どうしたの？」

不思議そうな顔をする秋葉だが、奈那子は何かに怯え、顔を伏せたままだ。

「何でもないの、何でもない……」

急に奈那子は走り出した。

「待って中嶋さん！」

手を伸ばす秋葉に構わず、奈那子は逃げるように走った。

奈那子が気づいた時には、彼女は教室の前に立っていた。

いつものクラス　だが、今日は入るのが怖かった。いつもは香穂が自分よりも早く来ている。

奈那子は教室の中に入ると辺りを見回した。そして、いるはずのない香穂の姿を捜してみる。

教室を見渡していた奈那子は信じられぬ光景を目の当たりにした。

殺してしまったはずの香穂が何食わぬ顔で友達と楽しそうに話しているのだ。

奈那子に気がついた香穂はにっこりと笑い無言であいさつをした。

あり得ない光景を見て、奈那子は一瞬息をすることさえ忘れてしまった。

目を見開き、息を呑み込んで何も言えなくなった奈那子のもとへ、香穂がバックを持って近づいて来る。あのバッグは屋上に忘れたはずの奈那子のバッグだ。

「奈那子ちゃん、おっはよ！　昨日さあ、バッグ屋上に忘れて行ったでしょ」

屈託のないまぶしい香穂の笑顔を網膜に焼き付けながら、奈那子は恐怖のあまり声も出せないまま気を失って倒れてしまっ

た。

保健室で目を覚ました奈那子は、目の前にいる人物の顔を見て大きな悲鳴をあげてしまった。

「きゃーっ！」

保健室の先生が何事かと仕切りになってカーテンを開けて入って来た。

「どうしたの!？」

原因は目の前にいる人物のせいだ。そう、香穂がいた。

香穂は目を丸くしながら不思議そうな顔をして奈那子の顔を覗き込んでいる。保健室の先生も心配そうな顔をして奈那子を見ている。

「中嶋さん何かあったの？」

“何か”なら目の前にいる。だが、奈那子はそのことには触れなかった。

「奈那子ちゃん平気？」

すぐ近くにいる香穂とは決して視線を合わせないで、奈那子はどうにか口を開いて声を絞り出した。

「大丈夫です、叫んだりしてすみませんでした」

「何かあったら私のことを呼びなさいよ」

保健室の先生はそう言うのとカーテンを閉めて行ってしまった。近くに保健室の先生がいるとはいえ、二人つきりにされたのと変わらない状況だ。

香穂が目の前にいる。死んだはずの友人がいる。それも自分

が殺した友人がいる。奈那子は何も言えずにうつむきながら一点を見つめていた。

なぜ、死んだ人間が生き返ったのか？

もしかしたら死んでいなかったかもしれない。

夢なのかもしれない　どちらが？

これが夢なのか、あの出来事が夢だったのか？

混乱する奈那子はあるのバッグを思い出した。自分のバッグはどう説明すればいいのだろうか？

香穂は『バッグ屋上に忘れて行ったでしょ』と確かに言っていた。

恐ろしさ何が何だか奈那子はわからなくなってしまうた。だが、そのことについてすぐ近くにいる香穂には恐ろしくて何も聞くことができない。

香穂は“何事”もなかったように奈那子に話しかけて来た。

「今昼休みなんだけどね、ちょうどわたしが見に来た時に奈那子ちゃんが目を覚まして、いきなり叫ばれちゃったからビックリしたよお」

そんな長い時間、自分は気絶していたのかと奈那子は思ったが、香穂に返事を返すことはしなかった。香穂と口を聞くのが死ぬほど怖い。

「どうしたの奈那子ちゃん、身体が震えてるよ？」

震える奈那子に香穂が手を伸ばした瞬間、奈那子はその手を振り払って叫んだ。

「触らないで！」



「……ご、ごめん」

哀しそうな顔をする香穂であったが、そんな顔など見ようとせず、奈那子は冷たく言い放った。

「ひとりにして、もう少しここで休む」

「ごめんね奈那子ちゃん、気が利かなくて。また来るね」

泣きそうな声を出した香穂はそのまま行ってしまった。奈那子はもう来て欲しくないと思った。一生自分の前に現れて欲しくないというのが奈那子の正直な気持ちだ。

死んだ人間が何食わぬ顔をして自分の前に現れるなんて、奈那子には到底信じられないことだった。

奈那子の頭はだんだんと冷静さを取り戻して来た。香穂が屋上から落ちたのは絶対現実だったし、今も絶対に現実だ。では、なぜ香穂が生きているのか？

屋上から落ちた香穂は実は死んでいなかった。奈那子は実際に死体を確認したわけではない。だが、何かが地面に落ちた音は聴いた。

死んだ人間が生き返ったとしか考えられない。だが、そんなことが現実であり得るのだろうか？

とにかく今言えることは、香穂が生きているということ。結局それだけしか奈那子にはわからなかった。

いつの間にか奈那子の心から香穂に対する恐怖心が消えていた。香穂は生きていて、いつもどおりの香穂だった。何も恐れることはない。

奈那子が考え事しているうちに時間がだいぶ過ぎてしまった

らしく、いつの間にか放課後になっていた。

保健室の先生もどこに行ってしまった足音が聴こえたので、今は奈那子ひとりっきりで保健室にいる。

保健室のドアが開く音がした。足音は迷わず奈那子のベッドに近づいて来て、カーテンが開けられた。

奈那子は香穂が尋ねて来たのかと思ったが違った。尋ねて来たには秋葉愁斗だった。

「中嶋さん具合はどう？」

「う、うん、だいぶよくなった」

「いきなり教室で倒れたって聞いて心配だったんだ。それと、今朝のこともあるし」

今朝のことは奈那子が秋葉を置き去りにして、いきなり走り出してしまったことを言っている。

「ごめんね秋葉くん……今朝のあたしはちょっとどうかしてたんだ、でも平気、もう元気になったから」

今の奈那子は無理せず笑うことができた。

秋葉はほっとした顔をして微笑んだ。

「大丈夫そうだね、その笑顔を見て安心した」

「うん」

好きな人に心配してもらって奈那子は本当に嬉しかった。このまま二人っきりの時間がいつまでも続けばいいのにと奈那子は思った。

秋葉は自分の髪の毛の後ろを触りながら少し口ごもった感じと言った。

「実はさ、篠原さんに言われて中嶋さんの様子を見に来たんだよね」

篠原香穂の名前が出て、奈那子の表情が少し曇った。どうして香穂が？

「篠原さんが『奈那子ちゃんは秋葉くんが顔を見せてあげるのが一番』だって言うから、それで来たんだ」

「あの、秋葉くん？」

「なに？」

秋葉にどうしても聞きたいことが奈那子にはあった。昨日、香穂に聞いた内容と同じことだ。

「あのね、秋葉くんが香穂と付き合ってるって聞いたんだけど、本当？」

「それ本当？ あはは、そんな噂が流れてるんだ。どうりで今日みんなの態度が違うと思ったよ。嘘だよそれ、僕は誰とも付き合っていないよ」

「本当に？」

「ああ、本当に。今は恋人募集中って感じかな？」

笑いながらも秋葉は困った表情をしていた。全く根も葉もない噂に少し困惑しているのだ。

奈那子は秋葉の言葉を全て信じた。彼の言うことなら何だって信じられる。それに彼が嘘をついているようには全く見えなかった。

「秋葉くん？」

顔を赤らめた奈那子は上目遣いで秋葉のことを見つめた。

「あのね、さつき……恋人募集中って言ってたでしょ？ あたしじゃダメかなあ？」

秋葉は肯定とも否定とも受け取れる微笑を浮かべて静かに言った。

「中嶋さんが僕のが好きなのは知っていたし、篠原さんはことあるごとに僕と中嶋さんをくっ付けようとかんばってた。こないだの日曜日に篠原さんと偶然会った時もさ、君のことをずつと褒めてて、僕に君と付き合うように延々と言われたよ」

「そう……なんだ……」

酷い後悔が奈那子を襲った。まさか香穂がそんなに熱心に自分と秋葉のことをくっ付けようとしていたなんて夢にも思わなかった。

奈那子は勝手な思い込みで香穂を怨んでしまったことに気がついて悔やんだ。

大切に自分のこと想っていてくれた友人を殺してしまったことを奈那子は悔やんだ。自分は確かに香穂を殺した。どうして殺してしまったのだろうか。

だが、香穂は生きていた。理由はわからないが生きていた。

「僕は中嶋さんのことを」

保健室のドアが開く音が聴こえ、香穂が保健室に飛び込んで来た。

「奈那子ちゃん、元気になった？」

香穂と秋葉の目が合った。そして、香穂は場の空気を読んで酷く慌てた。

「ご、ごめん邪魔だったかなあ、すぐ出て行くね」

「いや、僕が出て行く。じゃあね中島さん、また明日」

秋葉は返事をしないままに行ってしまった。だが、奈那子は秋葉がYESと言ってくれないことに気づいていた。あの表情を見ればわかる。

返事を聞く前に香穂が入って来てくれたことに奈那子は感謝した。そして、香穂が生きていたことにも感謝した。

「奈那子ちゃんごめくん、せつかく二人つきりだったのに」

「いいのよ別に。帰ろうか？」

「うん！」

ベッドから起きた奈那子に香穂が奈那子のバッグを手渡した。バッグを普通に受け取る奈那子。今度は気にもならなかった。もう、あの出来事は全部忘れてしまおうと奈那子は心で誓った。

学校からの帰り道。二人は前のように楽しくおしゃべりしながら帰っていた。その途中で香穂は急にこんな話を切り出した。

「あのねえ、奈那子ちゃん」

「なに？」

「わたし、奈那子ちゃんと秋葉くんをくっ付けようとしてるうちに、自分でも秋葉くんのが好きになっちゃったんだよね」

それは奈那子にとって衝撃的な告白となった。押し込めていた感情が再び湧き上がって来た。

香穂は奈那子と秋葉の仲をくっ付けようと秋葉に何度も接触しているうちに、自分も秋葉のことにいつの間にか惹かれていた。だが、これを奈那子は親友の裏切りとしか思えなかった。

奈那子は怒りを覚え、その怒りを顔に出してしまった。しかし、夢の中だったのかもしれないが、香穂を一度殺している後ろめたい気持ちから、すぐに笑顔で怒りの感情を誤魔化した。

潤んだ瞳で奈那子を見つめる香穂は震える声で言った。

「わたしはね、奈那子と秋葉くんがくっ付いてくれるのが一番嬉しいの、だから、わたしのことなんて気にしなくていいから。これからも、わたしは奈那子のためにがんばるね」

これは、自分が身を引くからということなのだろうか？ 少なくとも奈那子はそう理解した。

奈那子は気ゆっくりと気を静め、香穂が秋葉を譲ってくれると言ってくれたことにほっとした。

あの保健室で秋葉からYESと言ってもらえなかっただろうとあの時は思っていたが、今は何でそんなことを思ったのか奈那子にはわからなかった。自分は秋葉と付き合えるかもしれないではないか。ライバルも一人減ったのだし……。

誰もが心の内に持っている闇の種。闇の妖花が奈那子の心に咲いた。

不安そうな顔をしている香穂に奈那子は笑って見せた。その笑顔の奥にある感情は……？

「香穂、あたしたち、いつまでも友達だよね！」

「うん！」

笑顔を浮かべる香穂を見て、奈那子は何を思う？

互いを笑顔で見つめ、この二人を繋ぐモノはいったい何なのだろうか？

人の心は複雑で、そして単純なものだ。世界は矛盾に満ちている。

仲の良さそうに見える二人が楽しそうに歩いている。

香穂が前方の人だかりに気がついて指をさした。

「奈那子ちゃん、あれ見てよ、何かなあ？」

「何かしらね？」

「ちよつと行ってみようよ！」

香穂に腕を掴まれて、奈那子は人だかりに走って行った。

人だかりの中心に誰かがいるらしいが、よく見えない。

香穂は奈那子腕を引きながら人の中を掻き分けて中心に進んだ。

人だかりの中心にいた人物を見て、奈那子のはつとした。あの人見たことがある。

大きな鍔のある黒い帽子から白銀の髪が胸元まで流れていて、身に纏っているものは黒いインバネスと呼ばれるコート。いつか奈那子がぶつかった人物だ。

中性的な妖艶な顔を持つその人物は操り人形を使って人形劇をしていた。

奈那子の脳裏に恐怖で顔を歪ませながら香穂が屋上から落ちたあの時の表情が再び思い出された。やはり、奈那子は一度死んだ。

人形遣いの指先がしなやかな動きを見せ、幻想的な世界を創り出す。

生きてるように動き出す二体の人形に、奈那子は魅了されて目が離せなくなった。

劇はラストシーンであった。そして、そのシーンはそのシーンに似ていた。

人形遣いは一言もしゃべらずに人形を動かしている。だが、ここにいる全ての人々には台詞がなくとも、人形が何を言っているのか不思議とわかってしまった。

音も情景も感情までもが人形の動きだけで伝わって来る。まるで、この人形遣いは魔法使いではないかと思ってしまうほどだ。

夕焼けに染まる空の下、ひとりの女の子が友人を屋上に呼び出した。

女の子は好きな人を奪われたと友人を一方的に攻め立てる。友人は泣きながら女の子に何かを訴えかけるが、女の子は聞く耳を持たなかった。

そう、この人形劇はあの時の再現だった。

奈那子が香穂のことを殺してしまったあのシーンの再現をしているとしか思えない内容だったのだ。

人形劇は進んでいく。

奈那子は恐怖した。目を離すこともできず、釘付けになりながら見てしまった。目を離そうとしても何かに惹きつけられてしまうのだ。



人形遣いの指が激しく動き、女の子の人形が友人の人形を突き飛ばした。その瞬間、友人の人形を操っていた糸がプツリと切れて、人形は地面に落下した。

人形が地面に落下する時、実際には聴こえない悲鳴が聴こえたような気がした。

ここいた人々は悲惨な顔をして、身を凍らせてしまった。誰もが悲痛な叫びを聴いてしまったのだ

妖艶な顔をした人形遣いが奈那子を見つめ、そして、微笑んだ。

「いやーっ！」

蒼ざめた顔をした奈那子は無我夢中で走り出した。

果たして奈那子は何から逃げようとしているのか？

奈那子を追うものは何か？

香穂は死んだのか、生き返ったのか？

奈那子は香穂を殺したのか、殺していないのか？

これは夢なのか、夢ではないのか？

何が現実なのか？

やはり自分は香穂を殺したのだと奈那子は再確認した。

いろいろな想いが堂々巡りする奈那子。彼女の感情は波を作り出していった。

昨日の屋上での出来事によって引き起こされた奈那子の感情は消えることなく残っている。感情は無理やり押し込められては、何かの弾みで戻って来た。

奈那子はわからなかった。あの人形遣いはなぜあの出来事を

知っていたのか？ 劇の内容が偶然同じだったのか？

あり得ないと奈那子は心の中で叫んだ。あんな偶然があるわけがない。偶然にしてはでき過ぎている。

あの人形遣いは一部始終を見ていたのか？ どこでどうやって？

あの人形遣いはいったい何者なのか？

答えがひとつもない。

奈那子は学校に向かつて走っていた。そう、あの屋上に何か手がかりあるかもしれないと思ったからだ。

正門を通り抜け、校内に入った奈那子は屋上へ向かつて階段を駆け上がった下駄箱で靴を履き替えることもしなかった。

空が真っ赤に染まる夕暮れの屋上 あの時と同じだった。

奈那子の視線の先には一部分が抜けてしまっているフェンスがあった。あそこから香穂は地面に落下した。

いろいろなものがあの出来事は現実だったと言っている。ただひとつ可笑しいことは香穂が生きていたこと。それだけが可笑しい。

奈那子は抜けたフェンスに近づいた。そこから下を眺めようとしたが、近づくだけで下を覗くことはできなかった。

屋上に強風が吹き荒れた。

「奈那子ちゃん」

ぎよつと顔をして奈那子が後ろを振り向くと、そこには薄ら笑いを浮かべた香穂が髪の毛を風に揺らしながら立っていた。

香穂がゆっくりと奈那子のもとへ歩み寄って来る。

「ここで奈那子ちゃんがわたしのことを突き飛ばしたんだよね」

「……どうして……それなの？」

では、どうして香穂は生きているのか？

「わたしは奈那子ちゃんに復讐したくて蘇ったの」

「そんなことが……」

奈那子は目の前にいるものを否定した。五感全てが目の前にいるものを感知していても奈那子は認められなかった。あり得ない。

「わたしね、秋葉くんのことあきらめてないよ。いつも奈那子ちゃんのこと蹴落としてやるうと思ってたの」

「そんな、ど、どうして……やっぱり全部嘘だったの？」

「うん、ぜんぶ嘘だよ、泣いたりしたのも全部嘘。みんなわたしの涙に騙されるんだもん、笑っちゃうよね」

屈託がない純粋な笑顔を浮かべる香穂。何をもつて純粋というのか？ 香穂の笑顔は異様だった。

愕然とすることしか奈那子にはできなかった。まさか、香穂がこれほど醜い心を持ち合わせていようとは……。

香穂は笑みを浮かべながら奈那子に詰め寄って行く。

「まさか、奈那子に殺されるなんて思ってもみなかったよ。親友だと思ってなのになあ、あはは」

どこか可笑しい笑い。機械仕掛け人形の歯車が調子を狂わせてしまったようだ。

「来ないで、あたしに近づかないで！」

「どんどん後ろに追いやられて行く奈那子。香穂は足を止めることなく奈那子に詰め寄って行く。」

「学校の帰り道に、秋葉くんのが好きだった奈那子ちゃんに言っちゃった時の奈那子ちゃんの顔、絶対忘れない、スゴイ怖い顔してたよ。あの顔を見た時にね、わたしは思ったの……アタは何度でも機会さえあればわたしを殺す、ってね」

「薄ら笑いを浮かべて香穂が足を止めた。それに合わせて奈那子の足も止まる。」

「ご、ごめんね香穂……お願いだから許して」

震える声を発する奈那子の目からは涙が零れ落ちていた。自分を悔いて出た涙ではなくて恐怖心から出た涙だった。

「ふふ……許して欲しいの？ ヤダよ、許してあげないよ。だってわたしのこと殺したんだもん」

「お……願……い……」

風に奈那子の声は掻き消され、香穂は笑っているだけだった。奈那子のすぐ後ろには真っ赤な夕焼けが広がっていた。一歩でも後ろに下がれば地面に落ちてしまう。

「許して、許してよ」

「ヤダよ」

香穂の手が伸ばされた瞬間、逃れようとした奈那子は足を滑らせそうになって、遥か下の地面を見てしまった。

奈那子は絶句した。遥か先の地面の上で血みどろになって死んでいる人、それは香穂だった。それを見た瞬間、奈那子は悲鳴をあげて気を失い屋上から転落した。

そして、地面に何かが激しく打ち付けられた音がした。

暗い暗い闇の中。

傀儡師である彼は全てを見届けた。

“その”心の行く末を観た。そして、何を想ったか？

一筋の光もない闇の中で、奈那子は自分が死んだことを理解した。死んだ人はみんなこんな真つ暗で何も無いところに来るのだと解釈した。

暗闇の恐怖。闇と自分の心だけがそこには存在していた。

もしかしたら、ここが地獄というところなのかもしれない。

こんなところにいたら精神が壊されてしまう。

これからどうなるのだろうかと奈那子は考えた。答えはすぐに出た。どうにもならないまま自分の精神が可笑しくなっていくのだろう。

悲しくても涙が流せない。苦しくても逃げ出せない。

暗闇の中で人の声が聴こえて来た。安心感が奈那子の心を包

み込んだ。

声は耳を通してではなく、心に直接語りかけて来た。

《おまえの肉体は滅び、魂だけが残った。そのままそこにいれば、精神が壊され魂は砕け散るだろう》

奈那子は何かを言うおうとしたが、身体をなくしては何もしゃべれない。

声は話を続けている。

「おまえに選択肢を選ばしてやろう。魂の消滅をこのまま受け入れるか、傀儡の中で生き続けるか？」

奈那子には傀儡という意味がわからなかった。

「私の傀儡に変われば、蘇ることができる。ただし、それには条件がある。躰は人形となるが、前とほとんど変わらぬ姿だ。

そして、私がおまえの力を必要とした時、有無を言わずに私の操り人形となってもらおう。どうする、仮初めの生が欲しいか？」

仮初めだろうが生き返ることができるのなら欲しいと奈那子は思った。こんなところにいたくない。

「承知した。その望み叶えてやろう」

身体がないのに奈那子は何かに引きずられる感じがした。宙に浮いて凄いスピードで動いているような感じた。

光が飛び込んで来た。

奈那子に五感が戻って来た。自分の身体があるのがわかる。

だが、目を開けることはできない。

「香穂という女はおまえに復習がしたいと言って、再び現世に戻った」

男の声がそう言うのと同時に、奈那子は胸から何かが抜かれる感じがした。そして、まぶたの上で閃光が幾本も走ったのを感じた。

「新しい躰に慣れるまで動くことができないだろうが、時期に慣れるだろう」

男の足音が奈那子から遠ざかって行く。

奈那子の周りから人の気配が消えた。

身体があるかわかるのに動かせない。これでは先ほどの闇の中と同じではないか。

奈那子は恐怖した。冷たい空気が頬に当たっている。自分がどこにいるのか全くわからない。

周りには人の気配がない。風が吹く音だけが聴こえる。

ひとり取り残されてしまった。

身体を一生懸命動かそうとする奈那子。そして、

まぶたを開くことができるようになった。

光の粒が瞳に入ってきて来て、奈那子は何度も瞬きをした。

ここは学校の屋上だった。日は沈み、空には星が瞬いているのが見えた。

目を開けることはできたが、身体は少し指先が動く程度で、後は動かない。

奈那子は目だけを動かして自分の身体を観察した。変わったところはない。何も変わっていないかった。

男は奈那子を傀儡に変えると言っていたが、どこも変わった様子はない。いったいどこが変わったというのか？

そして、身体全身が動くようになった。  
腕を高く伸ばした奈那子はそのまま立ち上がった。

奈那子は結局、本当に自分は一度死んでしまったのかわからなかった。もしかしたら、全部夢だったのかもしれない。でも、どこからが夢？

辺りを見回した奈那子の瞳に壊れたフェンスが映し出された。

フェンスが壊れているということは、香穂を殺してしまったところまでは現実なのかもしれない。

では、香穂はその後で本当に生き返ったのか？

答えが見つからないまま奈那子が空を見上げていると、全く誰もいないはずだった屋上に人の気配が突然した。

「紫苑がいると思ったのだが、いるのは小娘ひとりか」

闇に同化している黒尽くめの男が立っていた。その男の周りにも黒尽くめの男が六名立っている。彼らはいったい何者なのか？

リーダー格と思われる男が奈那子に近づいて来た。

「紫苑を見なかったか？」

突然そんなことを言われても、さっぱりわからない奈那子は首を横に振った。

男は目を見開いて奈那子を凝視した。その瞳は金色に輝き、まるで獣の瞳のようであった。

「我々を見られては、この娘も処分せねばな」

奈那子はこの言葉を聴いて後ろに下がろうとした。だが、身体がそれに反抗して勝手に動き出した。奈那子の意思に逆らって身体が勝手に動いてしまったのだ。

煌く線が目の中の男の横を通り過ぎ、奈那子は目を丸くした。自分がそれをしたことに驚いたのだ。

「あたしがやったの!？」

奈那子の手から光の筋が放たれた。今度は外さなかった。光の筋は目の前にいる男の肩を切り裂き、鮮血が地面にほとばし



った。

「くっ……紫苑か！」

男がそう叫んだ瞬間、他の黒尽くめの者どもが奈那子にいつせいに襲い掛かって来た。

自らの意思とは関係ない動きをする奈那子の身体はバク転をして後ろに下がった。奈那子はバク転などできないはずだった。黒い六つの影が動き、奈那子を取り囲んだ。

前後左右、そして上からも敵が襲い掛かって来る。だが、逃げようとすると奈那子だが、身体はそれを許してはくれなかった。奈那子の手が煌きを放った刹那、腕を飛び、脚が飛び、首が宙を舞った。

悲惨な光景を目の当たりにして、奈那子は吐きそうになってしまった。

「わ、わたしがやったの!？」

「貴様、よくも！」

最後に残ったリーダー格の男が怒りを露わにした。

バラバラに切断された塊から血が流れ出していた。辺りは血の海と化している。

「うっっ……」

鼻につく血の香りで奈那子の胃が大きく動いた。口に手を当てて思わず再び吐きそうになってしまったが、どうにか堪えることができた。男の手にはナイフが握られていた。

男が奈那子に襲い掛かって来る。だが、奈那子はそれどころではなく、うつむいて死にそうな顔をしていた。

ナイフが奈那子の身体に突き刺されようとしているが、奈那子は気づかない。だが、奈那子自身が気づかぬとも身体が反応した。

奈那子の足が急に振り上げられ、男は腹に激痛を覚えながら後方に吹っ飛ばされた。

男の身体は信じられないほど後ろに飛ばされていた。その距離、六メートルほど。奈那子には不可能なことだ。

奈那子の手が煌きを放ち、空間に一筋の光が走った。そして、空間には夜よりも暗い闇色の線ができていた。空間が裂かれたのだ。

裂かれた空間の傷は唸り、周りの空気を吸い込みながら広がっていき、やがて大きな裂け目を造り出した。

闇色の裂け目から悲鳴が聴こえる。泣き声が聴こえる。呻き声が聴こえる。どれも苦痛に満ちている。

奈那子の腕が前に伸び、口が勝手に開かれた。

「行け！」

裂けた空間から 闇 が叫びながら飛び出した。それは男に襲い掛かった。

闇 は男の腕を掴み、足を掴み、胴までも掴み、身体中に絡みついた。

「な、何だこれは!？」

男は 闇 を振り払おうとするが、すでに腕は 闇 に呑み込まれていた。

闇 が唸り声をあげると、男の身体は地面を引きずられて、

空間の裂け目に呑み込まれていった。それと同時に辺りに散乱していた肉の塊も吸い込まれていき、地面には血が一滴も残ってはいなかった。

空間の裂け目は閉じられ。奈那子は愕然とした。

見てはいけないものを見てしまった。

頭を抱えながら奈那子はふらふらと歩き出し、壊れたフェンスのところに向かった。

綺麗とは決して言えない夜景が広がっている。

奈那子は何かに引き寄せられるように下を覗いてしまった。

あの時のように奈那子は絶句した。

暗くてもなぜか見えた。遙か先の地面の上で血みどろになっている人、また香穂死んでいる。それを見た瞬間、奈那子は悲鳴をあげて気を失い屋上から再び転落した。

ある日、二人の仲の良さそうな女子学生が楽しそうに歩いていた。

「ねえ、奈那子ちゃんあれ見てよ」

「なに、香穂？」

人が集まる中心で人形遣いが劇を行っていた。

二人はその光景を遠くから眺めながら通り過ぎて行った。

そして、二人は顔を見合わせて不敵な笑みを浮かべたのだった。

シンクロー率三〇パーセント。

茶色い襪褌布に細い刃が突き刺さる。

学校の屋上で愁斗が低く呻いた。脇腹を片手で押さえながらも、残った手で妖系を操り続ける。少しでも隙を見せればやられてしまう。

愁斗は強く唇を噛み締めた。脇腹を貫く激痛のためではない。屈辱に対する怒りのためだ。

完膚なきまでの敗北。

戦いははじまったばかりであった。それにも関わらず愁斗は敗北を認めざるを得なかった。だから逃げたのだ。尻尾を巻いて逃げる負け犬のように。

頭の中で相手の言葉がリフレーションされる。

僕は確立の糸が見えるのさ。

雲ひとつない青空の下で、愁斗はコンクリートに横たわりながら天を仰いでいた。

屋上には愁斗以外の者はない。時折感じる気配は風が奔り抜けるものくらいだ。そもそも屋上への唯一の出入り口は鍵がかけられ、人が来ることなどまずないはずだった。はずだった。

「おまえもサボり組か？」

と男の声が愁斗に問いかけた。

「うん、そんなところかな」

青空を背にする男子生徒に視線を合わせ、愁斗は曖昧に返事を返した。

この男子生徒が屋上に侵入して来たことはわかっていた。だが、その時は敵との戦いの最中　逃亡の最中であり、男子生徒に気をとられている暇などなかったのだ。

愁斗の横に腰を下ろした男子生徒は、愁斗の顔を覗き込んで人懐っこい笑みを浮かべた。

「転校生だよな？」

「だから？」

愁斗の態度は少し喧嘩腰であったが、男子生徒は気にする風もなく、白い歯を見せて笑った。

「前の学校でなにやらかしたんだよ？」

「え？」

「前の学校で問題起こして、こっちに来たんだろ？」

「ただの転校だよ」

季節外れの転校生の噂は瞬く間に学年中に広まり、今は学校中に広がっている最中だった。

隣のクラスに美男子様が転校して来たって聞いたんだけど、ひと目でおまえだってわかったよ。噂で聞くより綺麗な顔してやがるぜ」

「そんなことより、なんで僕が問題児なんだい？」

「季節外れの転校に、屋上で授業サボりってきたら、優等生と

は言えないだろ。んで、前の学校で問題起こして、こっち来たらんじゃないかって思っただけ」

「ああ」

愁斗は深くため息をついた。

確かに転向早々午後の授業をふけたのはまずかったかもしれない。初日からこれでは悪評も立つだろう。この場所に長居をするつもりはないので、察して気にする問題でもないが。

「初日からサボりなんて大した度胸だよな」

「……別に」

別に度胸がどうこうと言った問題ではない。予期せぬ遭遇により、止むを得ない状況に陥っただけのことだ。

愁斗は勢いよく立ち上がり男子生徒に背を向けた。かまわれるのがめんどくさいというのもあるが、それ以上に今は少し気が立っていた感情を抑えはするが、それでもなにかきっかけに感情の糸が切れるかわからない。今はひとりでいたい気分だった。

だが、愁斗の背中に声がかかる。

「授業出るのがよ？」

「いや」

気のない返事をした。それでも相手が付け入るのには十分で、男子生徒は話し続けてくる。

「転校して来たばっかなんだから、授業くらい出るよ。でない」と、教師に目付けられるぜ。なんでも第一印象って大事だぜ」

「君こそ授業に出たほうがいいよ」

と返事をしてしまったのが間違えだった。いや、返事をしなくとも結果は同じだったかもしれない。

男子生徒はニコニコしながら愁斗の真横に歩み寄った。

「ヒマなら俺が街を案内してやるよ」

「今から？」

「どうせ授業サボるんだろ。だったら俺と遊びに行こうぜ」

考えるまでもなく、その誘いを断るはずだった。なのに、愁斗の口から出た言葉は、

「どこに行く？」

「そうこなくつちゃ！」

万人受けする人懐っこい笑みを浮かべる青年を見ながら、愁斗は微かに口元を緩ませた。愁斗がこんな暖かい笑みを浮かべることが珍しい。それだけの魅力をこの男子生徒は持っているのだ。

「俺の名前は西岡大吾」

「僕の名前は秋葉愁斗。よろしく西岡君」

「うげえ、きもちわりい。君付けなんてよしてくれよ」

愁斗はまた笑った。

空で輝く太陽は、まだまだ高いところで微笑んでいた。

案内と言っても、この町にはわざわざ案内までされて行く場所はない。所はなかった。

小さな商店が軒を並べる商店街。そこを一步抜ければすぐに住宅街に立ち入ってしまう。目だった物もない、平凡な町だっ

た。

この定食屋のカレーがうまいのだ、この肉屋のコロッケは一流だの、このパン屋のサンドイッチは間食に丁度いいだの、西岡の案内する場所は、どれも食べ物に関係する場所ばかりであった。

西岡は嫌な顔をして不意に足を止めた。それに合わせて愁斗も足を止める。すぐに愁斗は西岡の視線の先を眺めた。男が三人。

他校の学生服を着た三人組が、愁斗たちの前方から歩いてくる。どいつも目をぎらつかせ、肩でもぶつかろうものなら、すぐに顔面に拳が飛んで来そうだ。

相手が近くに来ないうちに、西岡は愁斗に小声で話しかけた。「東のゴリラだ。目が合っただけで因縁つけられる。ウターンして道を引き返そう」

愁斗は無言で同意し、ウターンして歩き出す西岡の背中を追った。

少し早足で歩きながら西岡は横にいる愁斗に小声で説明をする。

「通称東のゴリラ、喧嘩常習犯さ。この駅前通りはあっちの学校のやつらもいっぱいいるからな。くだらない縄張り争いがあるんだよ」

確かに三人組の真ん中にいた大男はゴリラに似ていたように思えた。

殺気がする。それに足音。愁斗は危険をいち早く感知した後



るを振り向いた。

「おい西岡待て！」

声をかけてきたのはゴリラだった。

しまったという表情をして西岡も振り返った瞬間だった。西岡の頬に巨大な拳が叩き込まれ、彼は歩道に腰から倒れてしまった。

殴られた西岡は頬を手で押さえながら立ち上がった。その顔は笑っていた。人懐っこい笑みだった。殴られてもなお、西岡は笑い続けていたのだ。

「痛いじゃないですか、中邨さん。俺なんかしました？」

中邨というのはゴリラの本名だ。

「とぼけんじゃねえぞ！」

ゴリラはいきなり雄たけびをあげた。

「こないだはよくも俺に恥をかかせてくれたな！」

「俺はなにもしてないっすよ。中邨さんの勘違いじゃないっすか？」

人懐っこい笑みを絶やさず西岡は人語でゴリラに話しかけるが、やはり人語では通じないようだ。頭に血を昇らせたゴリラは、横にいる子分二人を顎で使った。

野猿みたいな顔をした二人が西岡に飛び掛かったが、ここで奇妙な現象が二匹の猿に襲いかかったのだ。二匹の猿は金縛りにでも遭ってしまったように、身動きを止めてしまった。そして、猿は猿回しにかかった。

まずは手始めに猿たちは阿波踊りを踊りはじめた。

勝手に動く手足に恐怖し、猿は叫んだ。

「た、助けてくれ、身体が勝手に、動く」

額から玉の汗を流し、恐怖に引きつった顔で猿は踊り続ける。近くでその奇行を眺めるゴリラは目を白黒させ、西岡もきよんとんとしている。この場で平然と冷めた表情をしているのは愁斗だけだ。

二匹の猿は互いの服に手をかけた。なにをするのかと目を見張ると、猿たちは互いの服を脱がしはじめたではないか!? なんと目を覆いたくなる、醜いストリップショーのはじまりだ。「わあゝっ、やめてくれ!」

「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」

猿たちは顔面蒼白になりながら、一匹は叫び、一匹は念仏を唱え始めた。幽霊の仕業と思ったのかもしれない。普通のものが見たら、そう思うのが当然なのかもしれない。

靴を丁寧の脱ぎ、上着を脱がされ、気づいたときには二匹とも、あと一枚の大事な部分を隠す布を残すのみだった。最後の一枚を脱がされまいと、呪縛を破り必死に抵抗する。が、それもまた猿回しの芸。愁斗によって猿を操る妖系が緩められては縛られる。

いつの間にか辺りには人だかりができていた。

買い物途中の主婦から、学校帰りの女子高生。猿のストリップショーでも、人は寄ってくるものだ。

いつの間にか、ひとりの観客になって笑い転げている西岡の背中に声がかかる。

「行こう」

声をかけたのは愁斗だった。

「誰かが警官を呼んだらしい」

愁斗は遙か前方を指差して言った。

自転車に乗った警官がこちらに向かって来る。

西岡とともに足早にこの場を後にする愁斗は、最後の仕上げと猿のパンツを下ろしてやった。

歓声とも悲鳴ともつかぬ声を背中で感じながら、愁斗はこの場をあとにしたのだった。

夕焼けを浴びた川が朱く輝いている。

愁斗の顔はにこやかであった。真横でそれを見ている西岡の自然と笑みがこぼれる。

「あれ秋葉がやったんだろ？」

「ん？」

「とぼけんなよ」

「勝手に脱ぎはじめたんだよ、きつと露出狂の気があるんだよ」

あの場所で妖系を使えば、誰であろうと愁斗に疑いの目がいくだろう。その危険があるにも関わらずに愁斗は妖系を使ってしまった。些細な気まぐれを動機に。

“教育”を施されようと、やはり愁斗の本質は“人間”であつたのだ。

ふいに愁斗の足が止まった。

「今日は楽しかったよ、ありがとう。また明日」

愁斗は西岡に軽く手を振って別れの挨拶をした。挨拶をされた当の本人である西岡は、きょとんと目を丸くして辺りを見回している。

右手にある土手を下った先にあるのは川であり、左手には野原や農地が広がっていた。道はまだまだ先まで続いている。ここは別れ道ではないのだ。それなのに愁斗は別れを告げた。

不思議な顔をしながらも西岡は愁斗に手を振った。

「明日もどつか遊びに行こうぜ、俺のダチも紹介すんから。んじゃ、また明日な」

「またね」

走り去る西岡を見ながら愁斗はゆっくりと指先を動かしてはじめた。

愁斗の視線が注がれる。

川辺に腰を下ろし、近くの小石を拾っては川に投げ込む少年の影。その影はふうっと立ち上がる。

「この道を通る確率が一番高かったから、ここで待ち伏せさせてもらったよ」

背格好は愁斗と同じで、歳も同じくらいだろう。どこか大人びた雰囲気を感じるところも愁斗に似ている。この気は魔導を帯びたモノが放つ気だ。

傾斜になっている土手を滑り降りた愁斗は少年の前に立ち、剃刀のような瞳で相手を見据えた。

「僕になんのようにだい？」

「僕が追ってる相手と同じ技を使うみたいなんでね。もしかしたらあいつの知り合いかなって」

「技？」

「そうそう、操る技。とぼけてもダメだよ、君が他校の生徒で遊んでるのちゃんと見ちゃったんだから」

これは完全に愁斗自身の失態であった。やはり人のいるところで妖系を使うべきではなかったのだ。しかも、嫌な相手に見つかってしまった。そう、愁斗はこの少年を知っていた。

数時間前、愁斗 いや、紫苑はこの少年に敗北した。

不幸中の幸いか、少年はまだ愁斗が紫苑の操り主であることを知らないらしい。

表情を完全に消している愁斗が訊ねる。

「仮に僕が君の探している人物の知り合いだとしたら、僕にどうしろというんだい？」

「住所氏名年齢、連絡先もかな。とにかく奴のことを知りたいんだよ」

「なにも知らない。君に提供できる情報はなにもない」

「襷褌布着てたし、顔は仮面で隠れてたから、まったくこの誰だかわからないんだよね。えっとね、そうそう、背は君より高く、声はもっと透き通った中性的な声だったような気がする」

「知らない」

と言い張る愁斗に少年は一度目を合わせて、視線を下げた。そして、もう一度、愁斗を見た瞳は狂気を浮かべていた。

「君ってヤナ奴だね。僕、君みたいな奴嫌いだよ。ホントむかつくね。さっさと、くたばれっ感じて」

少年は肩から紐で提げていた筒から、素早く武器を取り出した。

長く細い刃が夕日を浴びて赤く輝く。それはレイピアと呼ばれる片手持ちの剣であった。フェンシングと呼ばれる剣術に用いられる剣だ。

先に仕掛けたのは少年であった。

疾風のごとく突きが紫苑を捕らえる。剣先を紙一重で交わしたはずだった。だが、愁斗の頬に紅い筋が走った。

すぐに次の突きが繰り出される。

しゅつと風を切り、愁斗の上着の袖が少し切り裂かれた。

後ろに飛び跳ねる愁斗の手から煙きが放たれる。

だが、妖系は見事に切断され、大地にはらりと散った。

「やはり攻撃が読まれているか」

「僕は確立の系が見えるのさ！」

意気揚々と声をあげた少年はにやりと下卑た笑いを浮かべた。

確立の系が見えるとは、どのようなことなのだろうか？

全ての事象を事前に知ることのできる予知能力のようなものだろうか？

ならば、誰もこの少年に勝ち目がないではないか。

「僕が見える系は全てのものから伸びているんだ。少し目を凝らしてやれば、系はおのずと見えてくる。でも糸っていうのは例えさ、感じるだけで糸のようなものが見えてるわけじゃない

「よ」

「確立と言ったな？　なら、普段と違う行動をすれば読まれな  
いということか？」

「普段と違う行動をするのも確立に含まれるよ。君がそれを  
しようとすれば、その糸は太くなる。つまり、君の行動は全て  
お見通しさ！」

それは自信に満ち溢れた勝利宣言であった。

やはり、また逃げなくてはならないのか。いや、相手が逃げ  
切れぬほどの、高確率でヒットする攻撃を繰り返せばいい。と、  
愁斗は紫苑でこの少年と戦ったときに考えた。それが浅はかな  
考えであったと知ったから、逃げるしかなかったのだ。

だが、やるしかない。

同時に放たれた二本の妖糸が地面の上を翔ける。

だが、やはり少年に軽く避けられた。

三本目が放たれる前に少年は逃げていた。それも遙か後方へ。  
愁斗は三本目の糸を放つことはなかった。だから、次の攻撃  
もなくなってしまった。

最初に放った二本の糸から力が抜ける。三本目を放とうとし  
たとき、まだ最初の二本は愁斗と繋がっていた。攻撃を外した  
と思わせ、最初の二本を罫として使う気だったのだ。しかし、  
三本目を放つことができなかったために、二本の糸は罫として  
の効果を失った。

少年は遠く離れた場所で笑っていた。

「確立が見えるってことは、相手のしようとしていることの妨

害もできるんだ。僕にだって避けられない確立になることもあるさ。でもね、避けれない状況に追い込まれる前に先手は打てる」

紫苑で戦ったときもそうだった。少年は必ずヒットする攻撃をさせないのだ。そして、全ての攻撃は、いつしか少年が望む場所に繰り出されていた。こちらの意思で放ったはずの攻撃が、相手の意思になっているのだ。

傀儡師が相手に操られている。これほど愁斗にとって屈辱的なことはなかった。

妖糸を放とうとした愁斗の手が不意に止まり、少年は悪戯に嗤った。

「やっぱり来たね　君の友達」

二人しかいなかったこの場に三人目の気配が現れた。

「なんだかおまえの様子が気になって、戻って来ちゃったよ」

この場に現れたのは、愁斗の態度が気がかりで戻ってきた西岡大吾だった。

背中にかけられた声に反応して、愁斗が振り向こうとしたときだった。

「秋葉危ねえ！！」

「!?」

愁斗が背を向けた一瞬の隙についての突<sup>エ</sup>きが繰り出された。レイピアの切っ先は愁斗の肩の付け根を貫きすぐ抜かれ、少年は素早く後退り間合いを取る。

すでに自分に背を向けている愁斗の肩から流れる血を見て、



「西岡は上ずった声をあげた。

「どういうことだよ？」

ここに来て間もない西岡には、愁斗と少年、そして自分の置かれてしまった状況が理解できなかつた。

殴り合いの“喧嘩”ならよくある話だが、これは“殺し合い”  
”だった。

レイピアを構えなおした少年が地面を駆けた。

放たれる細い煌きを避けながら疾走する少年を見ながら、西岡は呆然と立ち尽くしてしまっていた。その少年が徐々に自分に近づいてきているのに気づきながら、西岡はなにをしていいかわからなかつた。

「西岡逃げろ！」

友人の叫びを浴びせられ、やっと西岡は走った。必死に逃げる西岡の足は速い。しかし、徐々に縮まる二人の距離。比べるまでもなく、少年の足の速さは西岡を遥かに凌いでいたのだ。

「うあつ！」

西岡は急激な痛みを背中に感じ、地面に膝をついてしまった。背中では学生服ごと切り裂かれている。少年の放った斬<sup>サブ</sup>りが決ま<sup>フル</sup>つたのだ。

「確立は僕にいいようになって来たみたいだ」

蹲る西岡の首元に細い刃が突きつけられた。

「さあ、蹲ってないで立て！ 僕の盾になつてもらおうよ」

首元に刃を突きつけられている西岡に拒否権はなかつた。相手の言うがままに立つしかない。

ゆっくりと立ち上がる西岡の首元に刃は突きつけられたままだった。少しでも動けば、殺される。少年の姿をしているが、中身は悪魔だ。西岡もそれをひしひしと肌で感じ取っていた。愁斗と少年は対峙した。その間に挟まれる西岡は、人懐っこい笑顔を浮かべていた。

「すまねえな秋葉。おまえが俺のことさっさと帰したわけ、これだったんだな。ホントすまねえ、足引っ張ってさ」

西岡の影で少年は顔を醜悪に染めていた。

「どうする秋葉くん？ 僕はいつでもこの人質を殺せるよ」

愁斗はなにも答えなかった。ただ無言で立ち尽くし、西岡を見つめた。二人の視線が合う。そして、西岡が笑顔を崩したのだ。

「なあ愁斗助けてくれよ」

西岡の顔に悲愴が浮かび、彼は大粒の涙を流していた。

「俺死にたくないんだよ、助けてくれよ。なんでこんなことに……おまえと出会わなければ……」

くしゃくしゃの顔をして泣きじゃくる西岡を見て、愁斗はひどく哀しい表情をした。

そして。

紅い飛沫が地面を彩った。

「ま、まさか……その確立は……見えなかった……」

両脚を消失させた少年は、自らが流す血の海に体を埋めた。

そして、その横では少年と同じ目に遭わされた西岡が腹ばいになって呻いていた。

「……なんでだよ……俺ま」

西岡の首が落とされた　愁斗の妖系によって。表情のない愁斗は非情なまでに、自ら友人に止めをしたのだ。

「君は鬼だ悪魔だ、あははははっ！」

蒼白くなっていく少年は血の海で笑っていた。

「あはは、君と出会わなければよかった」

「……………」

愁斗はなにも言わず、冷たい視線を少年に送り続けていた。

「僕は高い確率のものしか見えないんだ。でもね、例外がある。自分の死の確立さ。僕は常に自分の死……の確立に怯えて……いたんだ……」

少年の声は徐々にか細く弱々しくなっていく。それでも少年は話し続けた。死の恐怖から逃げるように。

「道端を……歩いてい……て死ぬことなんて……滅多にない……」

「けどね……死ぬ確立はゼロじゃ……ない……君……と出会ったとき……僕が……君に殺される……確立が……でいた……」

「……とても少ない確立さ……その場で逃げて……いれば……僕は……」

「……死ななかつた……かもしれない……けど……僕は……君を殺さずには……いられなかつた」

少年は固唾を呑み込んで、囁くように投げかけた。

「……なぜだか……わかるかい？」

問いかけを残して、少年は事切れた。

世界が朱色に染まる中、愁斗は歩きはじめた。

二人の亡骸を残して……。

影の悪戯か、蒼白い仮面が嗤ったように見えた。

「貴様に召喚<sup>コール</sup>を見せてやろう」

召喚とはそこにいながらにして、時間と空間を超越し、超常的な力を持つ異界の住人をこの世に呼び寄せること。そして、それを 使役することができれば、あらゆる望みが叶えられると云われている。

「傀儡師の召喚を観るがいい。そして、恐怖しろ！」

紫苑の妖系が空に奇怪な魔方陣を描いていく。

その魔方陣はまるで巨大な網のようであった。

網目のような紋様から、それ の呻き声が聞こえた。

そして、それは汚らしい嗚咽を漏らし、この世に巨大な怪物を生み堕としたのだった。

真夜中の峠を一台の真っ赤なフェラーリが走り抜ける。

一寸先が闇という状況で、車のライトだけが頼りだった。それにも関わらず、フェラーリを運転している女はアクセルを強く踏む。いつ事故が起きてもおかしくない状況だった。

ヘアピンカーブに差し掛かっても、女はスピードを緩めることなく、ハンドルを激しく切ってカーブを乗り切ろうとした。

タイヤが悲鳴を上げ、道路に黒い跡が伸びる。

車体はガードレースすれすれのところを抜け、どうにか直線

道に入ることができた。ガードレールを突き破り、谷底に落ちていたら、まず助からない。落ちた衝撃で死ななかったとしても、真冬のこの時期では、暗闇の中で凍え死ぬのがオチだろう。熱を帯びてハンドルを握る女に対して、助手席にいる青年の眼は冷めていた。

「亜季菜さん、もつとスピードを落としてください」

「ふっ、嫌よ。峠に来るとあたしの魂に火がつくの。走らずにはいられないのよ！」

再びタイヤが悲鳴をあげた。

車内にGがかかり、シートベルトをしても、身体が左右に引っ張られてしまっ。

どうにか今回も谷底に落ちずに済んだ。

「もしかして亜季菜さんって、若いころ走り屋だったんですか？」

「今も十分若いわよ。峠に通っていたのは免許取り立てのガキの頃の話」

「いくつの時に免許取ったんですか？」

「十八になってすぐ」  
「なるほど」

免許を取ってすぐに峠に挑む亜季菜の度胸に、青年 愁斗は呆れ返った。今も無茶をするひとだが、やはり昔からなのだと愁斗は納得し、彼は口を噤んで亜季菜の運転に身を任せた。

いくつものカーブを抜け、そのたびに車体はガードレールを突き破りそうになったが、亜季菜の運転テクニクは神業と言

えた。

加速を続けていたにも関わらず、ガードレールに車体を擦らせることもなく、峠越えは間近に迫っていた。

「亜季菜さん、ブレーキを踏んで！」

愁斗が叫び、車のライトが照らす前方に突如カーブが現れた。闇で見えなかったのではない。この峠を走りなれた亜季菜はそのことをよく知っていた。もう、カーブはないはずだったのだ。ブレーキを踏みながら、亜季菜はハンドルをめいっぱい切つてカーブを曲がるうとした。

「なんなの!？」

悲痛の混じった声で亜季菜は叫んだ。ハンドルが動かない。いくら力を込めても腕が震えるだけで、ハンドルは一向に動かなかつた。

悲鳴をあげるタイヤに混じつて、甲高い女の笑い声が聞こえた。

闇に浮かぶ亡者の顔を愁斗は見た。

次の瞬間、車体はフロントからガードレールを突き破つていった。

「きゃあああああつ!!」

女の絶叫と共に赤いフェラーリは真っ暗な谷底に落ちていったのだった。

眼を開けると、辺りは闇だった。その闇に浮かび上がる顔を見て、亜季菜は声があげてしまった。

「きゃっ！」

そして、眼をぱちくりさせて、恥ずかしそうに声を漏らした。

「……あ」

亜季菜の眼前に浮かび上がった顔は愁斗のものだったのだ。

「亜季菜さんの運転が乱暴だから　　と言いたところですが、

悪霊かなにかの仕業でしたね」

「あたしのフェラーリは？」

ここで初めて亜季菜は自分が宙ぶらりんになっていることに気がついた。

片手を挙げた愁斗が残った手で亜季菜を抱えている。例え女性と言えど、中学生の愁斗が抱きかかえるのは無理がある。それを成せる業は、愁斗の操る妖系が二人の身体をしつかりと固定しているからだ。宙で留まっていられるのも妖系の成す業だ。「フェラーリは谷底です。僕と亜季菜さんを固定して車内から脱出しました」

谷底と聞いた亜季菜は足元に広がる闇に眼を見張ったが、一寸先は闇で何一つ見えなかった。

「なにも見えないわ。どうせなら爆発炎上してくればよかったのに。映画なんかだとすぐ爆発するのにね」

滅多なことをいうものではないが、今の亜季菜が置かれている状況を考えれば領けるかもしれない。明かりがないのだ。

夜空で雲が蠢き目を隠す。

闇が怖い。亜季菜は闇が怖いのだ。昔から闇が怖かったわけでない、愁斗に出逢ってから闇を恐れるようになった。

世界に二人だけ取り残された感じだった。闇が音を奪ってしまつたように、木々のざわめきも、生きとし生けるものが放つ“生命”が感じられない。聞こえるのは自分の心臓の音と凍える息の音だけ。

恐怖による振るえだけでなく、寒さにも震えていることに気づき、亜季菜は愁斗の身体に両手を廻した。

二人の身体が密着する。

愁斗の静かな息遣いが聞こえ、温もりも感じられる。そこにいることを感じ、亜季菜の心に安堵感が広がった。“いる”とわかれば、亜季菜は強い女性に変貌する。

「どーすんのよ愁斗。ずっとこのままでいるつもり？ あなたと一緒に心中なんて嫌よ」

「このままだと凍死でしょうね」

「だったら早く地面に降りて、人のいる場所に行くわよ」

「降りても地面があるか確信が持てません」

「なに言ってるの？」

足元に広がる闇。そこには地面などなく、奈落に続いているのではないかと思わせる。だが、地面がないなどありえないことだ。

「僕はガードレールに糸を巻きつけました。なのに壁がないんです」

この言葉を聞いた亜季菜は慌てて闇に手を伸ばした。手で辺りを探るが何もなし。ガードレールに糸を巻きつけたのであれば、吊られている自分たちは崖の近くにいるはずだった。その



崖が存在しないのだ。

「もうひとつ」

愁斗は落ち着いた口調で言った。

「さつきから糸を地面に垂らしているのに、地面に付いた感覚がないんです。ざっと五〇〇メートルほど伸ばしているはず」

「そんなまさか？」

「どうしますか？」

「あたしに訊かないでよ。こういうのは愁斗の方が慣れているでしょ？」

こういうのとは、この手の怪異のことだ。

「じっとしていても凍え死ぬだけです。上と下、どちらに行きますか？」

「どっちに行けば助かりそう？」

「どちらも危険な感じがします。特に下は死の臭いが立ち込める」

「じゃあ上ね」

「わかりました」

ふうつとエレベーターが上がる時のような浮遊感を亜季菜は感じた。

身体が上がっていく。

辺りの気配が変わった。風の流れが違つ。妙な圧迫感。そして、水の臭い。

頭上を見上げると灰色の光が見えた。

二人は長いトンネルを抜けた。石でできた縁に手をかけて這い出る。二人の通ってきた道は井戸だったのだ。

愁斗は頭上を見上げた。

「少し空の色が変わすね」

物悲しい灰色の空が広がっている。曇りではなく、青空が色褪せて灰色になってしまったようだ。

辺りを一周見渡すと、井戸を囲むように木造立ての廃れた家々が立ち並んでいた。どうやらここは小さな集落のようだ。

一軒の家から腰を曲げた老婆が出てきた。銀髪のぼさぼさ頭の老婆は桶を持って、井戸に向かってくる。

腰を曲げて地面ばかりを見ていた老婆が愁斗の前で顔をあげた。

「どこから来なすった？」

「道に迷って、気づいたらここに」

「外から人が来るのは、一年ぶりじゃったかのお？」

老婆はところどころ歯の抜けた口でにこやかに笑った。

すぐ横でケータイをいじっていた亜季菜は不機嫌そうな顔で愁斗を見つめた。

「圏外でケータイも使えないわ」

「使えたとしても使わないほうがいいですよ。繋がってはいけない場所と繋がるかもしれません」

神妙な顔つきをする愁斗の発言の意味を亜季菜は理解できなかったが、愁斗の言うことに間違いはないと思い、ケータイをポケットの中にしまい込んだ。

いつの間にか水を汲み終えていた老婆は顎をしゃくって家を示した。

「狭い家だが、わしの家で休むといい」

「ありがとうございます。その桶、僕が持ちましょう」

愁斗は老婆の申し出を受け、水の満たされた桶を老婆から受け取った。しかし、亜季菜は嫌な顔をして口を挟んだ。

「あたしは休むよりも、早く大きな町か交通量の多い通りに出たいわ。お婆さん、大きな町にはどう行ったらいいのかしら？」

「山道を十里ほど行ったところに村があるよ」

「十里……十里……四〇キロも先なの!？」

山道を四〇キロメートルも歩くなど、亜季菜は自分の体力では絶対無理だと判断した。しかも、あるのが「村」ときた。いったいどこに迷い込んでしまったのかと、亜季菜は頭を抱えた。

「亜季菜さん、この方の家で休ませてもらいましょう」

すでに愁斗は老婆について歩き出していた。今はそうするかかないと亜季菜は思い、老婆と歩く愁斗の後を追った。

そこは家と言うよりは小屋だった。雨露をしのぎ、寝泊まりに足りるだけの粗末な家床は今にも抜けそうで、障子は破れたまま放置されていた。

金持ちの亜季菜の生活水準では考えられないほどの襤褸家で、彼女は靴のまま家に上がろうとしましたくらいだ。

適当に座っておくれと老婆に言われ、二人が座った畳はささ

くれ立ち、服に細かいごみが付き、少し脚がチクチクする。

落ち着かないようすの亜季菜は辺りを見渡しながら、襖の奥から人が咳き込むような音がするのに気が付いた。

「病人がいるのかしら？」

「わしの孫娘じゃよ。昔から身体が弱くてね、いつも床に伏しておる」

襖がゆつくりと開き、蒼白い顔をした着物を来た娘が顔を出した。

「お客様かしら？」

長く美しい黒髪を腰まで垂らし、端正な顔立ちをした娘の声は少しか細い。しかし、その体つきは若さに相応しく、着物から除く白い脚はもち肌で、少しはだけた襟首から除く胸も大きな膨らみを備えていた。

娘は愁斗たちの前まで来ると、正座をして深く頭を下げた。

「私はこの家の娘で、お紗代きよよと申します」

相手のあまりに畏まった態度に、亜季菜は背筋を伸ばしてしまつた。

「あたしは亜季菜、こつちは弟の愁斗よ」

亜季菜から愁斗に視線を移したお紗代の頬に、ほんのりと赤みが差した。

にこやかに微笑むお紗代は、亜季菜ではなく愁斗に話しかけた。

「しばらくここに滞在するのですか？」

「いいえ、できれば早くここから一〇里離れてるといふ村に行

きたいのですが。姉もそれを望んでいます」

「そうですか……。ですが、今から村に向かったのでは、夜の山道を通ることになってしまいます。今日はどうぞこの家でゆつくり休まれて、明日の早朝にお出かけください」

「そうさせていただけます」

愁斗は軽く頭を下げて亜季菜に視線を送った。やはり亜季菜は嫌な顔をしている。彼女はこの家に泊まるのも嫌だし、山道を約四〇キロも歩くのも嫌だった。

とは言っても、この集落にある家はどれも同じで、亜季菜を満足させる家はないだろう。それに、交通手段があるとは思えないこの場所では、歩かなければ山を越えられないのも明白だった。

「最悪だわ」

小さく呟いた亜季菜はすつと立ち上がった。

「少し外を歩いてくるわ」

「僕も行きます」

外に出ようとすると亜季菜の腕を掴み、愁斗の同行することにした。

家を出ると、先ほどより辺りが暗くなっていた。空は依然として灰色で、朝なのか昼なのか夕方なのか、まったく区別がつかない。お紗代の話からすると、夜が近いらしいが、灰色の空からはそれを察することはできない。

「あたしあの家に泊まるなんてまっぴらごめんよ」

吐き捨てるように言う亜季菜に対して、愁斗は淡々としてい

た。

「じゃあ、村まで歩きますか？ もうすぐ夜が訪れるらしいですが」

愁斗が空を見上げると、灰色が少し暗くなっているようだった。やはり夜が来るのかもしれない。

「歩くのは嫌よ。でもここにいるのも嫌」

「わがままですね。でも、いつかはここを出なくてはいけない。とは言っても山道に出たら最期かもしれません」

「どういう意味よ？」

「一〇里先に村などないかもしれないという意味です」

「あの人たちが嘘をついてるってこと？」

愁斗が次の言葉を発するまでに少し時間があつた。

「ここは僕たちの住むべき世界ではないかもしれませんが。」

僕たちは異世界に迷い込んだのかもしれない」

「そんな……」

莫迦な、と言おうとして亜季菜は口を噤んだ。

現実と呼ばれる世界を生きている者としては、異世界という存在はにわかに入れない。いや、本来は受け入れてはいけないのかもしれない。魔導に通じる愁斗と関わりを持ってしまつてはいるが、亜季菜はまだ人間なのだ。

亜季菜はたまに思う。目の前にいる青年は人間ではない存在なのかもしれない。

「亜季菜さん」

「なに？」

呼びかけによって愁斗をぼんやりみていた亜季菜の意識が戻された。

「亜季菜さんのジャケットに蜘蛛がついてますよ」

「ヤダ、取ってよ。愁斗ほら早く払ってちょうだい」

身体を振り乱して慌てる亜季菜の前に立った愁斗は、ジャケットについている蜘蛛を片手でさつと払った。

糸を引きながらジャケットから落ちる蜘蛛は、ふわりふわりと地面に降りた。そこへ赤いヒールが叩きつけられた。

「ぎゃあああああつ！！」

それは亜季菜が蜘蛛を踏み潰したのと同時だった。

耳を塞ぎたくなるような苦悶に満ちた叫び声。

「お紗代さんの家ですね」

走り出した愁斗を追おうと亜季菜は、蜘蛛を潰したヒールを地面にすり合わせ走り出そうとした。しかし、その脚は止まってしまった。

民家から顔を出す人影。ひとつ、ふたつ、みつつ　村中の人々が民家から顔を出したそして、みな亜季菜を見ているのだ。無表情な瞳で。

怖くなった亜季菜は全速力で愁斗の後を追った。

まず愁斗が家に駆け込み足を止めた。

すぐ後ろを追ってきた亜季菜も、家に入ったとたん顔を真っ青にして足を止めてしまった。

「なによ、これ……？」

どうやって死んだら、人はこんな恐ろしい表情をできるのだ

ろうか？

四肢を曲げ、仰向けになっている老婆は白目を剥き、口からは泡を吐き、苦悶に満ちた形相をしていた。

事切れている老婆の傍らで、お紗代は膝を突いて肩を揺らしていた。その頬から雫が流れ落ち、お紗代は振り向いた。

「亡くなりました」

なぜ？

とは訊けなかった。

ゆらりと立ち上がったお紗代は老婆の両脇に自分の腕を差し込み、老婆の上半身を持ち上げた

「手伝っていただけですか？ お婆様を家の外に捨てます」

お紗代の言葉に亜季菜は訝しげな表情をした。

亡くなった人間を家の外に捨てるなどという常識は、亜季菜の常識には当てはまらなかった。捨てるということは、死者を雨風に晒して朽ち果てさせるといふことなのだろうか。それは亜季菜にとって死者に対する冒瀆にも思えた。

立ち尽くす亜季菜を尻目に、愁斗は淡々とお紗代を手伝い、老婆の足を持ち上げていた。

「亜季菜さんは胴を持ち上げてください。死人は生者より重いですから」

生きている人間は寝ていたとしても身体に力が入っている。しかし、死人は身体にまったく力が入っていない分、生きているときよりも重く感じられるのだ。

胴を持ち上げた亜季菜は老婆の身体がまだ生暖かいのを感じ



た。心地よい温かさとは決していえない。できればすぐに手を離れたかった。

家の外はすでに人ばかりであった。

檻褸をまとった人々が輪を作るように集まってきている。農作業の途中だったのか、鎌などの刃物を持った者もいる。この集落に住む者たち全員が駆けつけて来たようだ。

老婆を地面に降ろすと、人の輪が小さくなり、人々が老婆に群がった。

お紗代は悲しみくれることもなく、足早に家の中に戻って行く。愁斗もその後を追った。亜季菜は一瞬後ろを振り向こうとしたのをやめて、すぐに愁斗の背中を追って家の中に入った。あの場に長居をしてはいけないうような気がしたのだ。

夜は更け、灰色の空は闇色へと変わった。

結局、この檻褸屋で一晩を過ごさなくてはいけなくなってしまう。

どうも落ち着かない。寝ようと目を閉じても、すぐに目を開けて寝返りを打つ動作をしてしまう。

横で眠る青年は恐怖など微塵も感じさせない安らかな表情をしている。

「愁斗、起きてる？」

返事はなかった。

すぐ傍で寝ているにも関わらず、亜季菜は孤独感を感じた。まるで闇の中で独りぼっちになってしまったみたいだ。

ガサガサと部屋の隅から物音が聞こえた。亜季菜は耳を済ませながら、部屋の隅を凝視する。物音のした場所は天井の隅だった。そこでなにかが動いている。

針のような八本脚を持った奇怪な生物と目が合ってしまった。しかも、こちらの眼が二つに対して、あちらは五つもある眼で見ている。それは巨大な蜘蛛であった。体長一メートルはあるう、大蜘蛛が天井の隅に蹲っていたのである。

「愁斗起きて！」

金切り声をあげた亜季菜を目掛けて、蜘蛛が糸を吐いた。幾本もの粘糸が闇の中に広がった。

「なにこれ!？」

蜘蛛の吐き出した粘糸は亜季菜の四肢に絡みついた。手が動かない。足も動かない。身体の自由が奪われてしまったのだ。

天井の隅にいた蜘蛛が亜季菜に目掛けて跳躍した。

もう駄目だと思つた瞬間、亜季菜の目の前で煌きが放たれた。

長細い脚が一本、音を立てて床に落ちた。

「すみません亜季菜さん」

蜘蛛の脚を切断したのは愁斗の放った妖糸であった。

脚を切断された蜘蛛は、愁斗が亜季菜の安否を気遣っている間に、闇の中に消えてしまった。

「逃がしましたね」

淡々と呟きながら、愁斗は亜季菜の身体に纏わり付いた粘糸を引きちぎる。蜘蛛の吐いた粘糸によって亜季菜の身体は自由を奪われていた。もし、愁斗が気付かなければ、亜季菜は逃げ

ることもできず、蜘蛛の腹の中に納まっていただろう。

慌てたような足音が聞こえ、亜季菜の声を聞きつけたお紗代が姿を見せた。

「どうかなさいましたか？」

お紗代は口に手を当てて、息を呑み込んだ。

粘糸に捕らえられている亜季菜の姿と、床に落ちている長細い脚。この場で奇怪なことが起きたのは一目瞭然だった。

床に落ちている脚を見たお紗代は、それがなんであるかすぐに悟った。

「蜘蛛が現れたのですね」

愁斗と亜季菜の視線がお紗代一身に注がれた。お紗代がなにかを知っていると、すぐに察することができたのだ。

少々手こずりながらも、亜季菜の身体に絡みついた糸を取り払った愁斗は、立ち尽くしているお紗代を促した。

「蜘蛛についての話、詳しくお聞かせ願いたい」

「この地には古くから土蜘蛛が棲んでおります。普段は人里に姿を見えることはないのですが、食料の少なくなるこの時期になりますと、時折、子供の土蜘蛛が姿を現すことがあるのです」

土蜘蛛とは日本古来からの怪物の一種である。

愁斗は脱ぎ捨ててあった自分の上着を亜季菜に手渡した。

「僕の上着を着てください。そのベトベトの上着のままじゃ嫌でしょう？」

「ありがとう」

短く礼を言って亜季菜は上着を受け取った。

亜季菜の来ていたジャケットは蜘蛛の吐いた糸が絡み付いて落ちない状態だった。タイトスカートにも粘糸はついていたが、これは替えがないのであきらめるしかない。手足に付いた糸も後で洗い流さなければならぬ。

着替えようとしている亜季菜にお紗代が声をかけた。

「私の着物をお貸ししましょうか？」

「いいえ、けっこうよ」

少し強い口調で断った。お紗代の着ている着物は、お世辞にもいいものとは言えない。みすばらしいと言えるその着物を着ることは、亜季菜のプライドが許さなかつたのだ。

お紗代はなにも言わず奥の部屋に姿を消した。その一瞬、亜季菜は振り返ったお紗代が自分を睨んだような気がした。しかし、なぜ睨まれたのかが見当も付かない。

嵌め殺しの窓から微かに光が差し込んでいた。

「もうすぐ夜が明けるみたいですね」

愁斗の横顔は光を浴びて輝いていた。

どこか妖香の漂う青年の顔に見惚れている自分に気づき、亜季菜は大きく頭を振った。たまにこういう気持ちにさせられるときがある。お子様には興味のない亜季菜でさえ、魔法にかけられてしまうのだ。

「夜が明けたら、さっさと出かけましょう。もう、ここに長居するのはイヤよ」

「そうですね、お紗代さんに道を訊いて出かけましょう」

やはり空は灰色だった。灰色の先に太陽はあるのだろうか？  
家の外に出た亜季菜は灰色の空よりも先に、地面に広がる黒い染みを見て顔をしかめた。

赤黒い染みが地面にこびり付くように広がっている。その傍らにある襪褌布に、亜季菜の視線が移った。見覚えのある襪褌布は、あの老婆の着ていた服だったのだ。

捨てられた老婆の逝く末になにがあったのだろうか？

亜季菜はすぐに考えることをやめた。恐ろしい考えが頭を過ぎってしまったからだ。

家の奥からゆらりゆらりと歩く蒼白い顔をしたお紗代が姿を現した。

「私が途中まで道案内をいたします」

この蒼白い肌の娘が道案内をするというのか。亜季菜は愁斗と顔を見合わせようとしたが、愁斗は、

「よろしくお願います」

と、お紗代を見つめた。

少し頬をほんのりと紅く染めたお紗代は、愁斗の横に寄り添うように立った。

「実は近道があるのです」

「近道ですか？」

眼前に迫るお紗代の顔を前に、愁斗は少し首を傾げて尋ね返した。

「はい、地元の者しかしらぬ洞窟があります、そこを通り抜

ければ、隣村まで六里ほどで行くことができます」

六里はメートル法に直すと、二三キロメートルほどになる。

「では、参りましょう」

静かな微笑を浮かべ、お紗代が歩き出す。愁斗はなにも言わずお紗代についていくが、亜季菜は乗り気ではなかった。目の前を愁斗と歩くお紗代を見てみると、自分の可愛がつているモノに変な虫が付いたようで嫌なのだ。

前を歩く二人を追う途中で、亜季菜は家の物陰に小さな子供がいることに気が付いた。

襦袢を纏った小さな男児が、憎悪と狂気に満ちた眼でこちらを見ている。なにがそんなに怨めしいのか、亜季菜にはわからなかった。

自分の胸だけに留めることにし、亜季菜は愁斗たちを追った。しかし、もし亜季菜が男児の片腕がないことに気づいていたら、なにも言わずに立ち去ることはなかったかもしれぬ。

多くの木々が生い茂り、薄暗く、不気味な獣道を進んだ。

「最悪だわ」

と、亜季菜は歩き始めて数分で愚痴をこぼし始めたが、少し前を歩くお紗代は黙々と歩き続けていた。蒼白い肌をして、足音も立てない弱々しい歩みをして、それにも関わらず、お紗代のほうが亜季菜よりも体力があるように思える。身体が弱いというのが嘘のようだ。

あの集落を出る前に、亜季菜は愁斗に言われてハイヒールの

踵を折ったが、それでも運動靴に比べ歩きづらい。

「もう限界よ」

弱音を吐いた亜季菜を引きずって、三キロほど歩いただろうか、前方に岩場が見えてきた。

崖になっていいるその一角に、黒い口を開けている洞窟の入り口が見える。あそこが近道に違いない。

洞窟に入る前に、お紗代は持参していた松明に火と灯した。明かりが闇に隠れていた洞窟の手前側を彩る。何かしらの道具で掘ったように整った洞窟は、自然にできたというより人工洞窟のようだ。過去に鉱石の発掘か、街道への近道として掘られたのだろう。

薄暗い洞窟の中を各自持った三本の松明の明かりだけを頼りに歩く。

ゆっくりとした歩調で慎重に歩く亜季菜は、足元や壁を注意深く見ていた。洞窟に潜む洞窟動物　ホライモリやホラトゲトビムなどの類がいることを心配しているのだ。

闇の奥からガサガサとなにかが蠢く音が聞こえた。

引きつった顔をした亜季菜は松明を前に翳して、

「ちよつと見てきてよ」

「僕がですか？」

「愁斗が行かなきゃ誰がいくのよ」

「僕が行く必要がなくなりました。急いで来た道を戻りましょう」

巨大な影がこちらに近づいてくるのを確認して、亜季菜は愁

斗の言葉の意味を理解して来た道を走って帰ろうとした。

「ごめんなさい、お帰しすることはできません」

そこに立っていたのは背中白い光を浴びるお紗代であった。愁斗と亜季菜の背後からは、巨大な塊がゆつくりと向かってきている。

焦る気持ちを抑えながら亜季菜はお紗代に尋ねる。

「どういうこと？」

「ひいお婆様の糧とお成りください」

一瞬、眼の錯覚と思い、亜季菜は目を擦ったが、それは錯覚ではなかった。

身体の左右から一本ずつ突き出た枯れ木のような物体。それは脚であった。四つん這いならぬ、六つん這いの姿勢を取ったお紗代は、まるで昆虫のようであった。

呆然と立ち尽くす亜季菜の腕を愁斗が掴んだ。

「出ましよう！」

走り出す二人の前に立ちをはだかるモノは、怪物と化したお紗代であった。

顔はお紗代のままだが、身体はすでに変異し、蜘蛛と化していた。

飛び上がったお紗代が愁斗たちに襲い掛かる。

シュツと愁斗の手から放たれる妖糸。その糸は確実のお紗代を捕らえるはずであった。しかし、お紗代は糸を吐き出して、空中で身を翻して移動方向を転換して見せたのだ。

自分の攻撃を躲かわしたお紗代に目もくれず、愁斗は亜季菜の手



を引いて洞窟内から逃げ出した。

草木の生い茂る道なき道を逃げる。

風の音に紛れて何者かが蠢く気配がした。

「亜季菜さん、息を潜めて身を隠して」

「……………」

亜季菜は固唾を呑み込んで無言で頷くと、愁斗と共に背の高い草むらの中に身を潜めた。

草むらの隙間から見えた小柄な人影は、なにかを探すように辺りを見渡しながら歩いている。その人影に亜季菜は見覚えがあった。あの集落で見た片腕のない少年だったのだ。

しかし、少年には腕があつた。それはまさしくお紗代が変異した、あの姿に似ている。少年もまた蜘蛛の物の怪であつただ。

少年がギロリと目を動かした 次の瞬間！

人間の跳躍力では成し得ぬ高さを少年は飛んだ。

草むらから飛び出した紫苑の手から煌きが放たれる。

少年の脳天から股間に紅い一筋の線が奔った。ずるりとズレる半身。すでに少年の身体は縦に真つ二つにされていたのだ。

亜季菜は目を見張った。真つ二つにされて地面に落ちているはずの少年の残骸がない。換わりそこにあつたのは、身体を真つ二つに割られた蜘蛛の死骸だったのだ。

「やっぱり、今朝方あたしたちを襲った蜘蛛だったのね」

「あそこにいた人々全員です」

予想はしていたが、それでも亜季菜は驚愕した。

「どうして早く教えてくれなかったのよ！」

「それを知れば、亜季菜さんは過度の警戒をするでしょう。それは相手にも伝わります。あそこにいた全員を一気に敵に廻したくはないですから」

蜘蛛の化け物に囲まれながら一晩を過ごしたと考えると、亜季菜は全身から血の引く思いだった。

「それに」

静かに呟きながら、愁斗は振り返った。

「君からは殺気を感じなかった」

そこにいたのは、愁いの帯びた瞳を持つ儂げな娘　お紗代であつた。

人間と寸分変わらぬ姿に戻っているお紗代は、静かな落ち着いた声を発した。

「最初から私が蜘蛛の化身であることを見抜いていたのですね。あなたなら私たちを殺すこともできたでしょうに」

「僕は異形のもの全てが敵とは思わないよ。敵は同族の中にもいるからね」

「……そうですね。ですが、私たちはあなた方を喰らおうとしました。けれど、最初からあなたたちを喰らおうと思っていわけじゃありません。全てはあなたのせいです」

お紗代が視線を移した先には、呆然とする亜季菜が立っていた。

「あたしのせい？」

「ええ、あなたが私たちの仲間を殺したから」

殺した覚えなどない亜季菜は否定しようとしたが、脳裏を掠めた老婆の死相と、老婆が絶叫を発する寸前に自分が殺した蜘蛛とが、ひとつの糸に結びついたのだ。

「あたしはそんなつもりで……」

口ごもる亜季菜にお紗代は詰め寄った。

「私たちは罨を仕掛けて狩りをする。自分たちが傷ついてまで食糧を確保したいとは思いません。だから私たちはあなた方を見過ごすつもりだったのに……」

哀しそうな瞳をするお紗代を黒い影が覆った。

それは巨大な蜘蛛であった。

身長五メートル、脚を入れればもつとだ。その蜘蛛はまさにあの洞窟の奥に潜んでいた蜘蛛であった。

巨大蜘蛛の紅く光る五つの目は、愁斗と亜季菜の二人を捕らえていた。そして、片言ながらも人語をしゃべりはじめたのだ。

「我が領土ヲ侵シタノミナラズ、愛シイ我が子ヲ殺シタ罪、我ラガ贄トナリ償工！」

巨大蜘蛛は尻からのみならず、全身から粘糸を放出させた。投げ網のように宙で広がる粘糸に向かって愁斗の妖糸が放たれる。だが次の瞬間、愁斗の眼が見開かれた。

「まさか!？」

放った妖糸は蜘蛛の巣を切ることができず、粘着性のある蜘蛛の糸に捕らえられてしまったのだ。

そして、粘糸は愁斗の放った妖糸だけではなく、愁斗の身体

をも捕らえてしまったのだ。

簀巻き状態にされてしまった愁斗に巨大蜘蛛が飛び掛かるその牙からは猛毒が分泌され、ひと噛みされれば、全身は痙攣を起こし心臓麻痺を引き起こしまう。

「愁斗！」

亜季菜の叫びが木霊した。

巨大蜘蛛によって引きちぎられる肉。傷口から紅い血が噴出し地面を染めた。

刹那。

一筋の煌きが巨大蜘蛛の身体を引き裂いた。

それはかろうじて動く指先で放った愁斗の一撃であった。

着物を紅く染め、お紗代は簀巻きになって地面に寝転ぶ愁斗の上に覆いかぶさった。お紗代の左肩は喰い干切られ、腕は地面の上に転がっていた。

「何故ダ、何故ダ！！」

巨大蜘蛛はお紗代を睨付けながら命を引き取った。そう、巨大蜘蛛が牙をかけた相手は、愁斗ではなく、お紗代だったのだ。

「嗚呼、私はなんてことを……。敵を助けたと知れば、私は未来永劫同族に呪われることでしょう」

生き絶え絶えになりながら、お紗代は口から分泌液を出して、愁斗の身体に巻きついた粘液を溶解していった。

愁斗が自らの身動きができるようになった時、蒼白い顔をしたらお紗代は愁斗の胸に顔を埋めた。

「できれば、貴方様のお傍にいたかった。同じ種族に生まれた

かった」

自分の胸の中で眠りの落ちようとする娘に、美しき顔を持つ墮天使が囁きかけた。

「僕の傀儡になれば、仮初めの永久をあげよう」

お紗代は愁斗の言葉の意味を理解できなかった。それにも関わらず、お紗代は魔法にかかってしまったように、目の前の美しい悪魔に魅了され、無言のまま頷いてしまったのだ。

儚く散ろうとしている娘の顔きに、愁斗は静かな微笑で迎えた。

「禁じられた契約を交わそう」

まだ息のあるお紗代の胸に煌きが放たれ鮮血を噴いた。

剥き出しになった心臓が弱々しく鼓動を打っている。なんと、愁斗のそこに手を突き入れたのだ。

「君のアニマは僕の糸によって束縛される」

魔導の力によって細工されるお紗代の心臓。

生物から物へ造り変えられる躰。

仮初めの永久を与えられ、開かれた胸の扉は妖系にとって縫合された。

蒼白い顔がほのかに紅くなっていく。

そして、愁斗はお紗代の胸の中心に契りを交わした証拠として秘密の印を残した。

「同族に呪われるより、僕と共にある方が何倍も苦しいだろう。

しかし、君が選んだ道だ」

「貴方様と入られるなら」

「さあ、闇の中にお入り」

愁斗の手から煌きは放たれ、宙に一筋の傷をつくった。

闇色の傷は唸り声をあげながら広がっていく。

鎮魂歌レクイエムがどこからか聞こえた。いや、違う。それは鎮魂歌などではない。

歌声は悲鳴のようで、泣き声のようで、呻き声のようで、どれも苦痛に満ちている

目を閉じながら、その場にしゃがみ込んでしまっている亜季菜は、両耳を強く強く塞いだ。

愁斗の胸からお紗代の身体が離された。

「さあ、連れて行くがいい」

裂けた空間から 闇 が泣きながら飛び出した。

嗚呼、お紗代の白く美しい肌を、 闇 が犯していくではないか。

闇 がお紗代の腕を掴み、細い脚を掴み、豊かな胸を掴んだ。

全身を 闇 に呑まれたお紗代が開かれた門ゲイトの中に引きずり込まれていく。

愁斗に召喚コールされるまで、蜘蛛の化身お紗代はあの世界で過ごさなければいけない。

いつか愁斗に召喚コールされるまで……。

しゃがみ込んで震えている亜季菜に、織手が優しく差し伸べられた。

「亜季菜さん、僕らの世界に帰りましょう」

亜季菜が顔を上げるまで、少し時間があった。

けれど、亜季菜はしっかりと愁斗の手を握ったのだった。

奇怪な紋様が空に描かれ、それが呻き声をあげた。

愁斗の作った網目の魔方陣は、これ呼び出すための“巢”だ。

それは汚らしい嗚咽を漏らし、この世に巨大な蜘蛛の怪物を生み出す。

傀儡として与えられた運命<sup>さため</sup>。

Case4 怨霊呪弾

怨霊呪弾。

幼女が泣き叫び、男が吼え、老婆が嗤う。

怨霊たちが蠢き、闇を形成する。

蒼白い仮面の奥で紫苑はなにを思うのか？

リボルバーから発射された怨霊呪弾を紫苑が迎え撃つ。

人の怨念を孕んだ呪弾は、発射された直後から紫苑へ向かう途中、辺りの怨念を吸収してさらに力を増していた。

暗い路地のこの場所は、別名 切り裂き街道 と呼ばれる通

り魔の多発地帯だった。

紫苑の目の前で 闇 が産声をあげた。それは呪弾の産声か

否。魔導師であり傀儡師である紫苑が呼び出した 闇。

「喰らえ、叫べ、恐怖しろ！」

仮面の奥から響く声と共に 闇 が咆哮をあげた。

迫り来る怨霊呪弾を 闇 が大きな口を開けて迎え撃つ。

ヘドロが泡立つ音がした。

闇 が、闇 が怨霊を喰らう。より強い怨念が、弱いモノを喰らったのだ。

「あんた、なかなかやるじゃないか！」

薄暗い路地に、西部劇から飛び出してきたみたいなお、テンガロンハットの女ガンマンの声が響いた。その怨霊を扱うとは思えない容貌と活発な声。



紫苑は相手に言葉を返さずに、闇を還すと女ガンマンに背を向けた。

再び紫苑に向けられる銃口。

「逃げる気？」

「私は君に心の弱さを見た。哀れで殺す気も起きない」

「なんですつて!？」

「強がるのは疲れるだろうに。疲れたときは、その銃を捨てればいい」

「バカいうんじゃないよ！」

上ずり声をあげ、逆上した女ガンマンはリボルバーの引き金を引いた。

路地に一筋の煌きが放たれた。

紫苑の放った妖系は実体のない怨念を容赦なく切り刻んだ。

耳を塞ぎたくなる絶叫が木霊する。

「操りの糸で葬られたモノは、成仏できずに縛られ苦しみ囚われる。それらの存在は私を呪い、私の力の糧となる。君は派手な装いと、気丈な態度で怨念に憑かれないうようにと必死なのがわかる。君は自分の扱っている力に恐怖している。それではいつか怨念に吞まれるぞ」

紫苑はそういい残し、夜闇の中に消えていった。

残された女ガンマンは、紫苑が語る最中も、背を向けて立ち去る最中も、再び銃を構えることができなかった。

圧倒的な力の差。いや、それだけが理由ではない。再び怨霊呪弾を使ったとき、果たして今の気持ちで怨念に飲み込まれず

に済むか。紫苑の言葉により、女ガンマンの心には確実に恐怖が広がっていたのだ。

グラスにビールを注ぎながら亜季菜はソファーにどっしりと腰を掛けていた。

「その女ガンマンが出てきて標<sup>ターゲット</sup>的に逃げられたの？」

「そうです」

愁斗は短く答えた。その口調は機械的で、感情がまったく感じられない。

鼻のため息をついて亜季菜はグラスの中身を一気に飲み干した。口の周りの泡を手の甲で拭うと、ついで亜季菜は唇を艶めかしく舌で舐め取った。

「今日のビールは苦いわね」

「皮肉ですか？」

「そうよ」

再び瓶からグラスにビールを注ごうとするが、グラスの中には滴が落ちるのみで、亜季菜はビール瓶を持ちながらキッチンを指差した。

「ビール取ってきて」

「それが最後です」

「うつそ〜ん」

床には空き瓶が一本、二本……六本もある。飲みすぎだ。それでも酒豪の亜季菜はまったく酔った様子もない。

「ビール切れたなら、こっち来て肩揉みして頂戴」

酔ってなくても絡むのは普段からだった。

愁斗は嫌な顔をしながらも亜季菜の肩を揉み始める。昔は嫌な顔すらしなかった。

嫌な顔をするのは、感情を表に出すようになって来た証拠だと亜季菜は思っている。ただ、仕事のことになると、機械的で感情が乏しくなる。仕事の内容を考えれば感情を消したほうがいい。けれど、亜季菜は愁斗にただの人形になって欲しくないと思っていた。

「肩はもういいから、次は脚」

そう言って亜季菜はソファアの上でうつ伏せになる。肘置きに両腕をクロスさせながら置き、頭と足がソファアから少しはみ出る。

ミニスカートから伸びた脚はスラリと長く、引き締まっただけで女性特有の柔らかさも備えていた。食べてしまいたいとはよく言ったものだが、亜季菜の脚はまさにそれと言えよう。ふくらはぎを揉まれる亜季菜の表情は至福の笑みを浮かべている。

「ああん、やっぱり愁斗のマッサージが一番効くわ。そのまま腰も揉んで頂戴」

「わかりました」

「昨日ホテルで呼んだマッサージが下手で下手で、すぐに帰ってもらっちゃったわよ」

マッサージをする愁斗の手つきは慣れたものだ。妖系を扱う傀儡師ということもあってか、指先の動きは卓越しており、並

みのマッサージ師よりよっぽど上手い。

腰に手を掛けたところで愁斗の指に力が入った。

「ところで亜季菜さん」

「なにかしら？」

「女ガンマンについてなにか心当たりは？」

「まだ仕事の話する気？」

「はい」

「嫌よ」

「困ります」

「明日」

「わかりました」

愁斗は粘ることはなかった。気分屋の亜季菜にこり押しをし  
ても駄目なときは駄目だ。明日というなら明日まで待つしかない。  
だが、必ずしも明日まで待つ必要はない。

「マッサージ終わったら伊瀬<sup>いせ</sup>クンに調べさせるわ」

「今日も伊瀬さんは外で待機ですか？」

「そうよ」

「たまには部屋に呼んだらどうですか？」

「愁斗ってば、いつからそんな気遣いできるようになった  
の？」

問いに対して愁斗は無言で答えた。それっきり愁斗は口を開  
くことなく淡々とマッサージを続けた。

亜季菜はため息をつく。沈黙を好まない彼女はめんどくさい  
そうにテーブルの上からケータイを取った。掛ける相手は今出

たばかりの名前だ。

「もしもし伊瀬くん部屋に来て頂戴」

《緊急事態でしょうか?》

「違うわよ。たまには部屋で一杯やりましょうよ」

《勤務中なので丁重にお断りします》

すかさず愁斗からもツッコミが入る。

「お酒はもうありませんよ」

「わかっているわよ」

《わかっているなら、誘わないでいただきたい》

「そうじゃなくて!」

怒ったように亜季菜は声を張り上げた。

「そうじゃなくて、今のは伊瀬くんじゃなくて愁斗に言ったの

よ」

《そうですか》

二人そろってこの口調だ。どちらも機械的で、性質の違う亜季菜を疲れさせる。友達ならばとつくに疎遠になっているタイプだ。それでも亜季菜が二人と付き合うのは、彼女にとって“メリット”があるからだ。

「とにかく、部屋に至急来て頂戴。愁斗も会いたがってるわよ」

伊瀬の返事を待つ前に亜季菜はケータイを切った。

「僕は別に会いたいだなんて言ってますんけど」

「気にしない気にしない」

マンシヨンのインターフォンはすぐに鳴った。

もちろん亜季菜に否応なしに呼ばれてしまった伊瀬だ。

「愁斗君くんばんは」

「くんばんは」

玄関からすぐに愁斗によつて伊瀬はリビングに通された。

リビングでは亜季菜がタバコを吹かせている。

「さつそくだけで伊瀬くん仕事よ」

「仕事なら『一杯』などと言わずに、最初からそう言うてくださればよかつたのに」

視線を落としながら伊瀬はソファーに腰掛けて眼鏡を掛けなおした。これが彼の準備万端の合図だ。

亜季菜は愁斗に促し、女ガンマンについての情報を語らせた。背格好やおよその年齢、愁斗が女ガンマンの特徴を語るのを伊瀬は静かに目を閉じて耳を傾けていた。もちろんただ聴いているだけではない。このとき伊瀬の脳内では、常人では考えられないほどの情報量が瞬時に処理されていた。

俗に記憶屋と呼ばれる者たち。その者たちの仕事は物事を記憶すること。使う道具は己の脳のみ。脳をまるでハードディスクのように、瞬時に記憶し、検索し、必要な情報を取り出す。それが記憶屋だ。

記憶屋の中には亜種もあり、サイボーグ手術によつて記憶媒体を身体に、主に脳に埋め込むタイプもいるが、脳に及ぼす影響や、環境の変化に弱い。そのため、人数も少ないことも相まって、ナチュラルタイプは重宝される。

今ここにいる伊瀬は両親共にナチュラルのサラブレッドだっ

た。しかし、両親共にナチュラルタイプであっても、子供がその能力を必ず受け継ぐわけではない。あくまで確率が高くなるだけだ。

記憶を伝達するシノプシスに電気が走る。

「該当件数は一ですね。第一予備候補と第二予備候補を加えると数に変動がありますが、特徴的な人物ですから一桁以内には該当者がいると思います」

「その第一候補の名前は？」

愁斗が尋ねた。

「ヴァージニア 若手のヒットマンですが、ここ最近の間にランクを上げているようです。その名前が裏の世界に現れたのは三年ほど前、それ以前のデータんについては私も記憶していません」

ランクとは殺し屋などの総合ランキングのことである。もちろんランキングが高いということは報酬も高くなり、ランクを上げるということは殺し屋たちステータスになるのだ。

しかし、ランキングに名前を乗らない、トップレベルの殺し屋もいることを忘れてはならない。

愁斗 裏の世界での名は紫苑。その紫苑が狙った今回のターゲットは、姫野<sup>ひめの</sup>亜季菜が別の人物の名義で興じた会社の技術者であった。その技術者が開発した新兵器と一緒に逃げ、別の会社にその新兵器を売ろうとしているというのだ。

幸運なことにまだ取引は行われていないらしく、紫苑に設計図などのデータと逃げた技術者の取り押さえが命じられたのだ。

しかし、技術者を目の前にして女ガンマン　ヴァージニアが現れたのだ。

ヴァージニアの狙いは技術者だった。なぜ技術者を狙うのかわからないが、同じく技術者を狙う紫苑と鉢合わせし、紫苑を妨害したのだ。つまり、技術者を誰が殺しても構わないというわけでないらしい。それは紫苑とて同じだった、技術者から設計図などのデータも取り返さなければならぬため、葬るのそのあとだ。

ということは、ヴァージニアもまた設計図を狙う別の企業に雇われたのだろうか？

それはおそらく違うだろう。ヴァージニアは純粹なヒットマンであり、ターゲットを殺すことだけが仕事だ。それ以外の仕事はしないのだ。ではなぜ？

仕事を終えた伊瀬が立ち上がった。

「ヴァージニアについて詳しく調べてみます。では、私は外での待機に戻ります」

部屋を出て行くこうとする伊瀬を亜季菜が止めた。

「ちよつと待ってよ伊瀬くん、たまにはウチでのんびりして行きなさいよ」

「私の仕事は二四時間、のんびりなどしてはくれません」

「あつそ」

亜季菜が突き放したように言うと、伊瀬は雇い主に背を向けて部屋を出て行ってしまった。



ヴァージニアはベッドの中で震えていた。

怨霊呪弾は人の怨念を封じ込め作られた邪道の呪弾。それを扱うものは強い精神力を持つていなければならぬ。さもなければ、自らの呪弾に吞まれてしまうのだ。

今まで使っていた怨霊呪弾が怖い。怨霊呪弾が恐ろしいとヴァージニアははじめて思った。いや、自分の使っている怨霊呪弾が子供の玩具だと思われられたのだ。

あの仮面の男は何者なのか？  
違う、そんなことじゃない。

あの男が扱った 闇 が問題なのだ。

闇 とそれが這い出てきた 向こう側の 異界。あんなおぞましい狂気を孕んだモノがこの世のモノのはずがない。だから異界なのだ。

ヴァージニアは怨霊呪弾の技を日に日に磨いていた。呪弾の孕む怨念が増し、強力な力となる。それを扱うためには精神力も鍛えなければならなかった。

いつか自分の扱う怨霊呪弾もあの 闇 のようになるのだろ  
うか？

無理だ。

いくら自分が精神力を鍛えても、あんな異常なモノは扱えない。  
い。

きっとあの仮面の男も人間じゃないんだ。

仮面の奥には悪魔か魔物が棲んでいるに違いないんだ。

ヴァージニアは必死に震えを止めようとした。このままでは

自分自身が怨念に呑み込まれてしまう。それは死よりも苦しい。ベッドから起きたヴァージニアは、脇に置いてあったリボルバーを見た。

幾何学模様の刻まれたリボルバーと怨念を封じ込めてある呪弾。これを捨ててしまえば、恐怖から解放される。

強がるのは疲れるだろうに。疲れたときは、その銃を捨てればいい。

あの男の声がヴァージニアの脳裏に響いた。

「大丈夫、アタシは大丈夫さ。アタシにはこれが必要なんだ。アタシが頼れるものはこれしかないんだ」

自分に言い聞かせ、ヴァージニアはリボルバーを手に取り、そつと胸に押し当てた。

二つの鼓動が共鳴する。

ヴァージニアはリボルバーを台の上に置き、再びベッドに入った。

そして、意識は安らかな闇の中に落ちていくのだった。

いつもと変わらぬ授業風景。

学生服を着た生徒たちが黒板に机を向けて授業を受けている。教師の話をおかずにおしゃべりする者、机の下でこっそりマンガを読んでいる者、堂々とケータイをいじっている者。

そして、真摯な眼差しで黒板を見つめ、ノートを取っている者。だが、その者の片手は机の下で忙しく動かされていた。

愁斗である。

愁斗は遙か遠くにいる“傀儡”を遠隔操作しているのだ。

学校を休むこと自体は問題ではないが、中学生である愁斗が真昼間から堂々と町中を歩くのは問題がある。補導される可能性は低いが、人目について印象に残るのはまずい。

愁斗が操っているのは以前、傀儡に造り変えた若いOLだった。普段はどこにでもいるOLとして生活している彼女だが、愁斗との契約により、時として愁斗の傀儡として活動する。操られている最中の記憶はない。事が終われば彼女は普通の生活に戻っていくのだ。

今は個人ではなく、ただの傀儡だ。

愁斗の操る傀儡は町中を歩いていた。

どこにでも有り触れた住宅街。まばらだが、たまに車の通る平凡の中にこそ、非凡が身を潜めているのだ。

傀儡はアパートの前に立っていた。築二〇年以上の安アパートだ。

かつんかつんとヒールを鳴らしながら傀儡は鉄製の階段を上る。そのまま向かう先は203号室だ。

インターフォンが鳴った。

203号室の奥からは物音ひとつしない。

もう一度インターフォンが鳴った。

やはり、物音ひとつしなかった。

再度インターフォンが鳴ると、部屋の奥で微かに物音が鳴った。このとき、生身の体であれば、ドアのすぐ側に立つ人間の気配を感じられただろう。住人がドアスコープで外の様子を窺

っていたのだ。

しつこくもう一度インターフォンを鳴らした。

すると今度は明らかな物音がして、ドアが微かに開かれた。

チェーンロック越しに、眼鏡をかけた男の眼が覗く。

「どなた？」

男の声は微かに怯えていた。

「保険会社の者です」

これは嘘ではない。普段この傀儡は保険会社で訪問セールスをしているのだ。

「そういうのは結構だから」

男はそういうとドアを素早く閉めてしまった。

愁斗は傀儡の眼を通して男の姿を確認していた。間違いない探している男だ。

目の前の現実で鐘がなった。

教師が教室を出て行き、教室が一気にざわめき立つ。

愁斗も何気ない仕草で席を立ち、ポケットからケータイを出す。窓辺に寄りかかり、伊勢に電話をかけた。

「もしもし」

《ご用件は？》

「探し物を見つけました」

その後、愁斗は住所だけを言って通話を切った。

愁斗の仕事はここまでだ。後は誰かが引き継いで男を確保するだろう。

日常の景色に溶け込んでいく愁斗。

授業の開始を知らせるチャイムが鳴る。

学生だけに与えられた時間 放課後。

夕焼け空の下、愁斗はひとりで帰路についていた。

学校での友達はいない。転校して来たばかりということもあるが、愁斗自身が意図的に友達を作らないようにしていたのだ。

愁斗のケータイが鳴った。

「もしもし」

《伊瀬です。男に逃げられてしまいました》

「それで僕になにをしろと？」

自分に電話をかけてきた以上、なにか頼み事があるに違いない。かつた。

とても簡潔でスムーズに話が運ぶ。

《どこで嗅ぎ付けたのか、あの女ガンマン ヴァージニアと

も遭遇してしまいました。愁斗君には女ガンマンの処理をお願いします》

「場所は？」

《愁斗君がいる駅から一つ前の駅から、愁斗君のいる駅方向へ走っている電車です》

足を止めて通話をしていた愁斗だが、伊勢の言葉を聞いてすぐに階段を上がり駅内へと急いだ。

「桂木もその電車にいるんですか？」

桂木とは亜季菜たちが探している設計図を盗み出した研究者の名前だ。

《はい、ですから、すでに桂木とヴァージニアが遭遇した可能性は大いにあります》

「電車の中で殺されると思えますか？」

《では、よろしくお願いします》

答えは返されず通話を切られた。

愁斗は急いで改札口を通り抜け、ホームに目をやった。電車は来ていないが、すぐに電車が到着するとアナウンスで放送されている。

下り線のホームに電車が到着する。愁斗はすぐに乗り込むことをしない。辺りの様子を窺いながら、降りてくる乗客の確認をしていた。

いた。

眼鏡の男にびったり寄り添うブロンドヘアの女性。二人には見覚えがある。ひとりには桂木、もうひとりには前に会ったとき違いラフな格好をしているが、テンガロンハットだけは前と変わっていない。

カップルとは思えない。援助交際にも見えない不釣り合いな男女の前に愁斗が立ちはだかった。

「お二人にお話があります」

桂木は額にも鼻の頭にも脂汗をじっとり滲ませていた。後ろにいるヴァージニアは不信の目で愁斗を見つめて黙っている。

学生服に身を包んでいるが、中身はただの学生ではない。ヴァージニアはそれを瞬時に悟っていた。自分と同じ、血の香りがする。

ヴァージニアは桂木の腕を掴んで走り出そうとした。しかし、桂木の身体は石のように硬くびくもしない。愁斗が桂木の身体を妖系で固定していたのだ。

だが、愁斗はこのとき致命的なミスに気づいていた。

ヴァージニアがリボルバーを抜いたのだ。

人の大勢いるホームで騒ぎを起こすわけにはいかなかった。

少し前まではヴァージニアもそう考えていただろう。しかし、目の前に謎の中学生が現れてしまったのだ。

銃口が愁斗の眉間にターゲットイングされる。

「この男に掛けた術を解きな！」

ヴァージニアは桂木の身体が動かなくなったことを瞬時に謎の中学生と結び付けていた。

向かいのホームに電車が到着しようとしている。

駅員がそろそろ駆けつけて来るかもしれない。

“愁斗”として騒ぎを起こすことは絶対あつてはならなかった。

「早くこの男を動けるようにするんだよ！」

「望みどおりにしよう」

愁斗が呟く。

すると次の瞬間、桂木がぎこちない足取りで走り出したのだ。ホームを駆け出す桂木を見てヴァージニアに一瞬の迷いが生じる。彼女は桂木を選んだ。目の前の中学生を見ながらも、逃げ出す桂木を追ったのだ。

逃げる桂木よりもヴァージニアの方が明らかに早い。このま

までは追いつかれるのは時間の問題だ。

生きている人間を操るのは難しい。操系の術はまだまだ完成されていないのだ。

後に使えることになる。切糸も、今の愁斗は生身のままで使うことができなかった。

急いで愁斗はケータイを取り出した。

「もしもし、伊瀬さん桂木を。操系で確保しました。大至急駅の東口に車を回してください」

《白いバンがすぐに向かいます》

桂木の後をヴァージニアが、その後を愁斗が追っていた。

遠隔操作している対象から絶対目を放してはならない。傀儡であればその眼を通して映像を。視ることができると、生きている人間ではそうもいかなかった。生きている人間は肉眼で確認して操作しなければならなかったのだ。

気を失っていない人間を操るのは最悪だ。

階段を転げ落ちないように慎重に下り、桂木の身体は駅前のロータリーに運ばれた。

本来タクシーだけが進入を許された場所に白いバンが乗り込む。

バンはスピードを緩めながらも停車することなくドアが開けられ、帽子を目深に被ったスタッフが桂木に向かって手を伸ばした。

ガシッと桂木の手首が捕まされると、桂木の身体は呑み込まれるようにして車内に引きずり込まれた。



バンのケツにヴァージニアが銃口を定める。

悲鳴があがった。

この世のものではない叫び。

幼女が泣き叫び、男が吼え、老婆が嗤う。

怨霊呪弾がバンに向かって発射された。

発射された呪弾はバンを後部を掠め、金属を溶解したように溶かしてしまった。

的を外れ呪弾は通行人に当たり、通行人の身体は闇色の傷痕を残し、痛みよりも恐怖で発狂し、蒼い炎によって焼かれて死んでしまった。

辺りは一瞬にして騒然とし、なにが起きたのか理解できないまま人々は逃げ惑った。

桂木に逃げられ、ヴァージニアは辺りを見回すが、謎の中学生の姿もすでに消えていた。

駅前の交番から警察が駆けつけてくる。

ヴァージニアもまた雑踏の中へ姿を消したのだった。

身体を自由を奪われたまま、桂木は車内の座席に座らされていた。

「設計図はどこにある？」

体つきのいい近藤が桂木の尋問に当たっていた。

車の中にいるのは運転手を含める男三人と、桂木の計四人だった。

線路沿いに走っていた車とはある駅前で停車し、五人目を乗

せることになった。電車で移動してきた愁斗だ。

桂木の身体は愁斗によって拘束されたままだ。これを自由にできるのは愁斗だけだ。だが、今はまだ解くわけにはいかない。改造されたバンの中は機材が詰まれ、ほとんどの座席は取り払われてしまっている。

愁斗は桂木の前に立った。

「設計図はどこにありますか？　しゃべっていただけなのなら、今あなたを拘束している“力”であなたの身体を締め上げますがよろしいですか？」

この“力”について、桂木は身にしみて理解していた。あのとき、自分の意思に反し身体を動かされ、抵抗するが激しい痛みが身体の芯を貫き、抵抗をすることも止めても無理やり動かされる身体には痛みが走ったのだった。あれが意図した痛みでないとしたら、意図して痛みを与えたときの痛みは想像を絶する。

桂木の表情は怯えきっていた。いつか傀儡を通して愁斗が見たときよりも怯えている。

設計図を盗み出し転売しようとした割には、小動物のように震え上がる小心者のようだ。

恐怖は限界まで達し、防波堤が崩れたように桂木は口を開く。「駅だ、駅にある。駅のロッカー、コインロッカーに隠してある」

「鍵はどこに？」

愁斗の口調は刃物のように研ぎ澄まされていた。

「鍵はここだ。私の背広の内ポケットに入ってる」

近藤が無造作に桂木の背広の内ポケットを探り、小さな鍵を見つけ出した。確かにそれはコインロッカーの鍵のようだった。

近藤が桂木の胸倉を掴んだ。

「どこの駅だ！」

「羽呂駅だよ、羽呂駅の南口にあるコインロッカーだよ」

脂汗をじつとりと掻き、蒼ざめた顔をする桂木の言葉に嘘はないように思える。そこに愁斗が追い討ちを掛ける。

「嘘だった場合はそれ相応の手段を取らせてもらいます」

桂木は震えながら頷いた。震えすぎて首を縦に振っているのか横に振っているのかわからない。

羽呂駅は現在いる駅から、六つ行ったところにある駅だ。今来た道とは反対方向にある。だとしても、ヴァージニアと鉢合わせということはずまないだろう。

車は一路、羽呂駅へと向かう。念のため、この場所で他の色のバンに乗り換えるという念を入れた。あの駅で騒ぎを越したことと、ヴァージニアへの警戒のためだ。

線路沿いに車を走らせ、五つの駅を跨ぎ辺りの景色にビルが増えてきた。もうすぐ羽呂駅だ。

羽呂駅近くで近藤が車から降り、桂木や愁斗たちを残して駅の中に入っていった。

いくつかの路線が交わる羽呂駅は大きく、ショッピングモールも隣接しているために人通りが多い。この街で人を探すのは大変だろう。紛れてしまったら見つからないかもしれない。

しばらくして、近藤が早足で戻ってきた。

近藤はバンの中に戻るなり、桂木の胸倉に掴みかかった。

「おい、設計図はどこだ！ ロツカーの中は空だったぞ！」

この言葉を聞いて桂木は飛び出しそうなくらい眼を見開き、血の気の引いた蒼白い顔を振るわせた。

否定の言葉を発したかったが、喉もカラカラで桂木は口をあ  
んぐりまただ。

「あ……あが……そ、なんな……」

『そんなばかな』とでも言いたかったのかもしれない。だが、  
近藤の追及は激しさを増した。

「よくも騙したな、まずは手の指からへし折ってやる！」

「……違う、ちが……違うんだ」

「なにがだ！」

「嘘なんて言っていない信じてくれ！！」

心の底から叫んだ。そこ叫びが通じたのか、桂木と近藤の間  
に愁斗が割って入る。

「近藤さん冷静に、彼の言い分を聞きましょう」

無感情の声に近藤の頭からすつと熱が抜け、踵を浮かせてい  
た桂木の足が地面につくことを許された。

桂木の胸倉か手を放した近藤は、腕を組んで再び追及をはじ  
めた。

「ゆっくりでいい、話せ」

ごくりと唾を呑んで桂木が話しはじめた。

「だから違うんだ、私は嘘なんかついていない。あの確かに口

ツカーに入れておいたんだ、本当だ、本当なんだ、信じてくれ」

もし、桂木の言っていることが本当ならば、設計図はどこに行ってしまったのか？

「盗まれたということでしょうか？」

愁斗は周りの男たちを見回して同意を求めた。

「おそらくそうだろう」

と近藤。

だが、盗まれたとしたら、誰が盗んだのか？

設計図は新兵器の設計図で、それを狙うものは数知れない。

ライバル企業かもしれないし、軍関係かもしれない。その中から盗んだ相手特定するには情報が少なすぎる。

すぐに設計図が紛失したことを連絡し、桂木の身柄は別の場所に移されることになった。だが、その前に桂木がコインロッカーまで連れて行ってくれと申し出をしたのだ。設計図が盗まれたことに納得していないのかもしれない。

桂木を連れ近藤が再びコインロッカーまで行くことになった。

これに愁斗は同行し、桂木の身体の一部を一時的に自由にした。駅ビルは人で混雑している。

コインロッカーが並ぶ一角で足が止まる。

近藤がコインロッカーを再び開けるが、やはり中にはなにもない。中が空であることを全員で確認し、一斉に桂木へと眼が向けられた。

靴紐を直していたらしい桂木が立ち上がり、コインロッカー

の前に歩み寄った。

「違うんだ、そのロッカーじゃないんだ」

誰もが『なにを言ってるんだ？』という顔をした。

桂木は近藤が開けたロッカーとは違うロッカーを開け、中から茶色い紙袋を取り出した。

刹那、閃光が辺りを包んだ。

視界は白で遮られ、辺りであがった叫び声だけが耳に届いた。眼をやられながらも、愁斗の指先は微かな動きを捉えた。

「逃げました、桂木が逃げました！」

だが、桂木の身体には妖糸が巻きつけられている。これを辿ればすぐに追いつくことができる。

視界が直らないまま愁斗は桂木を追って走りはじめたのだ。た。

桂木は見事に逃げたのだ。こうやって何度も危険を潜り抜けてきた。

ダミーのコインロッカーの鍵を渡し、逃げるチャンスを作るためにバンの外に出て、コインロッカーまで行くのも桂木が話を誘導したのだ。あとは靴紐を直すふりをして、靴の中に隠しであつた鍵を取り出した。

駅内を走り、愁斗たちと距離が開いたところで早足に代えた。人ごみに紛れてしまえば勝ちだ。そう桂木は高をくくっていた。だが、恐怖は後ろから迫っていた。

数多くの危険を掻い潜る才能を持つ桂木は、その手の雰囲気

を感知する能力に長けていたのだ。

後ろから迫り来るプレッシャー。

自分を追ってくる者がいることを感じた桂木は後ろを振り返った。

人ごみの中にも、その自分物だけが浮いたように見える。他の人から見ればただの学生だ。どこにでもいうような学生にしか見えない。しかし、桂木の目には鬼気迫るモノが見えたのだ。

どうやって自分を追ってきた？

可能性はあった。

あの不思議な術だ。

身体を拘束していた謎の力。あの力がまだ身体についているのかもしれない。それを追ってきたに違い。

身体はどこを見回しても、その力がどこについているのかわからない。不可視の力がついていて。それを取り払わなければ、どこまでも追われてしまう。だが、桂木にはどうする術もなかった。

逃げ回っていても捕まるのは時間の問題だ。

桂木は足を止めた。

すぐに桂木の方に手が乗せられた。

「逃げても無駄ですよ」

「わかってる。だから足を止めたんだ」

一切の震えも含んでいない声。

桂木は振り返って愁斗に顔を向けるが、やはりその顔は怯え

を含んでいなかった。

「逃げ切れる計算だったのだが、どうやら君の方が私より上手だったらしい」

「そんなことはありません。すっかり僕はあなたの演技に騙されてしまいましたから。しかし、もうあなたのことは決して逃がしませんよ」

「……くっ」

「その紙袋を渡していただきたい」

桂木がロッカーから取り出した紙袋、この中に設計図があると愁斗は踏んでいた。

だが、渡された紙袋の中を覗いた愁斗は訝しげ眼差しだった。リボルバーと換えのマガジン、他にも謎の装置があるが、設計図らしく物や、それを記録する記憶媒体も見つからなかった。

「設計図はどこだ？」

「ずっと私が持っている」

「身体検査ではなにも見つからなかったはずだ」

「簡単なことだ、設計図はここに詰まっているのだから」

桂木は脳を指差して笑った。

精密機器の設計図お頭に叩き込むなんてできるはずがない。

「まさか、信じられない」

「本当だ。他のデータは全て廃棄してしまった。設計図はもう私の脳の中にしかない」

愁斗は桂木の腕を掴んで、近藤と合流しようと歩き出した。もう逃がすわけにはいかない。



辺りの人ごみがどつとどよめいた。

すぐに愁斗も気づき、辺りを見回す。

なにが起きた？

叫び声が聞こえる。

いや、泣き声が聞こえる。

違う、笑い声だ。

怨霊呪弾だ！

愁斗が桂木の身体を地面に押し倒す。その真上を抜けていく  
怨念。

呪弾は愁斗たちを掠めて、通行人を蒼い炎で包み込んだ。

本物の叫び声があがり、逃げ惑う人々。

押し倒し合い、我先へと逃げていく。その醜さが呪弾の力と  
なる。

二発目の呪弾が発砲された。

愁斗は桂木の腕を引き、階段の物陰に隠れた。

狂気を孕んだ呪弾は壁に当たり、闇色の渦を巻く穴を作った。

こんな場所で騒ぎを起こすわけにはいかない。

騒ぎはすでに起きてしまっているが、愁斗はその渦に自ら飛  
び込めない事情がある。あくまで愁斗は一般の学生であり続け  
なければならぬ。

物陰に隠れていた愁斗たちの傍に、近藤が駆け寄ってきた。

「ここは俺に任せて行け！」

愁斗が頷く。

「わかりました」

駅前に止めてあるバンまで逃げるのが得策と考えたが、その出口がある道にヴァージニアが立っていた。

遠回りするか、無理やりヴァージニアの横を抜けるか。

近藤が銃を構え物陰から飛び出した。

物陰から飛び出してきた大柄の男にヴァージニアの目が向けられた。

その隙を突いて、愁斗は遠回りの道を選んで逃げる。

銃声が響く。しかし、それは狂気を孕んでいた。

しまった！

蒼白く燃え上がる桂木の片腕。

愁斗の手が煌きを放ち、蒼い炎に包まれた腕が飛んだ。

再び愁斗の手が妖糸を放ち、斬られた桂木の腕をきつく縛り止血する。

痛みに耐えかね桂木は呻きながら地面に膝をついてしまった。

「腕が腕がああつ！！」

「斬らなければ全身が灰になっていた。立て、逃げるぞ！」

すでに切り落とされた腕は黒焦げの灰と化していた。

銃声が響く。

今度は近藤の銃が火を噴いた。

ヴァージニアの太ももが血を吹き、痛みで身体のバランスが崩れる。それでもヴァージニアは呪弾を放っていた。

「ぎゃあああああ！」

蒼い炎が巨体を呑み込む。

一部始終を見ていた愁斗が叫ぶ。

「近藤さん！」

業火に焼かれ床で転げまわる近藤の姿は無残としか言いようがなかった。生きたまま焼かれる苦しみを誰が理解できようか？

冷静な愁斗にも焦りがよぎり、床にうづくまる桂木を必死に立たせようとする。

「立て！」

「腕が……私の腕が……」

こうなったら仕方あるまい。妖糸で無理やりにも歩かせられない。

リボルバーを構えるヴァージニアが走り寄って来る。

だが、愁斗はすでに別のモノを操っていたために桂木を動かすことができなかった。

桂木に銃口を向けようとしたヴァージニアだが、危険を掻い潜ってきた勘が働いて後ろを振り返った。

サングラスと帽子を被った長身の人物。顔は見え長いが、タイトスカート姿と胸の膨らみから女性ということがわかった。

しかし、そこにいる気配はするが、人間のような気配がしないのだ。

ヴァージニアは動けなかった。

とても恐ろしい存在が目の前にいる。

その隙を衝いて愁斗は桂木を抱きかかえて無理やり走らせ逃げた。

ヴァージニアの前に立つ女性は言う。

「おまえと会うのは二度目だな」

中性的で男性とも女性とも取れる声だった。

さっきの中学生が“こいつ”じゃなかったのか？

二人の存在は同じ気配を持っている。だが、こちらの方が強い。はじめて 切り裂き街道 で出会ったのは“こいつ”だ。

女性 紫苑が動く。

愁斗よりも優れた運動能力。その手が放つ妖系も愁斗の腕を逸脱していた。

身体が動かない。ヴァージニアの四肢はすでに妖系によって動きを封じられたのだ。

早すぎる。ヴァージニアの目には、紫苑は手を一振りしかしていない。それで四肢を全て封じられてしまったのだ。

圧倒的な実力の差を前にヴァージニアはなす術がない。

「あたしの負けだよ、殺すなら殺せ！」

「女性は殺したくない。手を引け」

「それはできないね！」

「強がるのもいい加減にしろ。おまえの震えはすべて私に伝わっている」

妖系はヴァージニアの動揺すらも紫苑の手に伝えていたのだ。力の入らない手で、ヴァージニアは辛うじてリボルバーを握

っていた。

弾の数はあと一発。

身体が動かなければ弾を撃つチャンスもない。

異変が起こった。

紫苑の身体から力が抜け、ヴァージニアの身体を縛っていた妖糸も緩んだのだ。

その隙を自分の物にしたヴァージニアが、至近距離から紫苑に向けて銃を放った。

怨霊呪弾は紫苑の胸に大きな穴を開けて、遠くの壁に当たって四散した。

胸に穴から紅い液体が滝のように流れるが、辺りを満たした匂いはオイルのような臭いだった。

人間じゃない！

ヴァージニアがそう悟ったときにはすでに異変ははじまっていた。

紫苑の身体から流れ出ていた紅い液体はやがて黒く変わり、液体とも気体ともつかぬ物資が流れ出した。

その黒いモノを吸い込んでしまったヴァージニアは、胸が焼けるような痛みを襲われ、咳き込みながら地面に倒れこんでしまった。

身体が痺れ動けないヴァージニアの耳に、苦痛に満ちた悲鳴が聴こえた。

闇　　が宙を飛び交っている。

視界の先に二人組の警察官の姿が見えた。

ヴァージニアはわかった。来てはいけない。

宙を飛び交っていた　闇　　が警察官に襲い掛かる。

骨が砕ける音と共に肉がミンチのようになって弾け飛んだ。

相棒の警察官の顔にも肉がへばりつき、放心状態になったまま 闇 に呑まれた。

ヴァージニアにはなにが起こったのかよくわからなかった。わかることは紫苑の身体に開いた穴から 闇 が噴出しているということだ。

気力を振り絞り絞りヴァージニアはこの場から逃げ出した。

背中の後ろで泣き声が聞こえる。振り返ってはいけない。逃げなくてはさっきの警察官と同じ目に遭う。

駅の外まで逃げたヴァージニアは辺りを見回した。まだ身体が重く、視界が少しぼやけている。

多くの人々が集まりざわめき立っている。

その先を走る男の姿をヴァージニアは捉えた。片腕の無い男

桂木だ。

愁斗いたはずの桂木が一人で走っている。もしかして逃げ出したのかもしれない。

ヴァージニアはすぐに桂木のあとを追った。

人ごみを掻き分け、ヴァージニアの手が桂木の肩に掛かった。

「逃がさないよ！」

ぎょっとした桂木が後ろを振り向いた。

「今度はおまえかっ！」

「あんたはあたしが殺すんだ！」

「クソッ」

桂木は全身の力を込めてヴァージニアにタックルした。

後ろに飛ばされたヴァージニアには目もくれず、桂木が車道

に飛び出して逃げる。

ヴァージニアの目が見開かれた。

「お父さん危ない！」

自分と呼ばれた桂木に耳にその言葉は届かなかった。

恐怖に顔を歪ませた桂木の身体を大型トラックが跳ね飛ばした。

激しい衝突音に歩行者たちの目がいつせいに向けられた。

人が宙を飛ばされている。

地面に叩きつけられた桂木にヴァージニアと愁斗が駆け寄った。

桂木の脈を取った愁斗が静かに告げる。

「即死だったらしいな」

「いいはまだよ」

吐き捨てたヴァージニアは愁斗に目を向けようとしなかった。誰も呼んでいない救急車が事故から三〇秒も立たないうちから到着し、桂木の屍体を搬送していく。この救急車は桂木の腕の怪我で呼ばれた救急車だった。しかし、この救急車は本物ではなく、亜季菜の手が回った偽者の救急車だった。

愁斗の横に來た黒服の男が小さな声で告げる。

「桂木の脳が損傷を受けていないことを祈るのみです」

「僕は紫苑の回収をします。手回しのほうをよろしくお願  
いします」

事件は呆気なく幕を下ろした。

ヴァージニアも戦う理由をなくし、人ごみの中に消えていっ

た。



Case6 潮騒しおさいの唄

港ではなく漁村。

観光地ではなく寂れた場所。

コンクリの壁に打ち付ける波が風にさらわれ、潮騒の臭いが鼻を刺激する。とてもじゃないが、爽やかな香りとはいえないかった。

「……腐臭に似てる」

愁斗は小さな船着き場から遠くの海を眺めていた。

海をはじめてみた。

しかし、感動できるような景色ではなかった。

空を映したような濁った海水。

海岸の横を通る道を愁斗は海を眺めながら歩いた。

すぐその浜辺ではフナムシたちが群を成し、なにかあるたびに一斉にざわめき移動する。フナムシの量は、普段ここに人があまり訪れないことを物語っていた。

八月の暑い時期だというのに、観光客の影はひとつもない。

その要因は今日の曇り空だけではないだろう。やはりここは観光地ではないのだ。

愁斗がここに来た理由も、もちろん観光目的ではない。

理由を述べるとすれば、海に呼ばれたとでもいうのだろうか。ふと、気がつくと海を眺めていたのだ。

愁斗はひとりだった。その姿を大人に見られたら、声をかけ

られてしまふに違いない。愁斗はまだ一〇歳にも満たない子供だ。

幼い頃に家族を襲われ、父は行方不明、母は死んだ。そして、愁斗は魔導結社の施設へと送られた。

魔導傀儡師である父を持つ愁斗はその才能を見出され、魔導に関する戦闘訓練をあくる日もあくる日も受けた。

死と直面した訓練を受けるうちに、愁斗は自然と精神を閉ざす術を学んだ。

施設を逃げ出してから六ヶ月も経たないが、やはり愁斗の瞳はそこらの子供とは違う。残酷な悪魔ではなく、冷酷なマシンの瞳。九歳の少年が宿す若さに輝く瞳はそこにはなかった。後ろからなにか近づいてくるのは、五〇〇メートル以上後ろに近づいていたときから気づいていた。気にするほどでもない。愁斗は思っていた。世界に住む大半の人間は人を殺さないからだ。

しかし、それは愁斗の予想を反した。

自転車のベルを鳴らし愁斗を呼び止める。

他人に関わるという思考が愁斗からは抜け落ちていた愁斗を殺そうとする者だけが、愁斗と関わりを持つとうとするわけではない。思いやりなどで他人に関わるという思考が愁斗にはなかったのだ。

振り向くと、そこには自転車に乗った制服姿の男がいた。警察官の制服だ。

地元の駐在警官だろうか。

「どうした、母ちゃんとはぐれたか？」

無視しようかと思つたが、愁斗は小さく首を横に振つて見せた。

関わりになりたくない。けれど、それが無理なことは警官の態度からもわかつた。

「じゃあどうしてひとりなんだ？ おまえこの辺りの子供じゃないだろう？」

この警官は納得できる答えをもらうまで、愁斗の近くから離れないだろう。

相手を納得させるだけの言葉を持ち合わせていない愁斗は黙り込んだ。

鋼の瞳に警官の姿が映し出される。

警官は無意識に怯えた。

相手が怯えていることは愁斗も察していた。自分が異質な存在であることを知っているのだ。

黙りこんだ二人の空気を打ち砕くように、野太い男の声をした。

「駐在さんどうしたんだ？」

無精ひげを生やしたタンクトップの男。浅黒い肌と隆々とした腕の筋肉を見て、この辺りの漁師ではないかと想像ができた。しかし、男は片足を引きずるように歩いていた。

二人の傍に来た男は警官に軽く会釈し、愁斗の頭に大きな手をポンと乗せた。

「どっから来た？」

警官と同じ質問をされた。

外の町からこの漁村に来るものは少ない。よそ者が来たというだけで、小さな噂になるようななにもない場所なのだ。

大柄な男を愁斗は見上げ、鋼の瞳で男の眼を捕らえようとした。

男は動じず、怯えることもなかった。

すぐそこにいる警官よりも、強い精神を持っていると愁斗はすぐに判断した。

警官が愁斗に覚えていることは、男にも伝わっているようだ。「駐在さんは仕事を続けてくれよ。俺がこの子の面倒見るからさ」

「そうかいそりゃよかった。仕事が忙しくて、この子ばかりに構ってられなかつたんだ。それじゃノブさん頼んだよ」

自転車のペダルに力を込め、警官は身のこなし素早く去ってしまった。

二人が残され、愁斗は足早にこの場から去ろうとしていた。それを男の大きな軀が遮った。

「俺の名前は伸彦のぶひこつてんだ。おまえの名前はなんつうんだ？」  
愁斗は足を止めたが言葉は返さない。けれど足を止めたただけで、大きな歩み寄りだ。

なにも言わない愁斗に伸彦が一方的に話しかける形になる。

「両親と一緒にじゃないのか？」

愁斗は首を横に振った。

「家出でもして来たのか？」

そう質問しながらも、ただの家出少年ではないことはわかっていた。

また首を横に振った愁斗に伸彦は顎をしゃくつて見せた。

「うちに来い、とりあえず」

愁斗が答えを出すまで少し間があった。そして、出された答えは愁斗には珍しい答えだったのだ。

縦に頷く愁斗を見た伸彦は破顔した。とても豪快な笑みだ。

潮風のおいがした。

海に停泊している小型船が大きく揺れている。遠くの海は荒波を立て、空はどんよりと曇っていた。それでいて、辺りは静けさに満ちている。

嵐の予感。

愁斗が連れてこられたのは木造モルタル塗りの平屋建てだった。

海から吹き付ける潮風のせいかわ化が早く、とても古い家のように見える。嵐でも来たら屋根が飛ばされてしまいそうだ。

小さな家の中には子供がひとりいた。

年のころは愁斗と同じか、それよりも少し上だろう。

子供は物静かに部屋の隅に座って本を読んでいた。愁斗たちが家に入ってきたときも、視線を少し向けただけですぐに伏せてしまった。

そこにいる子供と親を見比べた愁斗は静かに呟く。

「似ていないですね」

疑問を聞き返すような顔をした伸彦はすぐに笑って表情を変えた。

「俺と海男うみおのことか？ 見た目も性格も海の男とは思えないがな、目元なんかは俺そっくりだろ？」

本を読みながら目を伏せている海男。目元が似ているかどうかは、ここからでは判断がつかない。

伸彦と海男の身体つきを比べる限りでは、似ても似つかない親子に見える。細い海男の二の腕は普段から使われていないらしく、体全体も細身で筋肉質な伸彦とは比べ物にならない。

海男をひと目見たときから愁斗は伸彦との親子関係を疑っていた。血が繋がっているか、それだけの問題ではない。特殊な気配を愁斗は感じていたのだ。

家が大きく揺れた。

外を吹く風は強さを増し、嵐がすぐそこまで迫っていることを感じさせた。

木造の窓から外の景色を眺めていた伸彦は窓をぴしゃりと閉めた。

「嵐が来たら外に出れないな。嵐が過ぎるまでゆっくりしてくれよ。なにもない家だけだよ、雨風くらいは凌げる」

掘っ立て小屋のようなこの家が嵐に耐えられるのか。伸彦の言葉には嘘偽りはなかった。

雨風が次第に強さを増し、荒々しく家の外壁を叩くと、家は物音を立てながら揺れる。それでも家は倒れることなく立ち続けていく。

家の中では特に目立った会話はなかった。物静かに本を読み続ける海男と積極的にしゃべろうとはしない愁斗。たまに伸彦が話をするが先が続かない。

「おめえと海男だったら似たもの同士だから、少しは気が合うかと思つてけど駄目だな」

伸彦の眼には二人の少年が映っていた。どちらも背格好の割に大人びた雰囲気がある。この大人びた雰囲気がどこから来ているのか。それを考えると伸彦は恐ろしい気がするのだった。

今までずっと本を読んでいた海男が突然に立ち上がった。

そして、愁斗が静かに呟いた。

「唄が聴こえる」

その言葉に伸彦はゾツとした。

「唄なんて聴こえるもんか、外は嵐だぞ」

吹き付ける風と雨の音。

海男はふらふらと夢遊病のように玄関へ歩いていった。

血相を変えた伸彦が海男の腕を掴んだ。そのとき、信じられないことが起こつたのだ。

細い身体 of 海男が大柄な伸彦を殴り飛ばしたのだ。そんな力が海男のどこに秘められていたのか、驚かずにいられない。

轟々と強烈な雨風が家の中に吹き込んできた。

玄関から伸彦が素足のまま出て行ってしまった。

慌てて伸彦も素足のまま玄関を飛び出し、辺りを見回すが海男の姿はすでにない。

伸彦のすぐ横を愁斗がすり抜けようとしていた。

「探してきます」

そう言つて愁斗は駆け出していった。

「おい待て！」

伸彦の声は愁斗の背中に向けたものだった。声は雨風に掻き消され届かない。

「ちくしょ」

小さく吐き捨てた伸彦は玄関まで引き返し、急いで履き物を履いて海男と愁斗を探しに出た。

雨が顔を激しく打ちつけ視界を遮る。

二人はどこにと辺りを見回すが人影すらない。海の恐ろしさを知る者が嵐の日に外に出ているはずがない。海岸沿いに近づけば高波に吞まれ、一瞬のうちに命の灯火を掻き消されてしまう。

唄が聴こえた。

嵐の中だというのに、澄んだ女性の歌声がどこからか聴こえてくる。

伸彦は首を激しく横に振つて唄を掻き消そうとした。

唄は耳を塞いでも脳に直接届いてしまふ。

この辺りの船乗りならば、この唄の正体を誰も知っている。しかし、誰もそのことを口に出すものはいない。人間が決して踏み入れてはいない領域なのだ。

気がつくと、伸彦は浅瀬近くに来ていた。普段は岩肌が見え、沢蟹や小魚が泳ぐこの場所だが、今は水量が増して高波が目の前まで迫ってくる。



唄はさきほどより大きくなっていた。  
近くにいる。

海男と愁斗と、もうひとつ違う存在が  
。眼を凝らす伸彦の目に少年の影が見えた。

「ここは危険だ、早くこつちに来い！」

伸彦の怒鳴り声に反応して振り向いたのは愁斗だった。

愁斗はちらりと伸彦の顔を見ただけで、すぐに岩陰に消えて  
しまった。

「クソツ」

吐き捨てながら伸彦は愁斗の影を追う。

愁斗の消えた岩陰が曲がると、そこには海水の通る洞穴があり、その洞穴を避けるようになぜか周辺だけ波が穏やかだ。

地元の者は決して足を踏み入れない洞穴。足を踏み入れれば  
必ず祟りが起こるとまで言われている。唄はこの奥から聴  
こえた。

伸彦は意を決して洞穴の中に足を踏み入れた。

洞穴の中は膝まで水かさがあり、横幅は五メートル以上、高さも三メートル以上はあると思われる。外の荒波が流れ込んで  
きても不思議ではないが、やはりここには不思議な力が働いて  
いるように思える。

普段は中まで光の差し込む洞穴だが、曇天が陽を遮ってしま  
い、中は不気味に暗く口を開けている。しかし、伸彦は懐中電  
灯を持っていた。最初からここに来なくてはいけないことを知  
っていたのだ。

奥に進むライトが人影を捕らえた。

一人目は愁斗。その奥にいるのは海男だ。

「早くこつちに来い！」

伸彦の叫びに耳を傾けるようすはない。

ライトを奥に照らしながら伸彦が駆け寄ろうとすると、愁斗が大声で叫んだ。

「来ないで！」

細い輝線が手から放たれた。

刹那、奇声にも似た女の叫び声が洞穴に木霊し、伸彦は慌て大きく跳ね上がった水しぶきにライトを当てた。

なにかにライトが反射し、七色の光が伸彦の目を眩ませた。

そこになにかがいた。

伸彦は慌てて愁斗たちに駆け寄った。

意識を失っている海男を抱き支えている愁斗の顔には苦痛の色が浮かんでいる。よく見ると、愁斗の腕に深く抉ったような傷があり、まるでそれはヤスリで削ったような荒い傷だった。

「大丈夫か？」

伸彦が聞くと、愁斗は軽く頷いた。

「大丈夫です。それよりも彼のことをお願いします」

愁斗は海男を伸彦に預け、洞穴の行き止まりを眺めて聞いた。

「そこに潜ると海に繋がっていますか？」

「そういう噂もあるが、本当かどうかはわかんねえ。まさか潜る気かっ!？」

「残念ながら、僕は泳ぐことができません」

泳げるのならなにかの跡を追う気だったのだろうか。

「まだまだ僕のレベルじゃ追えない……」

悔しそうに呟く愁斗の横顔がそこにはあった。それを見た伸彦の心中に不安が過ぎる。海男と似た雰囲気を持つ少年。やはり二人は同じ存在なのだと思彦は確信してしまったのだ。

家に帰ってきた伸彦たちは海男をすぐ横の寝室に寝かせ、愁斗も海男の服を借りて濡れた服を着替えた。

それからだいぶ時間が過ぎた。

その間、愁斗は伸彦になにも聞こうとしなかった。不可解な事件に巻き込まれたというのに、伸彦になにも尋ねようとしな  
いのだ。

伸彦も聞かれても答える気がなかった。答えられる勇気が  
なかった。しかし、愁斗がなにも尋ねないために、伸彦は尋ね  
てしまったのだ。

「どうしてなにも聞かない？」

「あなたに話す気がないのならば、僕は聞きません。関わるな  
というのなら、もう関わりません。忘れるというのなら忘れま  
す」

「いや話す。おまえにだったら話していいような気がするん  
だ」

「なぜ？」

聞き返す表情はいつものそれとは違い、年相応の顔つきをし  
ていた。

その顔を見た伸彦の方から力が急速に抜けた。

「よかった。おまえは俺達に近いんだな」

伸彦の言葉を聞いた愁斗は急に小難しい顔をして押し黙ってしまった。

慌てた伸彦が取り直そうとする。

「悪かった、そんな気で言っただんじやないんだ」

「やはりあなたにはわかりませんが、僕や海男君が少し人間とは違う存在だということが？」

今度は伸彦が押し黙る番だった。

やはり愁斗は海男が普通の人間とは違うことに気づいているのだ普通の人間と違う。そんなことは海男を知る村人たちも知ってる。けれど村人達は変わり者程度にしか海男を見ていない。愁斗は海男の奥に潜んでいるモノを感じ取っているのだ。

一〇年ほど前まで、伸彦は海の男として漁船の船長をしていた。村では勇敢で逞しい海の男と言われ、誰からも尊敬される存在だった。そんな伸彦の息子が海男だ。

細身で病弱な顔色をした海男が伸彦の息子だと、誰もが信じていなかった。きっと母親が別の男と寝て作った子供だという悪い噂まであった。そんな悪女だから、子供と伸彦を置いて逃げたんだと、そんな噂が広がったこともあった。

噂話は全部、伸彦の耳に届いている。直接に聞かなくても、小さな漁村では嫌でも耳に入ってしまう。

「とにかく俺の話聞いてくれ」

伸彦は愁斗に重い口を開いた。愁斗はなにも反応しなかった

が、伸彦はそれを承諾したと受け取り話をはじめた。

「一〇年以上前、俺は漁師をやっていた。そうだな、今日みたいな嵐の日だったんだ。」

その日の天候は小雨。普段ならば海などには絶対に出ない。浅瀬は波が低くても、小雨とはいえ沖に出ると波は高く、海は荒れている。それに風も強く、漁師の勘が嵐を予感していた。

それにも関わらず、伸彦はその日、海に出ってしまったのだ。今思えばなにかに操られていたようにも思える。

身寄りのない伸彦を止めるものは居らず、仲間の漁師達も伸彦が海に出たことをあとになって気づいた。

沖はやはり荒れていた。

曇天色をした海。

波が普段よりも高く、船が大きく揺られた。

唄が聴こえた。

このときやっと伸彦は自分のしている過ちに気づいたのだ。

急いで船を引き返そうとしたがもう遅かった。

雷鳴が轟き、天から大粒の雨が降ってきた。

波が荒れ狂い、大きく揺れる船の上で、伸彦は必死になって

帆柱に抱きついた。

聴いてはいけない唄。

海に棲む美しい魔物の伝説。

魔物の唄は嵐を呼び、船を沈める

どんなに泳ぎの上手い者でも、嵐の海に飛び込めば命の保障などない。荒波に揉まれ海の藻屑と化す。遺体すら発見されず

に海の底で眠ることになるだろう。

嵐の中だというのに澄んだ女性の歌声が耳に届く。いや、耳で聞いているのではない。脳が直接 精神に直接響いている。船が大きく傾き、波の上で立ち上がった。そこに大波が襲い被さり、船を丸呑みしてしまったのだ。小さな漁船などひとたまりもない。

荒れる海の中へ放り込まれた伸彦は必死にもがいた。もがけばもがくほど、海深く身体が沈んでいく。それでもなにもしないわけにもいられず、海面を目指そうとしたが、片足が思うように動かない。

見ると脚からは血が流れ、刺すような痛み気づいた。甲板から投げ出されたとき、なにかで脚を切ってしまったようだ。

痛みなど気にしている場合ではなく、伸彦は必死に生きようとした。しかし、駄目だった。どんどん海面が遠ざかっていくのがわかった。

そして、伸彦は生きることがあきらめた。

全身の力を抜き、意識が深い海の中に沈んでいく。

唄が聴こえた。

女性の美しい歌声。そこにはなんの恐怖もない。慈しみに溢れた唄だった。

天に召されるにはちょうどいいと伸彦は思い、そのまま意識が途切れた。

それからのことはよくわからないが、伸彦が目覚ますとベッドの上に寝かされていたのだ。

どこだかはすぐにわかった。村の小さな診療所だ。

しかし、どうやって自分は助かった？

浜からは距離があったはずだ。万が一、打ち上げられたとしても屍体となってだろう。それなのに自分は生きている。

脚を見ると大きな古傷が目に入った。動かしてみようとしたが、思うように動いてくれない。あときの怪我に間違いないが、痛みはもうないようだ。

「俺はどうしたんだ……」

永い眠りにでもついていたのだろうか。

生死を彷徨いながら、あの事故から長い時間が経過してしまった。そう伸彦は考えたのだ。

仕切りになっていた白いカーテンをめくり、白衣を来た老人が顔を見せた。

「よかった一生目を覚まさんかと思ったぞ」

それは見覚えのある顔だった。診療所の医師だ。もとより老人であったが、記憶と老けた印象はない。

「三日も眠り続けておったからな」

「なんだって？」

伸彦は思わず聞き返してしまった。思っていたよりも短い。たつた三日で脚の傷が塞がったというのか？

言い知れない恐怖が伸彦を襲った。自分になにがあったのかわからない。海で自分になにがあった？

やはりあの唄と関係があるのだろうか。そうとしか考えられない。

海で唄を聴いたことを伸彦は誰にも言うまいと誓った。海でなにがあったのかと訊かれても、ただ嵐に巻きこまれたとだけ話をした。

それからというものの、伸彦は海に出なくなつた。誰もそれを悪く言うものはいなかつた。海に死にかけたとなれば、あの勇敢な伸彦と言えど海が怖くなつたのだらうと、同情すらする者もいた。

しかし、伸彦は海が怖くなつたのではない。あの唄が怖いのだ。決して恐ろしい歌声ではなかつたが、あの唄には恐ろしい魔力があると伸彦は確信していた。

しばらくはなにもなかつた。

平穩な日々が続き、海での出来事を忘れようと伸彦も努めていた。そんなとき、この小さな漁村に流れ者がやって来たのだ。流れ者は女性だつた。

女性は誰の目にも美しく垢抜けていた。しかし、都会からやつて来たようにも見えない。自然が作り出したような美しさを兼ね備えていたのだ。

こんな女性がひとりでこんな辺鄙な場所にどうしてと、誰もがいひしたが、こんな場所に来るには深い事情があるのだらうと、深く詮索する者は誰もいなかった。

民宿すらないこの場所で、女性の泊まる場所などなく、村人達も女性と少し距離を置いていた。よそ者と関わりになることを避けていたのだ。

そんな中、ただひとりだけ女性に優しく接する者がいた。そ



れが伸彦だったのだ。

男ひとりの家だと言ったが、女性は疑うことなく喜んで伸彦の家に泊めてもらうことになり、いつの間にか、長く逗留することになっていた。

女性の名は瑠璃るりとだけ名乗り、それ以外のことは話そうとせず、伸彦も過去にはこだわらなかつた。

いつしか村人達も瑠璃に心を開くようになり、まるで昔からの顔なじみのように接してくれた。その要因は伸彦と瑠璃が愛を育んだことも大きいかもしれない。

瑠璃は伸彦との間に男の子をもうけた。それが海男だ。

どんな母親よりも瑠璃はしつかりしていると伸彦は思っていた。家事をそつなくこなし、性格も良く、おだらかな人柄をしていた。

しかし、伸彦にはひとつだけ気になることあったのだ。

瑠璃はたまに鼻歌を口ずさむことがあり、その唄を口ずさむと必ずといつていいほど雨が降るのだ。ただ、そのときはその唄のこと気にも止めずにいた。忘れていたのだ。

あるときは、出かけてきますと瑠璃が言い残した後に、嵐が来たこともあった。伸彦は心配したが、嵐が治まった頃に瑠璃は何事もなかったように帰ってきた。

そんなことが続き、忘れていた記憶を伸彦が取り戻すのは時間の問題だった。

瑠璃の鼻歌が、嵐の海で聴いたあの唄だと気づいたときには、ぞつとした。それでも伸彦は瑠璃になにも言わずにいたのは、

それほどまでに瑠璃に惚れ込んでいたからだ。

それでも伸彦の瑠璃を見る目は自然と変わり、態度には出なくとも瑠璃を恐れていたことは間違いない。それは瑠璃にも伝わってしまったに違いないと、今になって伸彦は思う。

ちょうど海男が五つになったころ、事件は起きたのだ。

すでにそのころには、大きくなった海男を見て、周りが変な反応をするようになっていた。伸彦と海男を見比べて、本当に血が繋がっているのかと疑う者が現れたのだ。

噂が大きくなりはじめ、瑠璃がある日、突然に姿を消したのだ。

伸彦には出かけて来ますとだけ言い残し。

その日も小さな漁村を嵐が襲った。

波は激しく荒れ狂い、港に停泊していた船を何隻も呑み込み、碇を沈めてあった船までも沖へ流されしまった。

そんな嵐の中、伸彦は唄を聴いたのだ。

女性の美しい歌声だった。それは悲しい歌声だった。泣いていような歌声だった。

「それからはなにもない」

と、伸彦は話を締めた。

長い話を終え、伸彦はどつと肩を降ろした。

外の嵐は徐々に静まりを見せている。

風は弱まり、雨音も微かに聴こえるまでになっていた。

愁斗はなにも口を挟まず伸彦の話を聴いていたが、疑問はある。

では、今になってなぜ？

伸彦は深く息を吐いた。

「なにもなかったんだ、最近まではな」

「なにがあつたんですか？」

「海男が唄うようになったんだ」

嵐を呼ぶ潮騒の唄。

翌日の朝、伸彦が仕事に出たのを見計らって愁斗は海岸に向かった。

伸彦も愁斗がここに来ることは予想していたに違いないが、あえてなにも言わなかったのは、愁斗が自分たちと住む世界が違うことを知っているからだ。

海辺の洞穴に愁斗は来ていた。

昨日よりも水かさが低く、洞穴の中に浸る海水は膝より下に位置する。昨日は膝より少し高い位置まで水かさがあつた。

差し込む光の加減も昨日よりも明るく、入り口の広い洞穴に光が流れ込んできている。深くはない洞穴なので、奥まで進んでも視界が闇に閉ざされることはないが、それでも薄暗く心地の良い場所ではない。

行き止まり付近まで来ると、水かさは愁斗の膝よりも高い位置まで来ていた。

愁斗は妖糸を垂らし、水の奥のようすを探ろうとした。

すぐ手前の水の奥は愁斗が立っている場所よりも水深が深い。

「駄目だ……海の中じゃ上手く操れない」

愁斗の指先が微かな手ごたえを感じた。海の底で魚が泳いでいる。すぐさま愁斗の妖糸は魚を捕らえた。

傀儡師くくしである愁斗が得意とする傀儡かいらい。並みの傀儡師であれば、生あるものを操れまい。しかし、愁斗の手にかければ魚などいとも容易く操れる。

戦闘に特化した傀儡師は、時に傀儡士とも言われ、自らの肉体を使う戦いよりも、他を操る戦いを得意とする。

魚が視るビジョンが妖糸を伝わり愁斗の脳裏に流れ込む。

操る魚は海水の通り道になっている穴を泳ぎ、やがて光度が高くなり穴を抜けた。

海面が青く輝き、幻想的に揺らめいている。それは愁斗にとってはじめて観る景色だった。

なぜか愁斗は母を思い出した。

おぼろげな母の記憶。

記憶の欠片を手繰り寄せる愁斗の目を覚ましたのは、魚から送られてくるビジョンに映し出された人影だった。

海の中に人？

泳げない愁斗には海女などという発想はなく、すぐにその人影を人間外モノと結びつけた。

人影は女性だったような気がする。

すぐにその影を追おうと妖糸を操ったのだが、魚からのビジョンが急に途切れ、妖糸を操る指先の感覚も魚を捕らえられなかった。

「食われてしまった」

大きな魚が愁斗の操っていた魚を呑み込んでしまったのだ。

この付近の海になにかがいることは間違いないだろう。あの唄と関係あることも間違いない。詳しいところまではわからないが、愁斗はその姿も見ていた。

今ではない。昨日、この場所で見ただ。

海男を追ってこの場所に来た愁斗は、ここであるモノを見た。鱗に覆われた人間のような生物を見たのだ。

「…… なにか違うな」

愁斗は昨日の出来事を思い出しながら、小さく呟いた。

なにが違うのだろうか？

この場所が海と繋がっていることはわかった。

愁斗は洞穴を出ようと来た道を引き返しはじめた。出口はすぐそこだ。

洞穴を出る寸前、愁斗は背後に殺気を感じて振り返った。

それは戦闘訓練で培った賜物に違いない。愁斗は飛んできた三叉の槍を瞬時に躲し、体勢を立て直しながら、敵がなんであるかを見定めた。

顔の皮膚まで鱗で覆われた人型の生物。毛は一本もなく、唇は魚のようで、眼もギョツと飛び出している。ひと言で表せば魚人と称するのはもっとも適切だろう。

その魚人が二匹。洞穴の奥で愁斗を見ている。

愁斗は異形のモノを臆することなく尋ねた。

「昨日の奴はどうした？」

魚人たちは顔を見合わせ、意味不明な言語を交わしている。

言語によるコミュニケーションは難しいかもしれない。

一方の魚人は槍をまだ手に持っている。

傀儡を持たない愁斗は苦戦を強いられることは必定。

まだ傀儡師として一人前ではない愁斗。生身のままで妖系で敵を切ることもできない。施設にしたころに使っていた傀儡は逃走のときに破壊されてしまった。

槍を構えた魚人が愁斗に襲いかかった。

愁斗の指から輝線が放たれた。

闇の傀儡師に伝わる秘伝。

妖系が空間に一筋の傷をつくった。

洞穴に唸り声が木霊した。

闇色の裂け目から悲鳴が聴こえる。泣き声が聴こえる。呻き声が聴こえる。どれも苦痛に満ちている。

紫苑の腕が前に伸びた。

「行け！」

闇 が触手のように伸び、槍を持った魚人に襲い掛かる。

槍をがむしゃらに振り回し魚人は抵抗するが、闇 は魚人の腕を掴み取り、無数に伸びた 闇 が近くにいた魚人の身体をも拘束した。

奇声が木霊する。

魚人たちは成す術ない。

すでに魚人の身体は 闇 に吞まれ、裂け目に還ろうとしていた。

が、闇 は魚人を呑み込んだだけでは治まらず、愁斗に襲

い掛かってきたのだ。

愁斗の腕が 闇 に掴まれた。

「大人しく還れ！」

決して 闇 に恐怖してはならない。

まだ人を斬ることはできなくとも、 闇 は斬る。

煌きが奔り、叫び声があがった。

愁斗の腕を掴んでいた 闇 が放れ、急速に空間の裂け目に引き返していく。

シュウシュウと蛇が鳴くように裂け目は塞がり、愁斗は額の汗を拭った。

動悸が激しい。

もう今日は 闇 を使うことはできないだろう。

早く傀儡を手に入れなければ、次に襲われたらあとがない。

だが、敵の影はすぐそこまで迫っていた。

洞穴の奥で水面が水しぶきをあげた。

「昨日の妖物だな」

眩く愁斗の視線に映る魚人の姿。七色に輝く鱗が先ほどの魚人とは格の違いを示している。そして、鱗に包まれたその肉体は、艶やかな曲線と豊富な胸を兼ね備えていたのだ。

浅瀬に上がってくる魚人の身体から水が滴り落ちる。

「げに恐ろしきお子じゃ」

魚人の声は深海のように深く、眼は愁斗を捕らえて放さない。

愁斗の瞳は魚人の首元を見つめていた。

「傷の治りが早いな」

「あれほどの痛みを妾に与えたのはうぬが初めてじゃ」

「あの糸で切られた傷は治りが悪い」

昨日、この場所で愁斗は目の前の魚人に妖糸を放った。実際に妖糸を繰り出したのは、愁斗に操られた海男だ。

海男の意識が朦朧としていたために、どうにか操ることができたが、生のある人間を操るのは並大抵のことではない。そのためにくじったのだ。妖糸は魚人の首を取られたが、落とすには至らなかった。

使える傀儡はない。

敵に不利だと悟られるわけにはいかない。

鉄の表情で愁斗は指先を軽く動かしストレッチをした。

闇 を使うか、それとも別の方法で戦うか。

「……召喚の法」

それはまだ完成に至っていない技。

愁斗の糸が宙に幾何学模様を描いた。

「傀儡師の召喚を観るがいい。そして、恐怖しろ！」

妖糸で描かれた幾何学模様は魔方陣だった。

脛まで浸る海水が一瞬、波立つことを止めた。

魚人の顔に不快の色が浮かぶ。

奇怪な魔方陣のその先で、それが 呻き声をあげた。

それ の呻き声は空気を振動させ、海水は水しぶきを上げ、洞穴の中で激しく木霊した。

海水は それ の唸り声に共鳴し、集合した水の塊が巨大な水魔を作りあがる刹那、水風船が割れるように水魔が弾け飛ん



だ。

召喚はあと一步のところまで失敗したのだ。

それ の叫びが木霊する。

巨大な毛の生えた触手が空間から出現したのを愁斗と魚人は見た。

魚人はすでに愁斗など眼に入っていない。

「神か！」

そこにいるモノがたとえ神だったとしても、慈悲深い神ではないだろう。そこにいるのは荒ぶる神。人智を超えた存在がそこにいた。

見えているだけで五メートル以上ある触手が、支えを失い水の吹き出るホースのように暴れまわる。

洞穴の壁がもろくも抉られ、天井の岩が崩落した。

「うぬの命は必ずもろう。待つておれ！」

魚人は水の中に潜り姿を消してしまった。洞穴の底の抜け道を通って海に逃げ出したに違いない。

愁斗もすぐに洞穴の奥に駆け出した。

膝まで浸かる海水のせいで思うように走れない。

地響きが天井からした。

落ちてくる岩の破片。

轟々と洞穴が唸り声をあげ、巨大な岩が天井から崩落してきたではないか！

一瞬、上を見上げた愁斗はすぐに洞穴から飛び出した。

崩落した岩が連鎖を生んで洞穴の入り口を塞ぎ、上がった飛

沫で辺りは霧に包まれた。

果たして愁斗は？

愁斗は浅瀬の上に立っていた。だが、その片腕はだらしなく下に向けられ、赤い筋が腕から伝って指先から海面に滴り落ちていた。

海水に落ちた血が儂く消える。

崩落した岩の破片が愁斗に重症を負わせた。しかも、大事な利き腕にだ。敵の追っ手が来る前に逃げなくてはならなかった。岩場まで逃げついた愁斗は、そこから浜辺を目指し、道路を  
目指そうとした。

だが、背後で気配がしたのだ。

振り向いた愁斗の眼に入ったものは、陽光を浴びて輝く鱗だった。

「君は僕の敵か？」

愁斗は鱗を持つ者に尋ねた。

「恐れないでください、私は人間の敵ではありません」

殺気はないと愁斗は感じていたが、相手が鱗を持つ者である以上、現状では信用できない。

波打ち際から砂浜に蛇のように這って来たのは人魚というべき存在だった魚の下半身を持ち、上半身は女性の裸体を包み隠さずさらしていた。

その高貴な顔立ちに埋め込まれた瞳の色は宝玉のように美しく、瑠璃色に輝いていた。

似ている。愁斗は瞬時に思った。

「あなたが海男の母か？」

しばらくの沈黙の後、人魚は深く頷いた。

「はい、やはり海男をご存知だったのですね」

「やはり？」

「貴方様が真珠姫しんじゆひめに襲われているのを見て、海男のことと関係があるのではないかと思っただのです」

「事情の掴めないまま僕は事件に大きく巻き込まれた。できれば、あなたから詳しい事情を聞かせてもらいたい」

「よろしいでしょう。その前に、貴方様の傷を治して差し上げます。こちらに来てください」

傷とは重傷を負った愁斗の腕のことだった。

人魚は自らも愁斗に近づくが、足のない身体で砂浜を辛そうに動いている。それを見ながらも愁斗は人魚に近づこうとしなかった。

これは罨か？

愁斗は警戒していたのだ。

しかし、人魚の優しい顔つきを見ると、そこに亡き母の面影を投影させ、警戒心が次第に和らいでいった。

「無理して浜に来なくてもいい」

愁斗は足早に人魚に近づいた。

難しい顔をして近づいてくる愁斗に人魚はにっこりと微笑みかけた。

「なにも心配はいりません。お腕を見せてくださいますか？」

愁斗は思うように動かない腕を、身体を横にして人魚に向けた。

「この程度なら後遺症も残らず治るでしょう」

そう言つて人魚は自らの腕に鋭く尖つた犬歯を突き立て、肉を切り裂くように強くかじつたのだった。

なにをするのかと思うと、人魚は腕から口を離し、腕から滴る血を愁斗の傷口に擦り付けた。すると、どうだろう。愁斗の腕の傷は早送りのように傷口が塞がり、細い傷痕を残すまでに治つてしまったのだ。

人魚伝説はあながち嘘ではないらしい。

その肉を食つたものは不老長寿、もしくは不死になるという伝説があり、八百比丘尼やおびくにという尼僧は、一七の時に人魚の肉を食し不老長寿となり、八〇歳以上生きたとされている。

傷の塞がった腕を軽く動かすと、多少の違和感が残つてはいるが、妖系を操れる前に回復していた。ストレッチを繰り返せば、すぐに元通りの動きができるようになりそうだ。

愁斗の傷を治した人魚は愁斗を別の場所へと誘つた。

「もう少し人の来ない場所に行きましょう」

「そうですね」

人が少ない漁村とはいえ、いつどこで人が現れるかわからない。人魚が見られたら大騒ぎになってしまうだろう。

二人はひと目を忍んで、岩壁を背にできる浅瀬の岩場に移動した。

「私の名は瑠璃と申します」

「あなたの名前は聞いています。僕の名前は愁斗　秋葉愁斗。伸彦さんの家でお世話になり、伸彦さんとあなたの馴れ初め、あなたが歌うと天候が崩れるという話を聞きました」

「他にはなにかお聞きになりましたか？」

「昨日の嵐の中で歌が聴こえました。それに導かれるように出て行った海男を追って行ったところで真珠姫に会いました。海男を助けることはできませんでしたが、真珠姫は逃がしました。てっきり僕はあなたが海男を呼んでいたのだと思っていました」

そして、ここ最近、海男が唄を口ずさむようになったと伸彦は話した。唄を歌っている自覚は本人にはなく、同じ唄を歌おうとしても意識しては無理だったらしい。そのメロディーというのが、瑠璃が唄っていた鼻歌によく似ていたのだという。

瑠璃は申し訳なさそうな顔で愁斗の眼を見つめた。

「無関係の貴方様を巻き込んでしまいましたね」

「後戻りはできません。僕はすでに真珠姫に命を狙われまして」

「そうですね、全てお話しいたしますのでお聞きください」

海男が五つのとき、瑠璃は海に帰った。理由は瑠璃の一族と真珠姫の一族間で問題が起きたからだ。

瑠璃が陸に上がった理由も一族間の問題であった。

瑠璃族に伝わる秘法をめぐり、真珠族が争いを起こしたのが全ての火種。秘法の力を使い、人間を支配しようと真珠族はたくらんだ。それを知った瑠璃族の姫　瑠璃姫は秘法を持って陸に上がったのだ。

陸に上がった瑠璃であったが、真珠族はそのことを知らぬまま一族間の争いは激化し、瑠璃族は一方的に押されていた。そのことを知った瑠璃は瑠璃族を助けるために海に帰ったのだ。

「秘法はどこに？」

尋ねる愁斗に瑠璃は首を横に振った。

「それはお教えできません」

「では秘法とはなんですか？」

「龍封玉　古の時代、私達のご先祖様が海を荒らす海龍を封じ込めた玉です」

「なるほど……」

その玉に封じ込めた龍を復活させるのが、真珠姫たちのおおむねの目的だろう。

愁斗は海龍の復活を妨げることには協力しようと考えたが、その玉の場所は教えられていない。となると、真珠姫を討つのがいいだろう。真珠姫たちはまた愁斗を狙って来る。愁斗にとつて真珠姫はすでに排除すべき存在なのだ。

龍封玉の存在はわかったが、それとは別の疑問が残った。

「なぜ真珠姫は海男を呼んだんですか？」

「おそらく海男が私の子と知って、人質に取る気だったのでないでしょうか」

「なるほど」

「そのことでひとつお願いがあります」

「なんですか？」

「魚人種は人魚種と違い、陸上でも活動することが可能です。」

昨日、唄を使って海男を呼び寄せたのは、海男の姿や場所がわからなかったためにおびき寄せる方法を探ったのだと思います。ですけれど、今になっては陸地で海男の場所をつき止めるのも時間の問題です」

「海男を守ればいいんですね？」

「はい、よろしくお願いいたします」

瑠璃は深く頭こぶかを垂れた。

そして、瑠璃が頭を上げたときには、すでに愁斗の姿は遠く向こうを歩いていったのだった。

伸彦の家に戻ってくると、海男はいつものように静かに本を読んでいた。

海男は部屋に入ってきた愁斗を一瞥して、鼻を利かせ小声で呟く。

「潮騒の香りがする」

海の近くの村だ。そこら中で潮騒の香りがしても不思議ではない。しかし、海男は続けてこう言った。

「懐かしい香りだ」

「わかるか？」

「んだ、母ちゃんの香りだ」

愁斗は思う。自分は母の香りを覚えているだろうか。思い出されるのは血の香り。

母親の死が強烈なイメージとして、良い思い出を覆い隠してしまう。

炎の熱さと、血の香りと、母の残した最期の笑顔。全ては過去。

母との思い出は、もう創ることはできない。

愁斗は母のイメージを消し、海男に次げることにした。

「今、君の母に会って、君を守るように頼まれた」

説明不足の会話だったが、それで海男は理解して深く頷いた。人間ではない種族の血が混じっている子だ。直感的に物事を理解してしまふのかもしれない。

愁斗は畳の上の静かに座り、海男は本を読み続けた。

静かに時間だけが過ぎた。

時計の針を見た。

もうすぐ正午になる。

漁師を辞めた伸彦は村の小さな役場に勤めているらしい。

まだ二人っきりの時間は続きそうだ。

本を読んでいる海男は静かな時間を苦としない。愁斗もまた静かな時間を苦としていなかった。

数時間前の真珠姫との戦いで、愁斗は召喚に失敗した。

異形のモノを自在に操ること　それが闇傀儡師の真髄。

まだまだ自分が至らないことを深く反省する。

召喚もできなければ、闇　の支配も完璧ではなく、歯向かう　闇　に吞まれかけた。

この世の物体を切る切糸も生身のままでは使えない。これでは半人前以下だ。せめて新しい傀儡を手に入れなければならぬ。



傀儡は傀儡師の右腕として動き、傀儡を使用することで技の能力も高められる。生身のままでは切れぬモノも、傀儡を操れば切れる。

師である父がいれば……。

なにかの音に気づき、愁斗はふと我に返って辺りを見回した。雨の音だ。

大きな雨粒がトタン板を叩いている。

唄が聞こえた。

海男が急に立ち上がり、愁斗はやはりと思った。

「君を行かせるわけにはいかない。少し痛いけれど我慢してもらおうよ」

愁斗の手が妖系を放った。

身体を簀巻きにして絡みついた糸で海男は身動きを封じられた。た。

絶対に外に行かせてはならない。唄を使ってきたということ、まだ海男の居場所が定かではない証拠だ。

愁斗は残る手からも妖系を放ち、両手の糸で海男を拘束した。指先に力を込める愁斗の表情に焦りが走る。

海男は人間ではない。

愁斗の指先に妖系が切れたことが伝わる。

「これ以上は無理か」

次の妖系を放つてもすぐに切られることはわかっている。自分の力量は心得ている。ならば、今は海男を生かせるしかない。家の外に出る海男を愁斗はすぐに追った。

海岸沿いの道路をゆらりゆらりと歩く海男の先に、灰色の影が立っていた 魚人だ。

魚人が奇声を上げると、どこからか魚人たちが集まってきた。その数、三匹。真珠姫の姿はない。

唄が聴こえた。

道路を降りた砂浜のほうだ。

真珠姫がいた。

波打ち際から唄を響かせながら砂浜を歩いてくる。それに誘われ海男も砂浜に向かつて歩き出す。

無駄な抵抗と知りながら、愁斗の妖系が海男の身体に巻きついた。先ほどよりも多く巻きつけたが、切られるものは時間の問題。それにすぐそこまで魚人たちが迫っている。愁斗は海男だけに構ってはいられなかった。

愁斗の手から離れた妖系は、その力を極端に失い強度も落ちる。そのため、海男を簀巻きにしても、その系の先は愁斗が握っていないてはならないのだ。

迫る魚人。そこからは三匹の魚人。前方には砂浜を歩いてくる真珠姫。

絶体絶命か!?

唄が聴こえた。

優しく温かい歌声。

海男の動きがピタリと止まった。

いったいなにが?

愁斗は魚人たちが来る道路とは逆方向を振り返った。

美しい裸体の美女がそこには立っていた。

自らの足で唄いながら歩み寄ってくるのは、間違ひなく瑠璃の姿だった。

瑠璃は海男が眠るように眼を閉じて、道路に倒れるのを見取り、唄うことをやめた。

「変化の秘薬を手に入れるのに時間がかかりましたが、やっと陸に上がることができました。海男の傍に付いていくのださり、ありがとうございました」

深く頭を垂れる瑠璃には人間の脚がたしかに生えていたのだ。ハンデがひとつ減り、愁斗の武器がひとつ増えた。

輝線が宙を翔る。

迫ってくる三匹の魚人の首が続けざまに宙に舞う。

首から天に向かって血を吹き出しながら魚人は息絶え倒れた。

愁斗は静かに嗤った。その指先から放たれた妖系は、海男の躰が操り妖系を放っていたのだ。

仲間の魚人がやられたのを見て、真珠姫が奇声をあげて襲い掛かってきた。

「小僧の分際で、誇り高い真珠族をまたも許せぬぞ！」

愁斗は妖系をすぐさま放とうとしたが、それを妨害するよう瑠璃が背を向けて立っていた。

「この争いは私たちのものです。真珠姫との戦いは私が……」  
瑠璃の手には矛が構えられていた。対する真珠姫は三つ又の槍を持っている。

手出しは無用。

愁斗は戦いを見守ることにした。

「雨脚はこの場所で地団駄を踏み、過ぎ去る様子を見せなかつた。」

浜辺に打ち付ける波は大きくうねり、激しい潮騒を響かせる。瑠璃と真珠姫の戦いは互いに一步も引かない状況だった。

渾身の力で振るつた瑠璃の矛を三つ又の槍が受ける。齒を食いしばつた真珠姫の顔が醜く歪む。

愁斗が見る限り、瑠璃の方が少し上手に見える。しかし、その差は微々たるもので、すぐに覆りそうなものだった。

どちらが勝つかはわからない。

瑠璃が負ければ、次に真珠姫と戦うのは愁斗だ。

果たして今の自分に真珠姫と戦うだけの力量はあるか。

瑠璃の血によつて腕の傷を治されたとき、心身も浄化された。

先ほどまで安静にしていたことも相俟つて、今なら闇が使えそうだった。ならば闇で真珠姫と戦うか？

問題は闇を真珠姫の精神のどちらが強いからだ。

真珠姫が大きく振るつた槍が躲され、隙を衝いて瑠璃の矛が真珠姫の胸を突き刺した。

「惜しいな瑠璃姫」

矛を抜きながら真珠姫が後ろに飛んだ。胸から流れ出る血はすぐに止まり、傷痕もなかつたように塞がっていく。

「胸の肉がなければ心玉しんぎよくを突かれて死んでおつた」

艶やかに笑う真珠姫の顔に死を手前で免れた恐怖はない。命が助かったから笑っているのではなく、死など最初から恐れて

いないという風だ。

闇 では勝てないかもしれない。

脅威の自然治癒能力を二人の戦いは決着まで時間がかかりそうだった。

しかし、真珠姫は奥の手を出してきたのだ。

「醜うての、この手は使いたくなかったのじゃが……」

真珠姫を包む七色の鱗が毛のように逆立ち、肉体が波打つように膨れ上がり、しなやかな曲線を誇る肉体が、筋骨隆々とした肉体へと変貌を遂げた。

角ばったエラから湯気を出し、金色の眼で真珠姫はギロリと瑠璃を睨みつけた。その表情に変身前の艶やかな色香はない。

「おぞましくて身震いするか、のお瑠璃よ？」

「その姿は貴女の心を映しているのですね」

「キエーツ！ 戯けがツ！！」

奇声を発した真珠姫はがむしゃらに槍を振るつた。

辛うじて瑠璃は槍を矛で受けるが、力押しされて後退りをしてしまっている。

愁斗はついでに妖糸を震えるように指先を動かしていた。

果たして今の真珠姫に二人掛かりでも勝てるかどうかかわからない。

それでも愁斗は手を出さなかった。

瑠璃の矛が真珠姫の胸を捉えた。だが、真珠姫の動きは瑠璃を凌駕していたのだ。

矛は真珠姫の肩に突き刺さり身動きを封じられた。

「ぎゃッ！」

短い悲鳴と共に瑠璃の腕が地に落ちた。

肘からが消失した腕から鮮血が吹き出し、瑠璃は出血を手で押さえながら後ろに引いた。驚異的な治癒力も、腕を瞬時に生やすことはできないらしい。

落ちた腕は干物のように干からびて縮んでしまった。

肩に矛を突き刺しながら真珠姫は下卑た笑いを浮かべた。

「痛烈な痛みであつただろう。次は貴様の矛で心玉を砕いてやるぞよ」

肩に突き刺さる矛の柄に真珠姫が手をかけた刹那、泥水が沸騰するような音が木霊した。

「傀儡師の召喚に恐怖するがいい！」

背筋を凍らす強大な気配。

宙に描かれた紋様を真珠姫は驚愕の眼で見た。

それ の叫びが闇色の裂け目を狂わせ、この世に闇色の羽虫を解き放った。

群を成す大量の羽虫が奇怪な羽音を立てながら、真珠姫の肩の傷目掛けて飛んだ。

悲鳴とも叫びともつかない声をあげて、真珠姫は闇色の蟲に包まれながら地面を転がりまわった。

鋼の腫で愁斗は諭すように呟いた。

「その蟲は闇蟲むしの一種。異形のモノの血が好きでね、行き過ぎて肉まで喰らってしまう」

闇蟲に全身を包まれ、叫びをも闇の中に呑みこまれて聴こえ

ない。

骨まで溶かされ喰われれば、治癒力などないに等しい。

闇蟲の群から手首が放り出されて地面に落ちた。

もう決して真珠姫は助からまい。

真珠姫を包んでいた闇蟲の群が波立ち、その矛先を腕から血を流す瑠璃に向けようとしていた。しかし、それを愁斗が許すはずがない。

「還れ！」

愁斗が命じると、闇色の裂け目から 闇 が飛び出し、叫び声をあげながら闇蟲の群を全て呑み込み、跡形も残さず裂け目へと還っていった。

召喚は全て終わり、完成した。

脅威は全て去った。にも関わらず愁斗は殺気を感じ振り返った。

地面に落ちていた真珠姫の手首が宙に浮き、道路に横たわっていた海男の心臓に突き刺さった。

「海男！」

瑠璃の悲痛な叫びが木霊する。

すぐさま瑠璃は海男の身体を片腕で抱きかかえ膝に乗せ、突き刺さった真珠姫の手首を抜き取った。

「海男、海男！」

心臓が握りつぶされている。これでは瑠璃の血で癒やすことはできない。それでも瑠璃は腕から流れる血を海男の胸の傷に擦り付けた。

「海男！」

閉じていた海男の臉が痙攣したように微かに動いた。

「生き返って！」

母の願いが通じたのか、海男の眼まなこが静かに開かれた。

「……母ちゃ……」

海男の首から力が抜け、海男は静かな永久の眠りについた。

瑠璃は声すら出なかった。

ただ一筋の涙が頬を伝い、それは小さな宝石となって地面に落ちた。

一部始終を見ていた愁斗の表情は読むことができなかった。鋼の表情を崩さぬ、無情の表情とも見て取れた。

海男の身体を静かに横に寝かし、瑠璃は零れた宝石を拾い上げ愁斗に差し出した。

「これを伸彦様にどうぞ渡してください。海男が死んだ今、この子の身体の中で眠っていた龍封玉は力を失いました。私は海男と一緒に海に帰ります」

瑠璃色の宝石が広げたてのひらに乗せられ、愁斗はそれを力いっぱい握り締め、海へ帰る親子の後姿を見送った。

どのくらい愁斗はそこに立っていたのか時間は定かではないが、強く降り続いていた雨は静かに降る涙雨に変わっていた。

「おーい！」

野太い声が愁斗を呼んでいる。

振り向くと伸彦が愁斗に駆け寄ってきていた。



「胸騒ぎがして飛んで帰ってきたんだ」

「そうですか」

愁斗は握り締めていた宝石を伸彦に渡した。

「瑠璃さんがこれをあなたに。海男は瑠璃さんと一緒に海に帰りました」

「……そうか」

涙でできた宝石を受け取った伸彦はなにを思ったのか？

しばらく無言だった伸彦が愁斗に背を向けた。

「そうか、海男のやつ俺よりも母ちゃんと一緒に暮らせて幸せ  
だろっよ」

むせび泣く声が荒波の音に吞まれて消えた。

Case6 渦潮の唄

助けて……で頼れ……あなた……だけ……。

不思議な声を聞いたような気がして、愁斗は深夜に目を覚ました。

母を思い出す優しそうな女性の声だった。

しかし、あの声には緊迫した雰囲気も言葉からにじみ出ていた。

あの声の主はいつたい？

ベッドから降りた愁斗はカーテンを開けて窓の外を見た。

町は暗闇に覆われ、空からは小さな雪が舞っている。

季節は一二月の冬。

先日、終業式を終えて、中学は冬季休校に入った。

クリスマスは過ぎ、町は師走の慌ただしさに溢れている。

それでも夜は静かなものだ　魔性以外は。

なにか胸騒ぎを感じて、愁斗はすぐにテレビの電源を入れた。生放送の映像が飛び込んできた。

チャンネルを回しても、回しても、その映像が映し出された。深夜だというのに、どこの局も同じ映像を流していた。

大津波による被害。

地震大国日本はそれに伴い、津波の被害も多い。だからこそ津波には慣れているはずだった。にもかかわらず、今回の大災

害は起きてしまった。

理由は地震など起こらなかったからだ。

自然災害でもなかった。

ニユースのライブ映像は暗黒の中で、包囲ライトに照らされた怪物を捕らえていた。

大航海時代であればこう例えられた　シーサーペント。

それは海に棲む大海蛇、またはドラゴンと称されるものだ。

世界には未確認生物の情報も多く、日本にも水に棲むものといえば池田湖のイツシーなどがあげられる。けれど、あれは未確認であり、その正体を捉えた証拠映像はない。

怪物などという存在は人々の幻想であり、本当に現れるなど想定していない。やはり怪物はどこかゲームや夢物語の住人ではない。

それが全国に生中継されてしまったのだ。

時計の針は深夜二時を回っているが、この時間ならばテレビを見ている視聴者も多いだろう。ネットの住人ならばなおさらだ。

ただし、愁斗に動揺はない。

そのような存在がいることは知っている。現にそれらを使役し、近い場所で触れ合うこともある。

いや、しかし、多くの人々の目に晒される日が来ることは想定外だったかもしれない。

それも現代日本。

突如、テレビから巨大な咆哮が聴こえた。人々が知る得る生

物を遥かに凌駕した咆哮。画面の前でどれだけの人が身を凍りつかせたことか。

そして、謎の生物は荒波を立てながら海に帰っていったのだ。つた。

翌日の新聞やニュースはこぞってその話題を取り上げた。

世界にも今回の騒動は飛び火することとなった。

当然の如く、特集番組が生まれ、肯定派と共に多くの否定派を出した。

例え全国で放送されようと、国営放送で生中継されても、やはりそれはにわか信じがたいことだった。否定派が現れるのは当然である。

宗教団体は世界の終わりを訴え、カルト団体は我らの神が顕現したと叫ぶ。

国会では過去に宇宙人に対する防衛作が答弁されたことがあるが、そのときの中継に国民は猛烈な批判をした。今回の場合はまだなにかわからないが、人智を超えた存在であることは確かだ、国も本腰を入れて問題に取り組みしかなかった。しかし、誰もが手をこまねいているというのが現状だった。

深夜の天津波以降、謎の怪物はその姿を消してしまった。

まるで悪い夢だったかのように、海は静かだった。

愁斗はあれから一睡もしていない。次のアクションがないか、それを待ち構えていたが、結局なにも起こらなかった。

細かく起きたことをクローズアップするなら、翔子しょうこからのメ

ールが届いたくらいものだ。

内容は謎の生物についての驚きについて。そして、不安。

彼女は愁斗と関わることによって、多くの超自然現象に立ち会うことになった。

傀儡師の戦い、召喚される 向こう側の存在、現実ではありえないと思っていたことの数々。それを体感していても、今回の騒動は衝撃的だったらしい。

愁斗は翔子へのメール返信に『わからない』とだけ返した。

まだ愁斗にもなにもわからなかった。

ダイニングキッチンで遅い朝食の用意をしていると、愁斗のケータイに通話の着信があった。

すぐに愁斗は通話に出る。

「もしもし？」

《愁斗くん、ニュース見た？》

通話の相手は姫野亜季菜だった。

「海から現れた怪物に関してですか？」

《そうよあれ、スゴくない？》

「僕には関係ないことですから」

気になる事件であるが、首を突っ込む理由はない。

《えーだって、愁斗くん専門家でしょう？》

「違いますから。あのような存在について、僕は人よりも知識があるかもしれませんが。しかし、それが事件に関わる理由にはなりませんから」

ケンカが強いからと言って、ケンカの強い奴を見ると誰構わ

ずケンカをするわけではない。モンスターハンターというわけでもなく、正義感で事件究明をしたいわけでもなく、愁斗には事件と関わる理由がやはりない。

それでも亜季菜は食い下がった。

《アタシはあんな怪物がいることをずっと前から知っていて、それを周りに口外できずにウズウズしてたのよ。それが怪物というものが公の場で認知された今、大きなビジネス市場が開けたわけよ、わかる愁斗くん？》

「なにを企んでるんですか？」

《生け捕りにしましょう！》

「……………」

少し無言になった愁斗は、なにも告げずに通話を切った。

深いため息と同時に、再び亜季菜から着信があったが、愁斗は構わずケータイの電源を落とした。

テーブルについて朝食を食べようとすると、玄関のチャイムが執拗に鳴らされた。最初は無視をしようと、黙々と朝食を進めていたが、チャイムは鳴り止まずに押すペースが速くなっていた。

ついには玄関を叩く音が聴こえ、近所迷惑を考え愁斗は仕方なく玄関のドアを開けた。

愁斗は無表情で客を出迎えた。

相手は玄関の前にミニスカから覗く長い脚を仁王立ちにして、顔が少し怒ったように眉が吊り上がっている。

「愁斗くん、なんでもっと早く出ないわけ？」

亜季菜だった。

「少し忙しくて手が離せませんでした」

「ケータイの電源も落としたでしょ？」

「電波状況が悪くなっただけですよ。僕の部屋ではよくあることと亜季菜さんも知ってますよね？」

「……まあいいわ。お邪魔するわよ」

ハイヒールを脱ぎ捨て亜季菜はドガドガと部屋に上がり込んだ。

勝手に人の部屋にと怒りたいところだが、愁斗の資金源はすべて亜季菜から出ている。この部屋の借り主は架空の人物だが、元を辿ればいつかは亜季菜にたどり着く。

リビングで亜季菜はテレビをつけた。

テレビはどこも同じニュースをやっていた。

あの事件が世紀の大ニュースになることは間違いないだろう。テレビ画面には自衛隊が出動している様子が映し出されていた。

「ついに自衛隊が出動ですって。小耳に挟んだんだけど、アメリカが自分たちも調査したいって日本政府に圧力かけてるらしいわよ」

「当然でしょうね。あのような存在が存在しているとわかれば、どの国も注目します。実用性の低かった生物兵器も研究が盛んになるかもしれません」

「そうよね、そうならなんとしてもウチの会社が市場を独占したいわよね」

亜季菜には実業家の一面があり、職種は主に“貿易関係”である。

愁斗は亜季菜をしばらく見つめていた。

「僕は手を貸しませんよ？」

「なんでよ」

「ただの人間が手を出していい領域ではありません」

「愁斗くんだって、怪物を操って戦ってるじゃない？」

「……そうですね」

愁斗を難しい顔をして押し黙った。

傀儡師の奥義 召喚。

向こう側の存在を召喚して、自分の意のままに操る術。

愁斗の召喚術はまだ完璧ではない。召喚して使役することはできるが、意のままに傀儡として操ることはできない。

亜季菜はテレビの映像に釘付けだった。ライブ映像で海岸線が映し出されているが、海は波ひとつ立てない静まりようだ。あの海に怪物が現れたのが嘘だったと思わせる。

しかし、海から海岸や道路を挟んだ建物や商店、その被害は甚大なものだった。海岸に近い建物は見事に倒壊し、巨大な津波は少し先にある駅をも呑み込み、今日は電車不通になってしまった。

津波以外の力が宿っていたとしか考えられない。大津波の被害は世界各地でもあるが、日本の近代建築がことごとく破壊されるなど、誰が考えただろうか？

「あれからぜんぜん音沙汰無しよね。愁斗くんどこにいるかわ



かる？」

静かな海を見て亜季菜は残念そうにしている。

「僕に聞かないでください、そんなのわかるはず……」

助け……さい……あなた……必要……です。

訝しい顔をして愁斗は亜季菜に尋ねる。

「亜季菜さん、今なにか聴こえましたか？」

「ううん、なにも聴こえないわよ？」

「……そうですか」

「なにかあったの？」

「いえ……千葉に行きませんか？」

唐突な提案に亜季菜は一瞬言葉を失った。

「えっ？」

「千葉県に行きませんか？」

「だからなんで千葉なんかに行かなきゃいけないのよ」

「もしかしたら、今回の事件に関わることがあるかもしれない  
ん」

「だって怪物が現れたの茅ヶ崎よ、千葉って結構距離があると  
思うけれど？」

日本海と太平洋とまでの差はないが、それでも神奈川県茅ヶ  
崎と千葉県では多少の距離がある。

「確証はありませんが、僕を呼んでいる人は千葉にいます。あ  
の場所しか心当たりがありません」

「どうということよ？」

「亜季菜さんに出会う前、僕が訪れた場所のひとつです」

施設から逃げ出して半年、当時九歳の愁斗は小さな漁村を訪れた。大よそ今から五年前の出来事だ。

嵐の海と謎の歌声。

海に棲む一族同士の抗争に愁斗は巻き込まれた。

あの事件と今回の事件が関わっているか、その確証はまったくない。

ただ、強くなにかを感じるのだ。

東京湾アクアライン利用して、さらに千葉県の奥へと進む。

車を運転する亜季菜は何度も愚痴を漏らした。

「遠すぎ」

都内に比べて交通の便が良いわけでもなく、目的に地に着くまで異様に長く感じた。

「あーもお、伊瀬くん連れてくるんだったわ。愁斗くん一人になつたらすぐに免許取るのよ、いいわかった？」

「そういえば伊瀬さんはどうしたんですか？」

「置いて来たのよ、彼を巻くのなかなか大変なんだから」

「やはりそうですか、亜季菜さんを探して大変でしょうね」

「実はここだけの話、愁斗くんとの連絡用のケータイは普段アタシが使ってるケータイと違うのよ。ほら、GPS機能とかですぐに居場所わかっちゃうじゃない？」

「そうなんですか」

愁斗は亜季菜に見えないところでケータイを操作していた。伊瀬に亜季菜の居場所を伝えるメールを送っているのだ。

またしばらく運転して亜季菜は愚痴を言う。

「もうイヤ、運転したくない」

「たぶんもうすぐ着きます」

「さつきから同じことばかり言ってるじゃないのよ」

趣味がドライブの亜季菜だが、彼女の専門は“峠”だ。一般道なんて走ってもなにも楽しくない。

またしばらく走っていると、遠くの景色に海らしき輝きが見えてきた。

愁斗が呟く。

「見覚えがある景色のような気がします」

「で、この辺りのどこに行けばいいわけ？」

「さあ？」

「又ツコロスわよ」

急ブレーキでタイヤが悲鳴をあげた。

車を停車させ、亜季菜は血走った眼で助手席の愁斗の襟首を掴んだ。

「さあつてなによ、さあつて！」

「長時間の運転をさせてしまったことは謝ります。ただ僕にも漠然としか……」

助けてください。地上で頼れるのは貴方様だけなのです。

貴方様の力が必要なのです。

愁斗の脳に鮮明な声が聴こえた。

「近いです。海岸沿いを少し走ってください、きつといる」

「……わかったわよ」

少し不機嫌さを残しながら亜季菜は車を走らせた。

海岸沿いの道路から見る海は、とても寂しく波打っている。

しばらくして愁斗が叫ぶ。

「あれです！」

窓を開けて愁斗は外を指差した。

砂浜に立つ白いワンピースの女性。夏ならば似合いそうだが、冬空の下に女性がワンピースを着て立っているのは、不気味としか言いようがなかった。

間違いないと愁斗は確信した。

車を停めて愁斗はすぐに飛び出した。

砂浜を走り女性に駆け寄る。

「やはり僕を呼んでいたのは貴女でしたか」

「お待ちしておりました」

女性は母のような優しい顔で愁斗を出迎えた。

その名は瑠璃。

魔法陣の上に浮かぶ亡霊に魔導士ゾーラは悪態をついた。

「ふんっ、龍封玉を盗んで来てやっというのに、海龍を操れんとは口ほどにもない」

「おのれえ言わせて置けば」

亡霊の影は赤く揺れる炎のように憤怒していた。

揺れる影に時おり映る女の顔。

妖艶な邪悪さを持った美を誇っている。

「肉体さえ、肉体さえ完璧ならば海龍など妾の思うが侷じ

「や！」

「お前の肉体は死んだ。魂も私が召喚せねば久遠の間を彷徨っていたのだぞ、少しは役に立つてもらわねば困る」

「貴様などに使われる妾ではないわ。己が復讐のため、お主と利害が一致しておるだけじゃ」

「それでもいい、とにかく海龍を操ってもらおう」

「言われなくともわかつておるわ！」

「ならばいいのだ、頼んだぞ」

ゾーラはマントを翻し、小さな部屋を後にした。

フローリングの廊下はリビングに続いていた。

キツチンの横を抜けてリビングまで行くと、新聞を読むのをやめたタキシードの男が尋ねてきた。

「どうでしたか？」

「まだまだ時間がかかりそうだ」

「なら気長にやりましょう」

タキシードの男　シュバイツは再び新聞を読み始め、コーヒークップに手を伸ばした。

しかし、そんな態度が気に食わない者がいた。ヨーヨーで遊んでいるキラという少年だ。

「なにまったりしてんだよ、早くドーンとガンって派手にいこうぜ」

ゾーラは首を横に振った。

「若いと気が短くてかなわん。もう少し悠長に構えたらどうだ？」

「なに言っただよアニキ、早く怪獣を操って町をぶっ壊そうぜ」

「こんな若造がいるとは、我らの組織も相当な人手不足と見える」

「んだと、オレより先輩だからってデカイ面すんなよ。なんならやっか？ 相手になつてやるぜ」

二人が殺し合いをはじめる前に、シユバイツは新聞を置いて口を挿む。

「ゾーラさん、彼の實力は僕が保障しますよ。上の命令で何度かチームを組まされましたが、戦闘に関してのセンスはなかなかのものです」

「平気な顔をして嘘をつくお前の言葉だが、その言葉は信じよう」

そのままゾーラはキラに顔を向けた。

「活躍を期待する」

「大活躍するぜ」

自信に満ち溢れたキラの顔を見ることなく、ゾーラはマント翻して部屋を後にした。

せつかく遠い漁村まで来たというのに、またすぐに移動する方向で話が進んでいた。

「ちょっとなによ、また何時間も運転しなきゃいけないわけ？」

怒り出す亜季菜に愁斗は首を振った。

「いえ、もうすぐへりの迎えが来ます」

「へりが来るってどういうことよ？」

「伊瀬さん呼びました」

「愁斗クーン！ 裏切ったわね！！」

「別にそういうわけじゃありません」

怒る亜季菜と受け流す愁斗。

それを横で見えていた瑠璃は申し訳なさそうな顔をしていた。

「私のせいでごめんなさい。本来は私の方から愁斗様の元へ出向かねばならなかったのですが、広い世界のどこに愁斗様がいるのかわからなくて、結果的に愁斗様の方に私を探させてしまいました」

愁斗がする質問を代わりに亜季菜がする。

「どうして愁斗クンの力が必要なのよ？」

「それは」

瑠璃が答える前に愁斗が口を挿んだ。

「へりが来ました。続きは移動しながら話しましょう」

波を立て、砂を巻き上げ、大型へりが上空から降下してくる。

砂煙を浴びて亜季菜は咳き込んでいた。今日はなんだかツイてない日だ。

砂浜に降りたへりからスーツを着た伊瀬が降りてくる。

「皆様、お待たせいたしました。どうぞ足元にお気をつけてお乗りください」

伊瀬の横を抜けるとき亜季菜はアツカンベーをした。

三人を新たに乗せてへりは上昇をはじめ、機内で先ほどの話

が続けられた。

「私が愁斗様の力を必用とした理由ですが、それは地上人で他に頼れる方がいなかったからです」

その言葉が意味するところは、海ではなく地上で問題が起きたということだ。

亜季菜が口を挿む。

「ところで茅ヶ崎の海岸に現れた怪物なんだけど、あれあなたと関係あるわけ？」

「はい、あのような事態が起きぬように私たちはある秘法を守っていました」

それには愁斗も心当たりあがった。

「たしか龍封玉でしたか？」

「そうです、その龍封玉が盗まれてしまったのです」

以前、幼い愁斗が巻き込まれた龍封玉を巡る戦い。真珠姫の死と、瑠璃の子である海男の死によって、戦いは幕を閉じたはずだった。あれ以降の出来事は愁斗の知るところではない。

あの戦いのときも、龍封玉の在り処が愁斗に教えられることはなかった。

「抜け殻となった海男の身体は海へ還り、龍封玉だけが私の手元に残りました。龍封玉は海男の体内に隠されていたのです」と、瑠璃は目を伏せて語った。

その事実を知らなかった真珠姫の手によって、海男は刹那に止めを刺された。そして、死んだ海男は母と共に海に帰ったのだった。



事情を知る愁斗には大よそが伝わったが、亜季菜にはまだわからない部分が多い。

「その龍封玉について詳しく教えてくれないかしら？」

尋ねる亜季菜に瑠璃は深く頷いた。

「はい、龍封玉とは私たちの先祖が凶悪な龍神を封じ込めていたものです」

亜季菜はこの言葉ですべてが理解できたような気がした。

「茅ヶ崎に現れた怪物はその龍封玉とかいうのに封印されていたわね。ならまた封印して一軒略着ね」

口で言うならそれだけだが、実際は簡単にいかないのが世の常だ。

先にも述べたが龍封玉が盗まれたらしい。まずは犯人を見つけることが先決かもしれない。

愁斗が尋ねる。

「龍封玉を盗んだ相手の心当たりは？」

「確か魔導士の男がダークネス・クライと名乗ったと思います」

それを聞いた愁斗は眼を見開き、辺りの空気が一瞬にして氷結した。

ダークネスクライ  
D C とは、愁斗が復讐すべき最大の敵。社会の闇に潜む魔導結社の名前だ。

しかし、現状ではD C との戦いは休戦状態であった。

今の愁斗には失いたくないものがたくさんある。いざ、D

C との全面戦争になれば、大切なものを失うことは目に見え

ていた。

もうなにも失いたくない。

「僕は協力できないかもしれないかもしれませんが」

愁斗の言葉を聞いた瑠璃は哀しそうな顔をしていた。

「なぜですか？」

「僕はD C に目を付けられています。僕がD C に手を出せば、多くの人の命が危険にさらされます」

「だからと言って龍神を野放しにするのですか、そうなれば多くの人の命が失われるのですよ」

「……僕には関係のない人たちですから」

塞ぎこんだ愁斗は遠くの景色を眺めた。

愁斗は自分が正義だと思ったことはない。どちらかというのなら悪だろう。恐ろしい闇の力を操り、多くの人を殺してきた。

それが、なぜか最近、正しい道について考えてしまうことが多くなった。

昔の愁斗とは変わってしまった。

愁斗は自分の心が弱くなってしまったと感じていた。

守るべきものができて弱くなってしまった。闇を操ることにすら不安を覚えるようになってしまった。そのうち戦うことすらできなくなるのではと、恐怖にも似た想いを抱いていた。

へりは都内に入り亜季菜が所有する会社の屋上に降りた。

そこについても愁斗は塞ぎ込んだままだった。

自分が今何をするべきなのか、未だに迷ってしまっている。

関係ないという決断ができれば、この場で瑠璃たちと別れたらう。

しかし、その決断のできなかつた愁斗は、瑠璃や亜季菜と共に社長室へと足を運んだ。

社長室に集まったのは四人だけ。外部の者には話を聞かれない。

愁斗、瑠璃、亜季菜、伊瀬。四人はテーブルの周りにソファを囲み座った。

未だに愁斗は塞ぎ込んだまま、伊瀬は必要となければ無闇に口を挿まない。話し合いは大よそ亜季菜と瑠璃で勧められていくだろう。

まずは亜季菜が口を開く。

「今回の件に関して、アタシは瑠璃さんに全面的に協力するわよ」

「本当ですか、ありがとうございます」

純粋な気持ちでお礼をいう瑠璃の気持ちとは裏腹に、やはり亜季菜にはビジネスの思惑がある。

「龍封玉のことなのだけれど、取り戻せば再び怪物を封印できるわけなの？」

「そうですね、龍封玉を盗み出したのは地上人ですから、きっと地上のどこかにいるはずなのです」

「検討はないわけなの？」

「本来ならば大よその位置がわかるはずなのですが、なにか特殊な措置をしたらしく、まったくどこかわかりません。このま

までは龍神を操り、地上の人々だけではなく、私たち海の民にも甚大な被害がでるでしょう」

亜季菜の眼つきが変わった。

「ちよつと待って、操るって言った？」

これはチャンスかもしれないなかった。

「はい、龍封玉に封じられた龍神は、完全に解き放たれない限り操ることができません。ただし、それには力のある海の民が必ずですが」

誰にでも操れるわけではないらしいが、操れるとわかればビジネス利用の可能性が高くなる。

急に愁斗が席を立った。

「急用ができました、失礼します」

背を向けて立ち去る愁斗。

瑠璃は哀しそうな顔をして呼び止めた。

「愁斗様……」

それでも愁斗は振り向かず、部屋を後にした。

愁斗はケータイである人物を呼び出した。

カラオケ店の前で待ち合わせの相手を待つ。

待ち合わせの場所に現れたのは、同じ学校に通う同級生の撫子なこだった。

「愁斗くんお待たせ〜！」

「中に入ろう大事な話がある」

「大事にゃ話って……ま、まさかアタシに告白!？」

カラオケ店に入ろうとしていた愁斗の足が急に止まり、無表情ながらも怖い顔をして愁斗は振り返った。

「誤解だ」

「そうだよなー、愁斗くんには翔子って大切なひとがいるもんねー」

「……………」

これに関して愁斗は無言だった。足早にカラオケ店へ消えていく。

撫子もすぐに後を追った。

二人はカウンターで受け付けを済ませ、個室へと足を運んだ。個室に着いた撫子はすぐにリモコンを手にして曲を入れようとした。その撫子の手を愁斗が掴んで止める。

「歌わなくていいから」

「ええーっ、カラオケ来て歌わにやいつてありえにやーい」

「“組織”のことで大事な話があるってメール送っただろう」

「まあまあ、そんじや話は置いといて、まずは飲み物でも注文して歌でも歌おうよ」

撫子は壁に備え付けてある受話器を取った。

「飲み物お願いしまーす、ミルクティと……愁斗くんにやる？」

「なんでもいいから」

「じゃ、ミルクティ二つお願いしまーす」

受話器を置いて撫子は振り向いた。

「そんじや歌っちゃおうかにやー！」

「だから……歌わなくていいから」

「大事にや話してるとき店員が来たらイヤでしょ、それまでアタシのオンステージです！」

さっそく曲のイントロが流れ、撫子が振りつきで歌いだす。隅に座っている愁斗はヤル気なさそうだ。

「愁斗クンも次歌うんだよお」

「……さっきお前のオンステージって言ったじゃないか」

「翔子カラオケ好きにやんだよ、ちゃんとデートで連れて行ってあげにゃきゃダメだよん」

「……………」

愁斗がこっそり曲の検索をしようとしているところで、店員がドアを開けて飲み物を運んできた。

今までなにもしてなかったように、飲み物を受け取ってやり過ごした。

歌い終わって新たな曲を入れようとしている撫子。愁斗は軽い咳払いをした。

「もういいだろ、急用なんだ」

「ええっつ、あと一曲だけ、ねっねっねっ？」

「ダメだ。多くの人の命が関わっていることなんだ」

「はーい。で、話つてにゃに？」

やっと本題の話に入れた。

「『組織』が関わっていると思われることを調べて欲しい」

「それって逆スパイしろということですか？」

元々、撫子は魔導結社D C の施設 白い家 から脱走し

た子供、秋葉蘭魔らんまの息子であるということ調べてるために、愁斗と同じ学校に派遣されて来たのだ。

今や愁斗がその子供であることは明白で、D C と愁斗が停戦している今も、撫子は愁斗の傍で監視を続けていた。

もちろん、愁斗は撫子に監視されていることは承知である。

「無理なら誰でもいいから“組織”がやってる活動に詳しい奴を教えて欲しい」

「ムリムリ。ところでにやに知りたいの？」

「茅ヶ崎に現れたドラゴンに関して」

「にや!? あれってウチがやったの! ……知らにやかった」

「やっぱりお前じゃ話にならない、あの事件に詳しくそんな奴を紹介してくれ」

「ムリムリ、アタシにそんなにや権限にやいもん。アタシはただの使いっパシリ」

そのとき、撫子のケータイが鳴った。ナンバーディスプレイを見て撫子が嫌な顔をする。しかし、出ないわけにはいかなかった。

「もしもし撫子ちゃんでーす」

相手の言葉を聴いてさらに撫子は嫌な顔をした。

「はい、わかりましたー」

通話を切って撫子は愁斗と顔を見合わせた。

「来るって」

「誰が？」

「今のアタシの上司」

「……彼か？」

「愁斗クンの想像でたぶん当たり。実はあの人、ちょー変態にやの。四六時中アタシのこと盗聴して、可憐な乙女のトイレの音も聴いてるんだよ」

「その愚痴も聴いてるんじゃないか？」

「はっ、しまった！！」

ヤバイと撫子が表情に出したとほぼ同時、部屋のドアが開けられ黒尽くめの男が入って来た。

「わたくしを変態扱いするとは許せませんね」

微笑む男を見て撫子は凍りついた。

鴉のようなロングコートを着た肩には、鋭い眼つきをした本物の鴉が停まっていた。

丸いサングラスの下で唇が嗤っている。

「あなたはいつ“組織”を裏切るかわかりませんから、そのための監視です」

かけやまあやひこ  
影山彪彦は撫子に顔を向けていた。

「にや、アタシが裏切るわけにやいじゃん。そんなにやことしたらコワイコワイ」

「過去に嘘の報告をしたことをお忘れではありませんよね？」

「げっ、あ……あれは本当に愁斗クンが死んだように………思えたかも？」

かなり動揺する撫子。

過去に撫子は愁斗を追ってから巻くために、死んだと虚偽の



報告をしたことがあったのだ。けれど、その報告もすぐに嘘とバテてしまった。

彪彦はソファに腰掛け、撫子に注文を頼む。

「わたくしにも飲み物を。そうですね……外は寒かったですから、この中国茶なんて良さそうです」

メニュー表の写真を指差して撫子に見せた。

「はいはい、そのお茶一つね」

カウンターに注文を入れる撫子を置いて、彪彦は『さて』と前置いて愁斗に顔を向けた。

「茅ヶ崎に現れた籠について知りたいのでしたっけ？」

「そうだ、あれは本当に“組織”の仕業なのか？」

「そうとも言えますが、違うとも言えますね」

どっちつかずの言い方に愁斗は眉をひそめた。

「どういうことだ？」

「うちの“組織”の組員がしたことには変わりないようですが、この頃うちの“組織”は内部で多く問題をかけておりまして、いわゆる内部分裂と言うものですね」

「それはつまり今回の件は本体の意向ではないと？」

「そういうことになりますかね」

ならばもしかしたらという気持ちで愁斗に過ぎる。

「僕が今回の件に首を突っ込んででも問題はあるか？」

「どのように突っ込むかによりますが？」

「今回の計画を阻止する」

「なるほど……本部としては大喜びでしょうが、今回の件に関

わる過激派に目を付けられるかもしれないね」

ファイファイファイ

五〇：五〇と言うところだろうか。

今の愁斗が“組織”に牙を剥けば周りにも被害が及ぶ。けれど、今回の件に関しては、手を出しても“組織”本体からの制裁はない。それでも、本体以外からの制裁はあるかもしれない。彪彦は言葉を付け加えた。

「愁斗さんのことを知る者は“組織”でもごく一部です。そもそも施設から逃げ出した子供を知る者も少ないですから。過激派に狙われるとしても、我々が愁斗さんを探していた理由ではなく、今回の件を邪魔された件についてだけでしょう」

当たり前前の話として組織などの構成員が、組織の活動や事情を全て知っているはずがない。愁斗のことを知る者もいれば、知らない者もいる。彪彦は今回の過激派は知らないと判断していた。

ここで愁斗は推理を働かせていた。

「もしかして今回の事件に関わっている者を知っているのか？」

「大よその見当はついていませんよ。実は、わたくしは今回の件の収集を命じられている一人です、多くの情報を握らせていただいております」

「教えて欲しい」

「無理をなさならいと約束であれば」

愁斗が無言で頷き、彪彦も静かに頷いた。

「ではお教えしましょう。情報によりますと、鎌倉に潜伏して

いるとのこと。現地にはすでに「組織」の構成員が忍び込んでいます」

「鎌倉のどこに？」

「さて、そこまではわかりません。わかっていれば、わたくしがここでのんびり話しているはずありませんから」

「相手のメンバーは？」

「おそらく三人。それはあくまで実行部隊の数ですが。名前はゾーラ、シユバイツ、キラ。能力まではお教えできませんが宜しいですか？」

親切に答える彪彦。

それにたいして愁斗に疑心がないわけではない。

「あと一つだけいいか？」

「一つと言わず、わたくしが答えられる範囲ならばなんなりと」

「なぜ僕にそこまで情報を流す？」

「あなたが望んだ情報ではありませんか？」

「僕は今でもお前たちを恨んでいる。機会があればいつでも復讐する覚悟だ。なのになぜお前らは僕に手を出さない、そればかりか情報まで教えるなんて……」

「不満ですか？」

「……………」

愁斗は押し黙った。

不満などではない。理解ができないのだ。彪彦の態度も信用できない。相手の掌で躍らされているようで、気に食わないの

だ。

沈黙する部屋に店員が飲み物を運んできた。

明らかに気まずい雰囲気、店員は早々に仕事を済ませて出て行く。

彪彦の肩に乗っていた鴉がテーブルに降り、湯気と香りの立つティーカップに口をつけた。

そして、彪彦が口を開く。

「安っぽい味ですね」

半分以上残ったカップを置いたまま彪彦は立ち上がった。

「では、わたくしは仕事がありますので、失礼いたしますよ」

黒いコートを靡かせてドアに手を掛ける彪彦は、そこで急に振り返って撫子に顔を向けた。

「来月の振り込みは一〇パーセントカットです」

その言葉を残して彪彦は消えた。

「今でも生活厳しいのに！」

撫子が叫んだ。

難しい顔をして愁斗が立ち上がった。

「僕も先を急ぐから」

そう言つて財布から五〇〇〇円札を出してテーブルに置いた。

撫子が手を伸ばした先で部屋を出て行く愁斗の後姿。

独り部屋に残されてしまった撫子はリモコンを手に取った。

「もお、独りで歌いまくつてやるんだから！」

マイクを握る手はいつも以上に力が入っていた。

その頃、亜季菜たちは愁斗よりも早く鎌倉に向かっていた。愁斗のように情報を得たわけではなく、瑠璃の胸騒ぎがするという言葉を信じた。

今度は伊瀬が運転手を務めている。その助手席に瑠璃が座り、後部座席に亜季菜が座っていた。

瑠璃の勘とも言える言葉を信じたわけだが、それでも確証のないことに亜季菜は不満を漏らした。

「本当にこっちの方向でいいわけ？」

瑠璃は小さく頷く。

「はい、感じるのです、禍々しい怨念とも言うべき力を」

「禍々しい怨念って龍封玉が発してるわけ？」

「違います、私を呪っている者の力です」

「誰それ？」

「まだわかりません。もしかしたら畏かもしれません」

信号で車を止めた伊瀬が口を挿む。

「畏なのでしたら危険ではありませんか？」

「畏だとしても、なにか手がかりがつかめると思います」

「そうよねー、情報が不足してるのだから、こっちから畏に飛び込んでやるっていうのよ」

と、亜季菜は後部座席にそっくり返っていた。

鎌倉市内に入りしばらく経ったところで、急な震えが瑠璃の身体を襲った。

「今、なにか嫌な“死念”を感じました」

後部座席から亜季菜が乗り出した。

「“思念”？」

「はい、向こうも私に気付いているようです。確実に私を呼んでいるのを感じました」

その後、車は鎌倉駅を外れて住宅街の方向へと走った。

瑠璃は自らの体を抱き、不安と戦っていた。

自分を呼ぶ者の輪郭が現れ、正体が浮き彫りになっていく。

そして、それは確信へと変わっていった。

待ち受けている敵は亡霊だ。そこまでわかっただけで、瑠璃は自分の考えを否定した。黄泉がえってはいけない存在。

悲鳴とも叫びともつかぬ過去の幻聴が瑠璃の耳に響いた。

醜く恐ろしく、凄惨な死を遂げた姫の名。

あの戦い以降、その姫の名を呼ぶことは禁忌とされた。一族では名を喚ぶと死者が来ると恐れられているからだ。

心の臓を抉られるような激しい痛みが瑠璃を襲った。

「止めてください！」

玉の汗を掻きながら瑠璃は叫んだ。

急ブレーキが踏まれ車が止まった場所は、平凡なマンションの前だった。

車から降りてマンションに入ろうとしたが、入り口はオートロックでロビーにすら入れない。

亜季菜は少し考え、

「宅配便でも装おうかしら」

と、適当な部屋の住人を呼び出そうとしていたところで、中から住人が出てきた。

すれ違う住人に軽い会釈をしながら、何食わぬ顔で三人は開いた自動ドアに身体を滑り込ませた。

先を歩くのは瑠璃だ。

「こちらの方向です」

なにかの力を感じながら歩いているためか、エレベーターには乗らずに階段を使い、もつともなにかを感じるフロアを選んで出た。

ある部屋の前で瑠璃の足が止まった。

「おそらくこの部屋だと思います」

ドアノブを回したが、カギが掛かっけて開きそうもない。

亜季菜は伊瀬に目で合図をした。

「適当な理由をつけて管理人を呼んできて」

「はい、すぐに」

身体の向きを変えた伊瀬の瞳に、コンビ二袋を持った少年の姿が映った。

ひと目でただの少年でないと感じた。

外観のわりに大人びていて、眼の奥に狂気が宿っている。

少年はコンビ二袋を地面に置いた。

「あんたらなにやってんの？」

最初から喧嘩腰の声音だった。

伊瀬はすぐに瑠璃と亜季菜を背中に隠した。

「あなたはこの部屋の住人ですか？」

「だったらなに？」

「少々お話したいことがあります」

「ヤダね、オレには話すことなんてねえーよ」

少年はパーカーの腰ポケットに両手を突っ込んだ。

伊瀬は来ると感じて瑠璃に尋ねる。

「瑠璃様は戦えますか？」

「はい」

「では、亜季菜様のことは任せました」

伊瀬が背広の内ポケットに手を入れた瞬間、少年はパーカーから手を抜いた。同時に拳より一回り小さい丸い物体が飛んだ。それも二つ同時だ。

軽いフットワークで伊瀬はそれを躲し、優れた動体視力でそれがヨーヨーだと知った。

少年はすぐに背を向けて廊下を駆けた。

逃げたというより誘っている。その誘いに伊瀬は乗った。狭い廊下でいつ人が来るとも限らない。伊瀬としても場所を替えなかった。

少年は俊足で階段を駆け上がり、屋上を目指しているようだった。

格子状の扉を乗り越えて少年は屋上へ出た。そのすぐあとを伊瀬が追いつく。どちらもまったく息を切らせていない。

伊瀬は両手を背の後ろに隠していた。

再び少年の手から二個のヨーヨーが放たれる。

一つ目のヨーヨーを伊瀬は身を低くしながら避け、二つのヨーヨーは体勢を変えるよりも早く隠していた手を出した。

手には合金のグローブが嵌められ、逆手に握っていたナイフ



がヨーヨーを弾く。

身を低くした体勢のまま、伊瀬は勢いをつけて地面を蹴り上げた。

二個のヨーヨーを引き戻すスピードと伊瀬のスピードはほぼ互角。ただ、ヨーヨーは引き戻してから攻撃に移る。

輝くナイフの刃が少年の眼前を薙ぎ、刹那にして伊瀬の背中からもう一本のナイフが姿を見せた。

ナイフが少年の生首を裂く寸前、ヨーヨーが伊瀬の腹を殴った。

とてもヨーヨーとは思えぬ衝撃に伊瀬は後方に吹き飛ばされ、苦しそうな顔をしながらナイフを握ったままの手で眼鏡を直した。

「ただのヨーヨーには思えませんね」

「ただのヨーヨーじゃねーもん。オレの魔力を込めてあるんだぜ」

「少年だと思って甘く見れませんね。敬意を称して自己紹介をさせていただきます。わたくし伊瀬俊也と申します」

「オレにもしろってこと？ オレはキラ、魔導結社D Cの構成員。彼女募集ちゅー」

D C の名前は愁斗から何度も聞かされている。

伊瀬は逆手に握るナイフを握り直した。

「では、参ります」

「おう、かかっておいで兄ちゃん」

キラは余裕の笑みで伊瀬を迎えた。

魔導結社D C の構成員が常人であるはずがない。方や伊瀬は亜季菜の専属秘書である。

二人の力の差は？

キラに比べて伊瀬の腕はリーチが長い。だが、ヨーヨーの長さを入れれば優劣は変わってくる。尚且つ、ヨーヨーは通常のヨーヨーに比べて変則的に動いてくるのだ。

ヨーヨーを躲しながら伊瀬はチャンスを探う。

キラはまるで遊んでいるように、軽いステップを踏みながらヨーヨーを繰り出していた。

「あんなかなかやるじゃん。そこのクズどもに比べたら大したもんだよ」

「それはありがとうございます」

ナイフがヨーヨーの糸を切ろうとした。

伊瀬の眼つきが変わる。

糸は切れずにナイフに巻きつき持って行こうとしたのだ。

すぐさま伊瀬は絡みついた糸からナイフを抜いて死守する。

やはり狙われ易い糸は一筋縄では切れないようだ。

「糸を切ろうとしてもムダムダ。この糸は人肉と特別に調合された薬を与えて育てた蚕が出す糸で作ってたんだ、ただのナイフじゃ切れないぜ」

「生憎ただのナイフではないんですけどね、切れませんね」

「ただのナイフじゃないのに切れないんだダッセーな。そのナイフなにできてんの？」

「隕鉄を鍛え、特別な術法を施し、呪文を刃に刻んでいます」

隕鉄とは隕石に含まれる金属のことである。

「マジか、魔術使用かよ。あんた何者なんだよ」

「ただの会社員です」

「ウソつくんじゃないよ」

「ただ、昔お世話になっておりましたお屋敷で、この世のモノではないモノと戦う術を仕込まれました」

相手が自分たちに近いと知って少年は心を奮い立たせた。

「おもしろいじゃん。でもオレには勝てないぜ」

「私もまだ負けられません」

亜季菜を残して死ぬわけにはいかない。

それは遠い日の約束だった。

伊瀬がキラを追って消えたあと、玄関を開けようと亜季菜は立ち往生していた。

「んもお、管理人なんて呼んでる余裕ないわよ」

「あの……私が開けましょうか？」

「できるなら早く言つてよ」

「あまりにも一生懸命な様子だったので声がかげづらくて」

亜季菜と瑠璃は場所を交替して、ドアに向かって瑠璃の掌が

叩きつけられた。

物凄い打撃音と共にドアがへこむ。

「もうちょっと静かにできないわけ？」

「すみません、でも他に方法が……」

「人が来る前に早くやつちゃって」

「はい」

再び瑠璃の掌が叩きつけられ、ドアを固定していた留め具が緩んだ。

続けてもう一度、叩きつけると留め具が飛び、すぐ次の攻撃がドアを玄關に飛ばした。

「入りましょう」

「見た目に反して怪力なのね」

「ごめんなさい」

「別に謝ることじゃないけど」

二人は土足のまま部屋の中に踏み込んだ。

瑠璃は迷うことなく廊下を走り、とある部屋のカギが閉まっていることを確かめ、再びドアに掌を喰らわせた。

今度は玄關とは違い、一発でドアが外れて飛んだ。

その瞬間、禍々しいまでの鬼気が部屋から吹き込んだ。

思わず亜季菜は噎せてしまった。

瑠璃の鋭く眼つきが変わり、部屋に床に描かれた魔法陣の上に揺らめく影を見た。

「やはり貴女でしたか」

「ほほほっ、お主なら来ると思っておったぞ瑠璃姫や」

「真珠姫」

瑠璃は禁忌の名を口にした。

揺らめいていた影は燃え上がるように激しく動き、醜く恐ろしい般若の形相をした真珠姫の顔を笑った。

「ほほほほっ、恨みを晴らす機会を与えてくれた地獄の鬼に

感謝するぞ」

「亜季菜さん、下がっててください」

そんなこと言われなくてもわかっている。亜季菜は身を隠すように廊下に出て、顔だけ覗かせて動向を窺った。

瑠璃は真珠姫を正面に捉えながら、視線を動かして部屋の様子を探った。

部屋は一〇畳ほどしかなく近距離に限られる。床の大半は魔法陣で占められ、壁や天井にはお札が貼られ、窓は完全に塞がれている。

瑠璃はあることに気付いた。

「もしや、貴女はここから出られないのではないですか？」

真珠姫が言葉を返すのに、少し間があった。

「……さて、それを知ってどうするのかえ？」

「無駄な戦いはしません」

瑠璃は前を向いたまま部屋を出た。

狂気した真珠姫が襲い掛かるも、ドアの前で見えない壁に当たって引いた。

「おのれ、入って来い！」

「嫌です」

廊下になり、瑠璃は亜季菜に顔を向けた。

「どうしましょうか？」

「あたしに訊かれても困るわよ」

「そうですね、ごめんなさい。では真珠姫、龍封玉はどこですか？」

「そんな物知らぬわ！」

吠えるように真珠姫は叫んだ。

だいぶ怒っている真珠姫から、必要な情報を訊き出すのは困難に思える。

しかし、なんとしても訊き出さねばなるまい。

瑠璃は部屋の入り口ギリギリに立った。

「龍封玉が盗まれ、貴女がこの世にいる以上、その関連性を疑うのは当然です。早く龍封玉の在り処を言いなさい」

「嫌じゃ、言うてやるものか」

「龍神の力は私たちの手に余ります。眠らせて置かなければいけない力なのです」

「妾の手に余るじゃと？ 笑止じゃ、妾を誰だと思ってる？」

「驕り高ぶった咎人です」

はつきりと言いつ切った瑠璃の眼前まで真珠姫の顔を迫った。

まさに目と鼻の先で、歯を鳴らして怒る真珠姫。

瑠璃はまったく動じず、澄んだ瞳で相手を見据えていた。

その瞳から真珠姫は目を逸らした。

あまりに眩しい瞳の輝きに、真珠姫の心に宿る闇が負けた。

「おのれおのれおのれーッ！！ 妾と勝負をするのじゃ！」

「嫌です」

「この臆病者め！」

「臆病と言われてもかまいません。戦いは虚しく、悲しみと憎しみしか生みません」

「戦ずして、どうして民がついて来ようぞ。民は強い者に仕え敬うのじゃ！」

「私は海男が死んだその日に、矛を捨てました」

愛する男との間に生まれた息子を失った悲しみは、瑠璃を戦いから遠ざけ年月を重ねた。

未だに癒えぬ悲しみを瑠璃は背負っていた。

陸の男を愛したことが罪だった。

海を捨てて陸で暮らしたことが罪だった。

生まれて来てはいけない子を産んだことが罪だった。

そして、平穩に暮らしていた我が子を殺してしまったことが最大の罪。

いつの間にか、瑠璃は涙を零していた。

「どうか龍封玉を返してください」

「ほほほっ、お主が苦しむ姿のなんと極上なことか」

「私への復讐が目的なのですか？ ならば私の命を差し出しましょう。それで終わるのなら、喜んで差し出します」

「喜んでじゃと？ お主が喜ぶことを妾がすると思つてか？」

真珠姫は嘲笑いながら、部屋中を風のように舞った。

「ほほほほほほっ、愉快じゃ愉快じゃ！」

その姿を見ながら瑠璃は哀しい瞳をしていた。

歪んだ真珠姫の心を見ると哀しくなる。その心と触れ合い、正しい道に導けない自分に瑠璃は無力さを感じた。

海男が死んでしまったときと同じ、無力な自分が哀しかった。俯いた瑠璃は急に何者かの気配を感じた。

「きゃー！」

亜季菜の短い悲鳴。

振り向いた瑠璃の瞳に映る背の高い男。

魔導士ゾーラは亜季菜を後ろから拘束していた。

「キラめ、留守番を破約するとは許せん」

冷静な顔をしながら怒りを口にした。

亜季菜を人質に捕られ、目の前で瑠璃は身動きを封じられた。

こんな近くまで迫っていたのに、気配を気づかせなかったとは、かなりの手足れである。

ゾーラは亜季菜の首に手刀を食らわせ気絶させた。

「瑠璃姫と言ったかね。陸まで追って来るとはな、厄介なことだ」

「龍封玉を返してください」

「奪ったものをたやすく返すと思うかね？」

「だからお頼み申し上げます。どうかお返してください」

ゾーラはゆっくりと首を横に振った。

「できぬな、あれは世界を導くために必用なのだよ」

「世界を導く？」

「そうだ、愚かな人間どもが知らぬ存在を世に知らしめるために必用だ」

「そんなことをしてなんの意味があるのですか？」

「それは引き金となり、身を潜めていた存在たちが世界の表舞台に出るだろう。そして、異界からも多くの存在が訪れることになる。古い時代は終わり、新たな力により世界は生まれ変わる



るのだよ」

茅ヶ崎に現れた龍神はテレビで放映され、それだけでも世界は変わったかもしれない。いや、変わった。

地上に蔓延る人間は、自分たちを遥かに超えた存在を認め、畏怖し、崇拜し、絶望するかもしれない。

幻想でしかなかったことが、次々と目の前で繰り広げられ、世界は確実に変わるだろう。

それが正しいことか、間違ったことか、世界が変わったときに人々は思うだろう。

多くの人が思うこと。それが正しい道となる。

ゾーラは自らの行いが正しいと思っている。

「人間は自らが頂点に立つ存在だと驕り高ぶっている。それは目の前に人間よりも力のある存在がいらないからだ。それゆえに存在しない神などを崇め、驕りを認めようとせずに偽善で隠すのだ、莫迦らしい」

「驕っているのは貴方ではありませんか。龍神の力は貴方の自由にはなりません！」

「仮にも龍神と呼ばれる存在だが、君たちにとっては神かもしれないが、広大な宇宙、外宇宙、異界の住人たち、数え切れぬ超存在がいる。あの龍神などせいぜい都市をひとつ破壊する力しかあるまい」

「龍神の力を軽んじることが驕りだということです」

なにを持って神とするか？

人間を越えた存在ならば、それは全て人間にとっての神にな

りえるか？

それとも世界を創造したものが神か？

全知全能の存在なら神と呼ばれるか？

「存在である以上は絶対者ではありえない。崇拜の対象はいても神などおらぬよ。私は龍神の力を軽んじているわけではない、計り知れる存在であるが故に、崇拜はできないということだ。

私が驕っているか否か、それは私が成し遂げることを見て判断して欲しいものだ、龍神を操れば文句あるまい」

自信を饒舌に口にするゾーラから瑠璃は目を離さなかった。

瑠璃の瞳には力が宿り、澄んだ輝きは一点の曇りもない。

当然、ゾーラが動いた。

掌を瑠璃の眼前に突き出し、人外の呪文を口にした。

次の瞬間、瑠璃は気を失って後ろに倒れそうになってしまった。

すぐ後ろには真珠姫が死を持って待ち構えている。

瑠璃が真珠姫の手に掛かる瞬間、ゾーラが抱き寄せて防いだ。

「お前の毒牙にかけられては困る」

「瑠璃姫を妾に殺させるのじゃ！」

「困ると言っただろう。まだ使い道のある女だ。それが済んだら煮るなり焼くなり切り刻むがいい」

ゾーラは気を失っている二人の女を抱きかかえ、奥の部屋へと姿を消した。

亜季菜と瑠璃が捕まったとは知らず、伊瀬はキラと戦い続け

ていた。

ナイフを武器とする伊瀬の格闘センスは良い。そうでなければナイフなどでは戦えない。その格闘センスをキラは超えていた。

息こそ切らせてないが、伊瀬はキラの遊びに付き合わされていた。

二個のヨーヨーを手足のように操り、一定の距離から伊瀬を決して前に近づけない。

ナイフは深く刺されれば一撃で死を与える。

その一撃を繰り返す距離に近づけない。

ナイフを投げれば届くかもしれないが、武器を投げる以上は仕留めなければ次はない。

チャンスを探う伊瀬の前で、繰り返されるヨーヨーは一刹那遅れた。

好機に伊瀬は踏み込みナイフを振るう。

切っ先がキラの頬を撫で、一筋の赤い線が引かれた。

お返しにヨーヨーが伊瀬の頬を殴る。

吹き飛ばされながらも伊瀬は倒れることを耐え、口から血の混ざった唾を吐いた。

すぐにキラに視線を戻すと屈辱とも取れる行動をしていた。

キラは片手を休めてヨーヨーの代わりにケータイを持っていたのだ。

「ヤベっ、ゾーラのアニキ……留守番ならしてたしてた……だからさ……うんうん……じゃなくなって、今敵と戦ってたの、だ

から仕方ないだろ」

相手と会話しながら明らかにキラの手は鈍っていた。

甘くなつたヨーヨーの攻撃を軽やかに躲しながら伊瀬が速攻を決めた。

一撃目のヨーヨーをナイフで弾き返し、二撃目を繰り出せないキラにナイフが迫つた。

ヨーヨーが繰り出せなくとも、避けることはできる。

飛び退き躲すキラに連撃のナイフが迫り来る。

「おおつと！」

声をあげたキラの後ろは空だった。飛び退きながら屋上の端まで追いやられたのだ。

フェンスのない屋上の端で、キラはそれでもケータイから手を離さなかつた。

「だから今すぐ帰るって言うてんだろ……ウソじゃねえよ、本当に戦つてんだよ。お前から何か言つてやつてくれよ」

話を振られた伊瀬は言葉の代わりにナイフで返事をした。

切っ先は首擦れ擦れで風を鳴らした。

そして、キラはそのまま後ろに身を任せた。

背中から地上にダイブしたキラは、瞬時にヨーヨーをベランダのフェンスに引つ掛け、糸を腕に巻いて体重を支えた。ケータイは未だに手から離していなかった。

「おい、逃げたわけじゃねーぞ。帰って来いってうるさいから奴がいるから、そいつと直接話つけて来るだけだからな！」

キラは大声を出してからフェンスを登つてどこかの部屋に消

えた。

帰って来いということは、あの部屋に戻れという意味だろう。あの場所に残してきた亜季菜と瑠璃が心配で、伊瀬は全速力で屋上を出て階段を駆け下りた。

“帰れ”ではなく“帰って来い”という意味には、“来い”すなわちその場所に人がいることになる。

第三者に亜季菜と瑠璃が危害を加えられたことを伊瀬は瞬時に想像した。

あの部屋の前まで戻るとドアが破壊されていた。

すぐに伊瀬は部屋に踏み込み、廊下の横の部屋から禍々しい気配を感じた。

部屋を覗くと壁一面に張られた御札と床の魔法陣が目に入る。だが、この場所に真珠姫の姿はなかった。

部屋を出てリビングまで走った。

そこには床に寝かされた亜季菜と瑠璃の姿が、そしてゾーラとキラもそこにいた。

ゾーラは鼻のため息をついた。

「またお客さんかね」

キラはゾーラの横で伊瀬を力強く指さした。

「コイツだよコイツ、な、オレが言ってたこと信用しただら？」

「信用したが、玄関を壊されたのは大失態だ。すぐに別の場所に移らねばならない。真珠姫の降霊もはじめからやらねばならぬ」

二対一の不利な状況に、さらに二人の人質がいることで不利に拍車がかかる。

それでも伊瀬はこの場を引くわけにいかない。

「お二人を返していただきましょう」

「だとよ？」

キラはゾーラを見上げて尋ねた。

もちろんゾーラの答えは決まっている。

「それはできぬ。が、貰って行くのは一人だけだ」

必用なのは瑠璃だけだった。必要ない人質はただの足手まといだ。

ゾーラは瑠璃を抱きかかえて背中に背負った。そしてキラに合図を送る。

「人が来る前に引くぞ」

「はいはい」

人が集まれば厄介だ。

キラはヨーヨーを伊瀬に放ち、その隙にゾーラが玄関に走った。

ヨーヨーを躲しながら伊瀬は追おうとした。

それを許さぬヨーヨーの追撃。

キラが喚く。

「おいゾーラ、足封じの術ないのかよ！」

「お前のヨーヨーで相手の足を狙え」

「狙ってるつーの！」

廊下を駆けながらキラは伊瀬の追跡を封じようとする。その

二人が全速力で走れないうちにゾーラの姿が消えた。

階段を跳ねながら逃げるキラを追い詰めようとする伊瀬だったが、その足は階段を下りる前に止まった。

悔しさを顔に滲ませながら伊瀬は追うことをやめた。

奴等が逃げた理由は人が集まることを危惧したからだ。それは伊瀬にも言える。部屋に残してきた亜季菜のところへ戻らねばならない。

伊瀬はすぐさま道を引き返し、亜季菜の身柄を確保するために全速力で走った。

愁斗の操る紫苑はすぐに鎌倉へは向かわず、茅ヶ崎を経由することにした。

龍神が現れた場所を確認するためだ。

事件の当事者は鎌倉にいるかもしれないが、龍神自体はまだ近くの海域に潜んでいるかもしれない、そう考えたのだ。

やはり予想通り、海岸の近くには報道陣が集まっていた。けれど、倒壊した建物や大津波のあった地域には立ち入りの規制が敷かれていた。この一帯を取り締まっているのは警察と自衛隊だ。

空を見上げれば自衛隊の大型ヘリが旋回している。

辺りは物々しい雰囲気で喧騒していた。

集まっている人だかりの中には、津波で行方不明になった人や、家財などを心配する人々が、自衛隊や警官ともめている姿もあった。

他にもただの野次馬や、怪物を見ようと集まって来た者もいる。

紫苑も周りに溶け込んだ格好をしている。目深に帽子を被りマフラーで口元を隠しているが、冬場ではそれほど気にならない格好だろう。けれど、人間離れた妖艶さは隠しきれなかった。

紫苑の目がある男で止まった。

ロングコートを着て葉巻を吹かしている若い男が、楽しそうに辺りの人々を観察していた。

紫苑が見ていることに気付いたのか、相手の男は軽く微笑んで姿を消そうとした。

直感が働いた紫苑はすぐさま男を追う。

人ごみに紛れてしまった男。

しかし、周りの人々とは違う気を放っている者がひとり混ざっている。

紫苑は人ごみを掻き分けて広い場所に出た。

遠くを颯爽と歩くロングコートの背中。

男は紫苑が見る視線の先で細い路地を曲がった。

紫苑は見失わないように追って、男の曲がった路地を曲がった。

すると男はビルの壁に寄りかかって葉巻を吹かせていた。

「僕になにか用かな？」

男は優しい顔で紫苑に尋ねた。

しかし、紫苑はその優しい顔の奥に潜む悪魔を見抜いていた。



「何者だ？」

「初対面で何者だとは、レディにしては不躰だねえ。貴女こそ何者なのか気になるね」

「……紫苑。貴様の発する気が常人でないと語っている。あの場所 でなにをしていた？」

「人間ウオッチングさ。世紀の大事件が起き、人々がどんな反応をしているのか、生で見たくなくなってね、足を運んだわけだよ」

まだ正体の掴めない男に紫苑は鎌をかけることにした。

「D C」

その単語に男はより柔和な顔になった。

「ああ、君もそっちの世界の人間か。もっと君のことを知りたくなったよ。そうだね、これからデートでもどうかかな？」

男はポケットから車のキーを出して、指先で摘んで揺らして見せた。

「断る」

「つれないヒトだ」

相手がD Cである可能性が高い今、油断はできない。

仮にD Cだとした場合、なぜこの場所にいるのか？

彪彦の話信じるならば、今回の事件に関してD Cの構成員が動いているらしい。

他の可能性を考えるならば、追われる者。

龍封玉を盗んだD Cの一派である可能性だ。

男はなにかを思い出して目を丸くした。

「そうだ、まだ自己紹介もしていなかった。自己紹介もしないでデートに誘うなんて失礼なことをしたね。僕の名前はシュバイツ、ファーストネームだよ。親しみを込めて名前を呼んでもらうためにファミリーネームは教えないよ」

シュバイツ　それはまさに後者。龍封玉を盗んだ一派の間だった。紫苑はその名を彪彦から聞いていた。

紫苑から漲る魔気を感じてシュバイツは一步引いた。

「ヤダね、モテる男は命がいくらあっても足りない」

「龍封玉の在り処を教えてもらおう」

「なんだ、僕が誰だか完全にわかってるみたいだね。恋した女性が敵で命を狙われるなんて、まあ脚本としてはB級だけど現実起こると面白い」

「たわ言はそこまでだ、龍封玉を渡せ」

「顔を隠しているけれど、きつと君は凄い美人だと確信してる。そんなレディにはプレゼントをあげたいところだけど、残念だけど龍封玉はゾーラって人が持つてるんだ」

「ならばそいつの場所まで案内してもらおう」

「それをすると僕が怒られる。代わりに僕のピアノ演奏で勘弁してくれないかな、これでもピアノには自信があるんだ」

「教えないなら吐かせるまでだ、ピアノを弾けない手にしてる」

構えた紫苑の前でシュバイツが消えた。

「残念だけど、僕の拳は頑丈にできていてね」

声は紫苑の後ろからした。

振り向くと、道路に出て電柱にもたれるシュバイツの姿あった。

余裕なのかシュバイツは葉巻に火を点けていた。

「ピアノを弾くんだけど、僕は拳で戦うんだ。ピアノ奏者は指を大事にしなきゃいけないのは常識なんだけど、僕の拳は丈夫だからまあいいかなって。ボクシングもピアノも同じ手を使う仲間だろ？」

同じ手を使うにしても、シュバイツの言葉は常識はずれだ。

シュバイツが道路に出たことよって戦いづらくなった。

少し離れた通りには人々の集まりがある。

すぐそこを走る道路には車の往来もあった。

煙を吐いたシュバイツは戦う意志がないようにリラックスしていた。

「ここで戦うのは君にとつても不都合じゃないかな。特殊な能力を持った者が人前で戦える時代はまだ来ていないからね」

シュバイツはそう言うてから顎で車を示した。路上に止まっている車は高級車のジャガーだ。

「デートでもしようじゃないか、そして二人つきりになれる場所に行こう」

その提案に紫苑は乗らなかった。

常人の眼では限りなく不可視に近い妖系が紫苑の手から放たれ、ジャガーのタイヤをパンクさせた。

車高が低くなる愛車をシュバイツは見ながら、おでこに軽く手を添えて首を横に振った。

「君ね、少しじゃじゃ馬だよ。せっかく場所を替えようって言うてるのに、どこでやり合うに気なの？」

「一瞬で貴様を仕留め、姿を晦ませばいいことだ」

「なかなか大胆だね、君。好きだよそういう子。でもね、この場所は警官が多くて、自衛隊までいることをお忘れなく」

「そして、わたくしのような者がいることもお忘れなく」

第三の声がした。

シュバイツは驚いて紫苑から視線を外して、愛車のボンネットに腰掛ける男を確認した。続けざまに空を見上げて電線に停まる鴉を見つめた。

「影山彪彦さん……か」

シュバイツは嫌そうに呟いた。

彪彦はサングラスを直しながら、こんな話をした。

「そうですね、例えば鴉に襲われた不幸な人と言うのはどうですか？」

ひと目があっても人を殺す方法。

電線の上から鴉が鋭い眼でシュバイツを狙っている。

シュバイツはため息をついて両手をあげた。

「降参するよ。二人と一羽を巻くのは大変そうだし、影山さんがいるということは、他の奴等もうろちよろしてる可能性もあるからね」

他の奴等とはシュバイツらを探しているD C の構成員だ。

彪彦は通りの向こうに停めてある自分の車を指さした。

「ではわたくしの車にお乗りください。仲間の居場所まで案内

してもらいます」

「男とデートだなんてツイてないね」

シュバイツは逃げることを本当にやめて歩きでした。

彪彦はシュバイツの横を歩きながら紫苑に声をかける。

「あなたも来ますか？」

「行かせてもらう」

三人は車に乗り込み、シュバイツを運転手にして車は走り出した。

とあるマンションまで車を走らせ、駐車場に車を停めてマンションの中に入った。

シュバイツの横に彪彦がぴったりと付き、少し離れた後ろを紫苑が歩く。

エレベーターを降りた瞬間から、なにやらざわめき立った声が聴こえていた。

廊下の向こう側に人だかりがきている。

警官の制服が人ごみの中に見えた。

シュバイツは足を止めて彪彦に顔を向けた。

「たぶん人だかりができてる辺りの部屋かな。騒ぎを起こしたようだから、もう別の場所に移動したと思うね」

丸いサングラスの奥の瞳で彪彦はなにか言いたそうだ。それに気付いてシュバイツは言葉を付け加えた。

「僕はなにも知らなかったよ。だからここまで来たんだ」

「次の潜伏先に心当たりは？」

「ないね」

警官がいるこの場所に長いは無用だ。部屋の中を調べたいところだが、それは諦めて場所を移動するしかない。

駐車場まで戻って車に乗り込む。

車内で紫苑はシュバイツに尋ねた。

「例えばケータイとかに仲間からの連絡はないのか？」

「さあ、君たちに見張られててケータイも弄れなかったからね。しつこくバイブしてたけど無視してた」

彪彦は淡々と、

「そういうことは報告しなさい」

「年末は取り締まりが厳しいからね、運転中にケータイを使つて取り締まられたら嫌だから。ほら、やっぱり公の場では警察のお世話にならないように気をつけないと、そんなところで別の犯罪が露呈したら嫌でしょう？」

紫苑が呟く。

「私の知り合いは運転中でも構わずケータイで通話するが、一回も取り締まられたことがない」

亜季菜のことだった。

シュバイツは口の近くで指を立てて『ノンノンノン』と横に振った。

「それはね、運がいいだけ。やっぱり念には念を入れるべきだよ。僕は自慢じゃないけどゴールド免許なんだ」

「そんな話はいいですから、早くケータイを確認しなさい」

と、彪彦に促されてシュバイツはポケットからケータイを出

した。

「ああやつぱり、キラくん連絡が入ってるね。着信履歴だけじゃなくて、メールも来てるみたいだ」

メールを開いて、その画面をシュバイツは彪彦に見せた。

文面を読んだ彪彦は深く頷く。

「横浜方面に向かいましたか……シュバイツさん、なにかわたくしに隠していることはありませんか？」

「同じ組織の仲間だからね、なるべくいざこざはしたくない。嘘はつきたくないけど、教えたくもないね」

「嘘は普段から付くでしょう。そういうところが嘘つきだと言われるのですよ」

「嘘をついてるつもりはないんだけどね、口が先にしゃべってしまう。そういう病気だと思って勘弁してくれないかな？」

「おしゃべりはいいいから、早く隠していること言いなさい」

彪彦に追求されてシュバイツは小さく唸った。

「ペラペラしゃべるとゾーラに怒られるんだよ。彼は力のある魔導士だけど、ユーモアに欠けるところがあるからね。ほら、いつだったか覚えてるかい？」

「時間稼ぎはよしなさい。しゃべらないのならとりあえず車を走らせなさい。横浜に向かいますよ」

「それは階位の高い彪彦さんから、階位の低い僕への絶対命令ですか？」

「そういう気持ちがあるなら、隠していることも吐いたらどうですか？」

「まあまあ、横浜までは時間があるから、ゆっくり話してあげるよ」

エンジンを掛けてアクセルを踏む。

再びシユバイツの運転で車は走り出した。

鎌倉市から北上して横浜市に向かう。

シユバイツは運転をしながらラジオを掛けニュースを聴いた。

ニュースの内容は茅ヶ崎の怪物騒ぎで持ちきりだ。

「茅ヶ崎に出る予定じゃなかったんだ」

と、何気なくシユバイツは言った。

助手席の彪彦が尋ねる。

「どういうことですか？」

「なかなか龍神サマが言うことを聞かなくてね、目的地とぜんぜん違う方向に行つたんだよ」

「当初の目的地はどこですか？」

「今向かつてる方面だよ」

「やつぱり心当たりがあるのではありませんか。嘘を付きましたね？」

「嘘とかじゃなくて、ちょっと思いつかなかっただけさ……ああ着信だ、僕のポケットに手を突っ込んで取ってもらえますか？」

仕方なく彪彦はシユバイツのポケットからケータイを取ろうと、頭を低く瞬間に強烈な肘打ちを脳天に喰らわされた。

急ブレーキを踏んでシユバイツは車の外に飛び出した。

すぐに紫苑も追おうとしたが、後ろから衝突した車が車内が



揺らして、後部座席から運転席に飛ばされてしまった。

紫苑はダツシユボードに頭を打ち付けて、倒れている彪彦に上に乗ってしまった。

その間にもシユバイツは行き交う車の間を縫って姿を消す。

上空を飛んでいた鴉がシユバイツを追う。

車内が再び揺れた。

後ろに衝突した車に、他の車が衝突したのだ。

見事な玉突き事故を起こして、辺りは騒然とした空気に包まれた。

彪彦は愁斗の潰されながら淡々としていた。

「早く退いてください」

「すまない」

紫苑は上体を起こして、足の付いていた後部座席に戻った。

続けて彪彦も起き上がって運転席に移動した。そして、車を走らせようとしたが、キーが抜かれていてエンジンすら掛けれなかった。

「ゴールド免許が聞いて呆れますね」

ぼやく彪彦を残して紫苑はすでに外に出ていた。

渋滞になってしまった車の間を抜けてシユバイツの行方を追う。

その後ろから彪彦が追いかけてきた。

「シユバイツさんは車を奪って逃げました。わたくしたちも新しい足を捜しましょう」

「まずはひとまずこの場から逃げよう」

「そうですね、シュバイツさんはわたくしの“本体”が追っていますから大丈夫です」

二人はこの場を一刻も離れようとした。

走って逃げる途中で紫苑が彪彦に話しかける。

「今、知り合いから連絡があった」

紫苑がどこかと連絡を取っている様子はなかった。

「ああ、愁斗さんの方にですね」

「龍封玉の本来の持ち主が敵に捕まったらしい」

「詳しくは存じ上げませんが、海に棲んでいる方だとか。龍封玉が盗まれたあとに、今さら捕まりましたか」

「龍封玉を探すために陸に上がってたんだけ」

「なるほど、その辺りの情報はまったく知りませんでしたね。ですが、こういう情報なら知っていますよ」

彪彦はポケットからケータイを出した。それはシュバイツのケータイだった。

「車のキーは抜かれましたが、ケータイをわたくしから奪うのは忘れていたようですね」

丸いサングラスの下で彪彦の口がニヤリと笑った。

紫苑と彪彦は亜季菜たちと合流しようとしていた。

鎌倉駅近くで二人が待っていると、キャデラックが現れて中から伊瀬が降りてきた。

「お待たせしました、どうぞ中へ」

伊瀬は助手席と後部座席のドアを開けた。彪彦が助手席の乗

り、紫苑が後部座席に乗り込む。後部座席には亜季菜もいた。彪彦は後部座席に顔を向けて亜季菜に頭を下げた。

「はじめまして姫野さん、姫野グループ会長の妹さんですね？」

問われた亜季菜が紫苑に顔を向けると、紫苑は首を横に振った。

「亜季菜さんのことを私の口からは話してませんよ」

「じゃあなんでよ？」

それは彪彦が答えた。

「もうお聞きかもしれませんが、わたくしはD C に所属しておりませす」

「ええ、知ってるわ。愁斗くんからほとんど聞いていると思うわ」

「愁斗さんの周りの環境について徹底的に調べさせていただきました。物凄いパトロンが付いていたものです、貴女が隠蔽していたせいで愁斗さんを探すのに手間取りました。しかし、見つけてしまえば後は芋づる式に調べることは可能です」

その話を聞いて亜季菜は小さく舌打ちした。

愁斗がD C に監視されていることは、自分も監視されていると亜季菜は呑み込んだのだ。

すでにアクセルを踏む準備をしていた伊瀬が問う。

「話に区切りがついたようでしたら、目的地を言ってください」

彪彦はポケットからケータイを出して、メール本文を伊瀬に

見せた。

「ここです、舞浜にある日本最大のテーマパークです」

アクセルにかけていた伊瀬の足が外された。

「おそらく車より電車の方が早いですね」

と、提案しつつも伊瀬は亜季菜の顔色を窺った。

「電車とありえないわよ、普通列車ってみんな自由席なんですよ？」

確かに言い方によったら自由席だ。

そのまま亜季菜は続けた。

「へり呼びなさいへり」

「停める場所が……」

少し小声で言う伊瀬に亜季菜は大声を出した。

「今の時期冬休みでしょう、学校とかないの学校？ 校庭使っ

ちやいなさいよ」

茅ヶ崎から鎌倉に来る途中、鎌倉駅の近くに学校らしきものがあつたことを彪彦が覚えていた。

「この道路を海に下る途中にそれらしき物があつたような気がします」

亜季菜のゴー合図が出る前に伊瀬はアクセルを踏んでいた。

大きな道路を海沿いへと下り、彪彦が行ったとおり学校があつた。

無許可で学校の敷地内に入ってへりを待った。その間にシユバイツをとある駅で見失つた鴉が合流した。

へりは車や普通電車に比べて断然早い。

しばらくして遠く上空から猛スピードでやって来たヘリが、小学校で四人と一匹を拾って、軽く時速一八〇キロを超えるスピードで、ほぼ直線で舞浜に向かって飛行した。

冬空は日が落ちるのが早く、すでに辺りは薄暗くなりはじめている。

テーマパーク周辺のパーキングエリアに無理やりヘリを止めさせ、ヘリから降りるとテーマパークに入る前に彪彦が全員を止めた。

「ちょっと待ってください、電話をかけた相手がいいます」  
そう言っ取り出したのはシュバイツのケータイだった。

誰かに通話した彪彦は無言で相手が出るのを待った。

《おいシュバイツ、今まで何してたんだよ！》

少年の音がスピーカーの向こうから響いた。キラだ。

「残念ながらシュバイツではありませんよ」

《誰だてめえ！》

「影山彪彦です」

《……マジかよ、シュバイツはどうしたんだよ》

「途中まで追跡していたのですが、電車に乗られたところからわからなくなりました」

電話の向こうでキラが小声で話しているようだった。そして、何か物音がしてキラではない声が出た。

《電話を代わったゾーラだ》

「ゾーラさんお久しぶりですね、お元気にはしていましたか？」

《用件を手短に言え》

「このケータイに送られたメールにはリゾートと書いてありまして、ランドですかシーですか、それとも別の場所にいらっしゃるのですか？」

《キミはどこにいるのだね？》

「駐車場です」

《ならばこの場所から見えるかもしれんな。せいぜい頑張って探したまえ》

通話が一方的に切られた。

考え込む彪彦に視線は集中して、彪彦が発する次の言葉に耳が傾けられた。

「もしかしたらテーマパーク内ではないかもしれませんが、それらしい声や音がありませんでした。後ろから聴こえて来る音は強風の音くらいでしたかね」

東京湾の近いこの場所は風の強い場所も多い。

近くにいたことはわかつているが、探すのは困難を極めそうだ。

先ほど彪彦が言ったように、二つのテーマパーク内にいなければ範囲が狭まる。だが、もしもテーマパーク内にいた場合、その人口密集度から探すのは困難を極める。

駐車場でじっとしていてもはじまらず、三組と一匹に分かれて散らばることにした。

紫苑、彪彦、亜季菜と伊瀬、そして上空から鴉が探す。

この場所で彼らはなにをしようとしているのか、そのことから紫苑は考えることにした。

当初の目的地がここと言うことは、目的はテーマパークに集まる大勢の人と考えるのが自然だろう。水辺からも近く人が多く集まる場所だ。

茅ヶ崎の被害から考えて、襲う標的に近ければ自分たちの命も危険に晒される。ならば、テーマパーク内というのは、彪彦の言葉を総合しても考えづらい。

テーマパークの様子が見れて安全な場所。

この周辺には多くのリゾートホテルが存在している。

龍神は海からやって来る。

紫苑は敵の狙いをランドではなくシーに絞った。理由はランドよりシーの方が湾に近いからだ。

景色などを見渡すのであれば、高ければ高い場所のほうが良い。

そして、最後に彪彦が言っていた強風と言うキーワード。

総合して考えるにシーが一番近いホテルの屋上が適当だろう。紫苑を操る片手間で愁斗はパソコンも操っていた。ネットで自分が推理した場所に当てはまる場所を探す。そして、目星が付いた。

モノレールを使ってリゾート全体囲うラインを走り、ベイサイドステーションから目的のホテルへと向かった。

ホテルの屋上でキラは双眼鏡を覗いていた。光学ズームで遠く海面を眺め、波の動きを見張って胸を高鳴らせていた。

一方ゾーラはキラのすぐ横で、魔法陣を描き再び真珠姫を招

喚していた。

「今度こそ私をがっかりさせないで欲しい」

「わかっている、手はず通り妾を瑠璃姫の肉体に移すのじゃ」  
揺らめく影のような真珠姫のすぐ近くには、気を失って縛られている瑠璃の姿があった。

現在肉体を失い魂だけの真珠姫は、瑠璃の肉体を得ることに  
より、生前の力を取り戻すばかりか、瑠璃の力をも吸収する魂  
胆だった。

迫る魔の手に気付いたのか、今まで気を失っていた瑠璃が突  
然目を覚ました。

「ここは……真珠姫!？」

目を開けたすぐ先に般若の形相をした真珠姫の顔があった。

横を見るとゾーラやキラの姿もある。

縛られている瑠璃は首から上しか動かすことができない。絶  
体絶命とも言うべき状況に追い込まれていた。

真珠姫は邪悪な笑みを浮かべていた。

「今からお主の肉体をもらうぞ」

その言葉に瑠璃は驚きを隠せなかった。

「私の肉体を……肉体を手に入れてなにをする気なのでしょう！」

「ほほほっ知れたこと。龍神を思うが俣に操るためじゃ」

「まだそんなことを……龍神の力を甘く見てはいけません」

「お主こそ妾を甘く見てはおらぬか？」

炎が燃え上がるように真珠姫の影が揺れ、風のように翔ける  
影は瑠璃の背後に回った。



そして、瑠璃の足元に描かれた魔法陣が淡く輝きはじめる。  
ゾーラも瑠璃の背後に立っていた。

「では行くぞ……ハッ！」

ゾーラは掌底で真珠姫を突き飛ばし、瑠璃の肉体へと押し込めた。

大きく肩を揺らした瑠璃。

急に瑠璃は縛られたままの身体で地面を転がり回った。

肉体の中で魂と魂が闘っているのだ。

苦悶する瑠璃の顔の筋肉が動いた。皮が動き、肉が動き、骨格が動いている。

「大人しく消えるのじゃ！」

瑠璃の口から真珠姫の声が発せられた。

その間も瑠璃の顔は変化を続け、瑠璃と真珠姫が混ざったような顔に変化していた。

「やめ……て……ください……」

弱々しい瑠璃の声が零れた。

「ほほほほつ、そのまま消えてしまえ！」

顔は真珠姫の相が強くなっていた。

「ゾーラ、縄を解け」

真珠姫に命令されゾーラは縄をナイフで切った。

立ち上がった真珠姫の身体は、瑠璃とは比べ物にならないほど豊満で妖しかった。

しかし、まだ微かに瑠璃の面影がある。

ゾーラはそれに気付いていた。

「まだ完全に肉体を乗っ取っていないようだな。あの女の相が残っている」

「案ずるな、この躰の支配者は妾じゃ。彼奴にもう力などない」

「ならばいいが……ではさっそく龍神を呼ぶとしよう」

ゾーラは蒼く拳ほどの大きさの玉を懐から取り出し、それは真珠姫の掌に握らせた。この玉が龍封玉だった。

龍封玉は龍神を封じた玉。けれど、それ自体に封印しているわけではない。この玉は一種の鍵であり、制御装置でもあるのだ。

人間には発音できないような音で真珠姫は呪文を唱えた。

これとほぼ同時に、大津波を起こして移動する巨大生物によって、東京湾アクアラインの海底トンネルが上から押しつぶされて破壊された。

真珠姫が頭を抱えた。

「無理じゃな、水深が低すぎて泳いでくることができん」

東京湾の水深は三〇メートルにも満たない。アクアラインの手前までは水深もあり、相模湾から入ってくることはできたが、これ以上は泳いで入って来られない。

自衛隊のヘリが海面から巨体をビデオカメラで撮影していた。その全長は世界最大の豪華客船に迫るほどで、三〇〇メートルを超えているのではないかと思われる。それに伴い全高も相当なもので、アクアラインを腹で潰して海面から躰が半分以上出てしまっている。

カメラをズームするとその躰が、岩のような鱗に覆われていることがわかった。まるで岩に覆われた蛇だ。

龍神は蛇のように這いながら進みはじめた。

そのスピードは信じられないほど速く、津波を起こし海底を削って舞浜に向かって進んでいた。

ホテルの屋上でゾーラはまだ肉眼では見えぬ龍神の方角を見ている。

「あと一〇分ほどか……泳げればもっと早かったのだがな」

双眼鏡を覗いているキラも愚痴た。

「のんびり這ってなんか来たら、テーマパークで遊んでる奴等に逃げる隙を与えちまうもんな」

この時点では、まだテーマパークに避難勧告は出ていなかった。

龍封玉を胸で抱く真珠姫は目を瞑って呪文を唱え続けている。全神経を集中させて、滝のような汗を噴いている。

ゾーラは何者かの気配を感じて振り向いた。

「誰かね？」

口に巻いたマフラーを強風に靡かせながら、シルエットは凜とその場に立っていた。

「……瑠璃と龍封玉を返して貰おう」

「残念ながら瑠璃と言う海人の肉体は真珠姫に奪われてしまった」

ゾーラの言葉に紫苑は視線を真珠姫に動かした。その姿は以前、幼き愁斗が見たものとは異質だった。言われれば真珠姫と

わかるが、どこか違う。

「真珠姫であって真珠姫ではないな」

まだ瑠璃の魂がそこにあるのなら、元の姿に戻すことは可能かもしれない。

以前、龍神を操れるのは海の民だけだと聞いた。真珠姫が持っているのは明白だった。

問題はそれをどうやって阻止するかだ。

紫苑は戦闘の構えを取った。

まずは周りを片付けるしかあるまい。

紫苑は地面を蹴り上げ、氣を練り上げて妖糸を放った。まず倒すはゾーラ。

目を見開いたゾーラは常人ではほぼ不可視の糸を見切った。コートを巻くって腰に下げていたチェーンを握り放つ。

銀色のチェーンは鞭のように紫苑の妖糸を弾いた。

双眼鏡で海を見ていたキラは、そのレンズを海から屋上に向け、逆に双眼鏡が邪魔なことに気付いて肉眼で見た。

「ヤベツぜんぜん気づかなかった。いつ来てたんだよ？」

紫苑の登場にまったく気付いていなかったらしい。

こちらに顔を向けるキラにゾーラは注意を促す。

「キラ後ろに気を付ける」

「はあ？」

後ろはすぐに空中だ。

押柄な感じでキラが後ろを振り向くと、その瞳に巨大な魔鳥

の影が映った。

「ごきげんよう」

手首に黒い翼をつけている彪彦は空を飛び、空中から回し蹴りを放ってキラの顔面に喰らわせた。

「ガアッ！」

アヒルが絞められたような声を出してキラがぶっ飛んだ。

彪彦はひょいと屋上に降り立ち、手に装着されていた大きな翼は、そのまま嘴のような鉤爪に変化した。

地面に肩膝をつけてキラは口を手の甲で拭った。

「クソツタレ、よくもやったな！」

「わたくしが降りるのに邪魔でしたので、思わず蹴り飛ばしてしまっただけですよ」

「くだらねージョーダン言いやがって、死ぬえ！」

パーカーのポケットからヨーヨーを取り出してキラが彪彦に襲い掛かる。

一方、紫苑とゾーラの戦いも続いていた。

薄闇の空の下、戦いはまだまだこれからだった。

彪彦に続いて亜季菜と伊瀬も屋上に駆けつけた。

「伊瀬くん、あの蒼い玉がアレじゃないの？」

「かもしれませんが」

真珠姫の持つ蒼い玉に二人の視線は注がれた。

龍神を操ることに神経を集中している真珠姫は、周りの様子が見えていない。今が龍封玉を奪うチャンスかもしれない。

伊瀬が走った。

魔法陣の上に立つ真珠姫に飛び掛かろうとした。

その足が不意に止まる。

他の者も戦いながらも視線はそちらに配っていた。

海面から躰を出す怪物が、浅い湿地を這うように迫って来る。龍神だ、龍神がすぐそこまで迫っていた。

このときやっとテーマパークに避難勧告が出て、四六時中やっていたニュースの怪物が現実にいるという恐怖でパニックになった。

このリゾート全体の入場者数は年間で約二五〇〇万人、一日平均七万人もの人が訪れる。夜一〇時に閉園することや、近隣ホテルの宿泊数を考えると、数万もの人を一斉に避難させなければならなかった。

避難勧告をリゾートに通達したのは日本政府だが、その遅れは有事は有事と言っても相手が生物であったことが要因だろう。進路の予想ができて、いつ進路を変えともわからず、東京湾に隣接している県民たちを全員避難させるのは不可能である。ギリギリまでの見定めがあったと思われる。

自衛隊と在日米軍との連携によって、すでに攻撃態勢の準備はできていた。

しかし、踏み切れるはずがない。あまりにも人が多すぎる。津波がもつとも湾に隣接していたシーに流れ込んだ。茅ヶ崎で起きた大津波に比べれば些細なものだが、それでも人々を混乱させるには十分に足りる。

東京湾の水深が低く、水の量が少ないためか、大津波を起こせない代わりに龍神は陸に上がった。

モノレールの路線が破壊され、シー内に侵入した巨体が動く。人工的に作られた園内の海は超巨大な龍神にとっては、小さな水溜まりでしかなかった。

とぐるを巻くだけで敷地の大半を占拠し、尾の先を少し振るだけで巨大な建物が破壊される。

まさにその光景は黙示録である。

巨大な怪物によつて脆くも破壊される世界。

ゾーラは紫苑の妖系を躲して、科学が破壊される様を見つめていた。

「この場所では物足りなかったようだ」

「なにが物足りないだ！」

紫苑は怒りを露わにした。静かな怒りではなく、爆発するような怒り。それは紫苑には珍しいことであった。

怒りに任せて振るう妖系は深い闇を纏い、泣き叫びながらゾーラに襲い掛かる。

瞬時にチェインで弾いたはずの妖系は勢い治まらず、翻ったゾーラのマントを軽く斬った。

斬られたのはマントの先だったが、その断面が少し腐つたのをゾーラは眼にした。愁斗の放った妖系が物を腐食させたのだ。

一方、伊瀬は再び真珠姫から龍封玉を奪おうとしていた。これ以上世界を壊させはしない。

相手の手を掴もうと伊瀬が手を伸ばした瞬間、真珠姫の眼が

カッと見開かれた。

「邪魔はさせぬわ！」

長い爪を持った手が振り上げられ、伊瀬の顔を抉ろうとした。

「伊瀬さん！」

紫苑は叫びながら妖糸を放った。放った妖糸は目の前のゾーラではなく、真珠姫の振り上げられていた手首を飛ばした。

元は瑠璃の躰であるが已むを得ない判断だった。

真珠姫の手首を飛ばし終えた紫苑にゾーラのチェーンが襲い掛かる。

それを避ける余裕など紫苑になかった。

キラと戦っていたはずの彪彦が鉤爪から魔弾を飛ばした。

魔弾は振るわれたチェーンを弾き返して紫苑を守った。

彪彦はそのまま敵をゾーラに代えた。

「わたくしがお相手しますよゾーラさん」

残されたキラが怒鳴る。

「おい、オレを放置すんじゃねえ！」

「二人一緒にお相手するに決まっているじゃありませんか」

丸いサングラスを直しながら彪彦は口元を緩めた。

紫苑は伊瀬を助ける為に真珠姫に立ち向かった。

腕を落とされた真珠姫は憤怒していた。

「おのれ人間めッ！」

真珠姫の肉体が膨れ上がり、角ばった骨が筋肉の下から盛り出し、躰を強靱な鱗が覆った。尻からは長い尾が生えており、



それを千切って槍とすると、新しい尾がすぐに生えてきた。過去に戦ったときののように、驚異的な再生力は健在であった。紫苑が繰り出す妖系の雨を真珠姫の槍がことごとく弾く。その紫苑の技を見て、憎悪が真珠姫の底から沸々と湧き上がった。

「まさか……別人に決まっておる！」

真珠姫の脳裏を掠める幼い子の残像。

紫苑は低く声を響かせる。

「生きたまま蟲に喰われた悪夢を再現するか？」

それは過去に真珠姫が愁斗に葬られたときの恐怖だった。

急に真珠姫は壊れたように笑い出した。

「ほほほほっ、ほーほほほほっ、なんという好機。うぬにまた出逢えるとは、嬉しいぞ、妾は嬉しいぞよ」

真珠姫は龍封玉を口に含み、咽喉を大きく動かして呑み込んだ。

心底から真珠姫に漲る力。

姫でありながら雄々しく槍を構えて真珠姫は嗤った。

紫苑と真珠姫が対峙するときも、猛威を振るう龍神は暴れ狂っていた。隣接する二つのテーマパークを横断しながら、その進路を東京都心に向けていたのだ。

今度はすでに避難勧告が広範囲に出されていたが、それでも避難には時間がかかる。再び自衛隊や米軍は地団太を踏むことになると思いきや、米軍は被害を“最小限”に留めるために攻撃を開始したのだ。

厚木の海軍基地から飛び立った飛空部隊が、空に轟音を響かせて龍神に迫り、ミサイルの雨を発射した。

町が破壊され、硝煙が辺りを包む。

この世のものとは思えぬ咆哮が天を突いて響く。

巨大な龍神の頭が硝煙を雲に見立てて空に昇った。

強靱な鱗には傷一つ付いていない。傷付いたのは逃げ遅れた人々だけだった。

爆発の煙はホテルの屋上からも見えていた。

伊瀬は硬い表情をしながら眼鏡を直した。その向かいにはキラが構えていた。

彪彦はキラを伊瀬に任せ、ゾーラだけに力を注ぐことにしたのだ。

二本のナイフを構える伊瀬と、二個のヨーヨーを操るキラ。再戦である。

キラはヨーヨーを操りながら伊瀬と間合いを取る。

「あんときは逃げたんじゃないからな、ここで決着つけてやるぜ」

「一刻を争います、すぐに決着をつけましょう」

「そんなこと言うなよ、ゆつくり遊んでやるぜ！」

二人が戦う間も、龍神は街を壊し続けている。

他の者たちの戦いも続いている。けれど、その戦いは伊瀬とキラの戦いに比べ、十分な力が発揮できない戦いだっただ。

彪彦の目的は制裁でありながら、拘束を主としていた。

紫苑は真珠姫を元の瑠璃に戻すため、致命傷を与える攻撃が

繰り出せずにいた。

傷付いてもすぐに再生する真珠姫であるために、多少の攻撃は可能だが殺してはいけない。なにか瑠璃を取り戻す方法はないかと、模索しながら紫苑は槍の追撃を躲していた。

「ほほっ、どうした逃げるばかりでは芸がないぞ！」

真珠姫の華麗な槍捌きをいつまでも躲しているのは限界がある。

「瑠璃の躰を出て行け」

「もうこの躰は妾のものじゃ、瑠璃など死んだわ！」

槍が紫苑の耳を掠めた。

避けながらも紫苑は真珠姫から目を離していない。離れたが最期、串刺しにされる。

真珠姫の顔にはまだ瑠璃の面影がある。まだ瑠璃が消滅したとは思えない。そう信じたかった。

槍を構えて紫苑に襲い掛かるうとしていた真珠姫が、なぜか驚いた顔をして動きを止めてしまった。

このとき、葛西を越えて荒川を渡ろうしていた龍神の動きが不意に止まっていた。

そして、なにを思ったか川を下って東京湾に向かって進み出したのだ。

真珠姫は必死になって龍神を制御しようとするが、なにか大きな力に阻まれているようにうまくいかない。

焦る真珠姫を前に紫苑は理解に苦しんだ。なにが起こっているのかわからない。紫苑以上に当事者の真珠姫は理解できないか

った。

なんの力に阻まれているのかわからない。

まさか瑠璃が力を吹き返したのかも思ったが、そういう感じはまったくしないのだ。躰はまだ言うことを聞き、真珠姫自身には問題はない。

なのに龍神は東京湾を渡り広い海に向かって進んでいるのだ。戦いなど忘れ、目の前に紫苑がいることなど忘れ、真珠姫は龍神の制御に全神経を集中させた。

なにか大きな力が働いている。

このとき、ホテルの屋上にいた誰一人知らない事実であったが、龍神と戦闘を続けている飛空部隊は微かに気付いていた。

目を疑うことであるが、龍神の頭に人影あるのだ。

辺りは暗くなっていると言うのに、その色だけは眼に焼き付き離れない。

鮮やかに紅い影が龍神の頭に乗っている。それは確か的事实だった。

そんなことを知らない真珠姫は狂気を露わにした。

「なぜじゃ、おのれおのれおのれーッ！」

鯨のような尖った歯を鳴らしながら真珠姫は眼をギラ付かせた。

龍神に気を取られている今がチャンスかもしれない。今なら真珠姫から瑠璃の肉体と魂を取り戻せるかもしれない。

しかし、その術を紫苑は知らない。

どうしていいのかわからず紫苑は立ち尽くしてしまった。

そのとき、龍神に気を取られている真珠姫の内で、変化が起ころうとしていた。

自らに起こる変化に気付いて真珠姫は抵抗しようとした。

「おのれ瑠璃姫かつ！」

肉体の内で瑠璃の魂が必死の抵抗していた。

やはりまだ瑠璃の魂は消滅していなかったのだ。

「私を……私を……」

瑠璃の声がした。それを消そうと真珠姫が言葉を被せる。

「勝手にしゃべるでない！」

まるで腹話術をしているようだ。

「殺して……私はもう消えてしまう……だから……肉体を奪われるくらいなら、私を殺して……」

これは瑠璃の最期の抵抗だった。

もう瑠璃に力は残っていない。己の消滅を悟って最期の力を振り絞ったのだ。

紫苑はゆっくりと手を上げた。

そして、煌く輝線が世界を翔けた。

絶叫と共に割られた真珠姫が血を噴き、何かが砕ける音がした。

脅威の生命を根源たる彼女たち一族が持つ心玉が割られた。

砕け散る心玉は瑠璃の心を象徴するかのようになり、美しく輝きながら散って逝った。

核を失った肉体は急激に干からび、黒い湯気のような霊体が抜け出した。瑠璃は死んだ。しかし、邪悪な真珠姫の靈魂はま

だこの世に存在していたのだ。

「おのれ、もう容赦はせぬぞ！」

紫苑に襲い掛かる真珠姫。

だが、紫苑は冷酷に言い放った。

「……永劫の闇に苛まれるがいい」

すでに紫苑は空間を切り裂いていた。

闇色の裂け目から哀しき鳴き声が聴こえた。

泣き声が聴こえる。呻き声が聴こえる。どれも苦痛に満ちている。

渦巻く悲しみ。

裂け目から飛び出した 闇 は渦をつくって真珠姫の霊体を

呑み込んだ。

歪んだ真珠姫の顔が遠い世界へ引きずられていく。

「呪い殺してやるわ！」

最期の捨て台詞を吐いて真珠姫は裂け目に 闇 と一緒に消えた。

そして、裂け目は固く固く閉ざされたのだった。

龍神は大人しく大海原へと進み続けている。

真珠姫を失い、龍神が暴れることをやめた今、ゾーラとキラは追い詰められた。

三対二ならまだやれる。

ゾーラは決して負けを認めようとしなかった。

「お前たち勝ったと思うな、最後に勝つのはこの私だ！」  
そして、事態はまた大きく動こうとしていた。

物陰に隠れていた亜季菜が何者かに捕まり、屋上に次々と男たちが現れたのだ。その一団を率いていたのはシュバイツ。  
「遅れて申し訳ないね。真打ちは最後の登場するのがセオリーだろ」

「おお、シュバイツ！」

ゾーラは歓喜を声をあげ、キラも続いた。

「アニキ、おっせーぞ！」

シュバイツはにこやかに微笑んだ。

「それではゾーラさん、観念してもらいましょうか」

その言葉にゾーラは一瞬言葉を失った。

「……なんだと？」

「聴こえましたよね、あなたの負けです。ま、早い話が私は寝返ったということですよ」

そう、シュバイツはゾーラを裏切り、元の鞘に納まったのだ。

シュバイツが引き連れて来たのはD C の構成員。みなゾーラたちを追っていた者たちだった。

そーつとキラはシュバイツに歩み寄った。

「そゆことならオレも」

キラもゾーラを見捨てた。

「おのれ貴様ラアアアアツッ！！」

人外の獣と化してゾーラは咆えた。

味方を失い四面楚歌となったゾーラは握っていたチェインを捨てた。

降参したのではない。

「お前たちに私は裁けぬ！」

背を向けて走り出したゾーラはそのまま屋上から空に飛んだ。そのまま下に消えたゾーラ。

すぐに皆は屋上から身を乗り出して地面を確認したが、辺りはすでに暗がり包まれよく見えなかった。

その後、隈なく辺りが搜索されたが、ゾーラの死体が見つかることはなかった。

事件は多くの人々の命を奪い、多くの被害を出し、主謀者の失踪によって幕を閉じたのだった。

龍神は太平洋に出たのちに深い海の底に沈み、再び人々の前に姿を見せることはなかった。

例え龍神が海に還ったとは言え、人々は想像を絶する存在を目の当たりにした。

この事件を切欠に、ゾーラが望んだように世界は変わるかもしれない。

戦いを望まぬ瑠璃の想いは……。

暗い部屋の中で、独り愁斗は胸の苦しみを覚えた。